

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第536集

はん なみ  
**本波VIII遺跡発掘調査報告書**

一般県道侍浜夏井線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

2009

岩手県久慈地方振興局土木部  
(財)岩手県文化振興事業団

# 本波VIII遺跡発掘調査報告書

一般県道侍浜夏井線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県久慈市の一一般県道侍浜夏井線緊急地方道路整備事業に関連して平成19年度に発掘調査を実施した、本波<sup>レ</sup>遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査で本遺跡は、縄文時代前期前葉に集落が営まれていたことが明らかとなりました。中でもこの調査によって得られた出土遺物は、この時期の様相を考える上で貴重な資料を提供することができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県久慈地方振興局土木部、久慈市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成21年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 武田牧雄

## 例　　言

1 本報告書は、岩手県久慈市侍浜町本波第11地割51-32ほかに所在する本波畠遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2 本遺跡の調査は、一般県道侍浜夏井線緊急地方道路整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県久慈地方振興局土木部と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、岩手県久慈地方振興局土木部の委託を受けた財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3 本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡番号はJG10-0332、遺跡略号はHN VII-07である。

4 野外調査及び室内整理期間、調査担当者は次の通りである。

　野外調査　期　間　平成19年8月1日～11月29日

　面　積　5,700m<sup>2</sup>

　担当者　北田　熱・川又　晋・高橋聰子

　室内整理　期　間　平成19年11月1日～平成20年3月31日

　担当者　北田　熱・高橋聰子

5 本報告書の作成は、北田・高橋が本文原稿、遺構・遺物図化を行った。また、I調査に至る経過は岩手県久慈渡地方振興局土木部、II～2地理的環境は菊池強一氏、附編 自然科学分析は1を株式会社火山灰考古学研究所、2を株式会社加速器分析研究所、3を株式会社第四紀地質研究所が行った。全体の編集は北田が行った。

6 分析・鑑定は次の機関等に委託した。

　石器・石製品の石材鑑定　：　花崗岩研究会

　火山灰同定分析　：　株式会社火山灰考古学研究所

　放射性炭素年代測定　：　株式会社加速器分析研究所

　黒曜石産地同定分析　：　株式会社第四紀地質研究所

7 座標原点の測量及び空中写真撮影は次の機関に委託した。

　座標原点の測量　：　株式会社藤森測量設計

　空中写真撮影　：　東邦航空株式会社

8 本書では、以下の地形図・地質図などを使用した。

・「1/25,000・1/50,000地形図 久慈」(国土地理院)

・「東北地方デジタル地質図2」「建設技術者のための東北地方の地質」((株)東北建設協会・(独)産業技術総合研究所) 承認番号 第63500-A-20090119-001号

・「岩手県遺跡情報検索システム 2000年度版」(岩手県教育委員会事務局)

9 野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・ご助言をいただいた（敬称略・五十音順）。

菊池強一（岩手大学非常勤講師）、坂川進（八戸市博物館）、千葉啓蔵（久慈市教育委員会）

10 発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

11 調査成果の一部については、現地説明会資料・岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成19年度）等に発表してきたが、本書の記載内容が優先するものである。

## 凡　例

1 遺構図の用例は次の通りである。

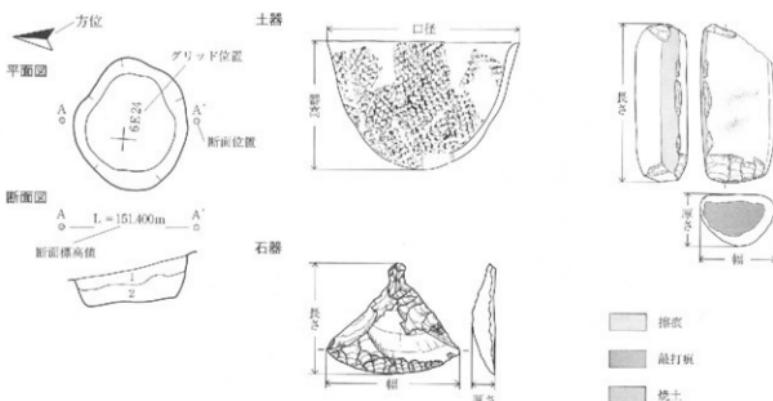
- (1) 遺構実測図の縮尺は土坑の平面・断面図1/40、焼土遺構・配石遺構・ピットの平面・断面図1/20で表した。ただし規模の関係上これに合わないものもあるため、各図版にスケール及び縮尺を付した。
- (2) 推定線は破線で表した。また、遺構同士の切り合いは実線（切られている側は間隔を空ける）で表した。
- (3) 層位は、基本層序にローマ数字、各遺構堆積土などにアラビア数字を使用した。
- (4) 土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。
- (5) 遺構図中の「P」は土器、「S」は石器または礫を表している。

2 遺物実測図の用例は次の通りである。

- (1) 遺物実測図の縮尺は縄文土器1/3、石器（剥片）2/3、石器（礫）1/3、石製品2/3で表した。ただし法量の関係上これに合わないものもあるため、各図版にスケール及び縮尺を付した。
- (2) 剥片石器については、折れ面が存在する場合、その部分の実測図も付した。
- (3) 磚石器の擦痕については、スクリーントーンで示した。また、敲打痕についても、実測図で表現できない場合についてはスクリーントーンで示した。

3 写真図版の用例は次の通りである。

- (1) 遺構写真図版については基本的に平面及び断面写真をセットとし掲載した。
- (2) 遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。



遺構・遺物凡例図

## 目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
1 遺跡の位置	2
2 地理的環境	4
3 歴史的環境	4
4 基本層序と調査区内の地形	10
III 調査と整理の方法	13
1 野外調査方法	13
(1) グリッド設定	13
(2) 試掘調査	15
(3) 重機及び人力による粗掘・造構検出	15
(4) 造構の調査方法	15
(5) 遺物の取り上げ方	16
(6) 造構の命名について	16
2 整理方法	16
(1) 造構	16
(2) 遺物 (a. 土器 b. 石器)	16
(3) 掲載図版の構成	17
3 野外調査経過	17
IV 検出遺構	19
1 遺物包含層	19
2 土坑	20
3 焼土遺構	21
4 采集石遺構	21
5 ピット	21

V 出土遺物	28
1 土器	28
(1) 群別土器	28
(2) 土器重量分布	29
(3) 土器の個体数	29
2 石器	31
(1) 尖頭器	31
(2) 石鐵	31
(3) 石錐	32
(4) 石匙	32
(5) 篦状石器	33
(6) 楔形石器	34
(7) スクレイバー類	34
(8) 二次加工ある剥片	35
(9) 微細剥離痕ある剥片	35
(10) 扱入石器	35
(11) 石核	35
(12) 剥片	36
(13) 石斧類	39
(14) 碶器類	39
(15) 敷磨器類	40
(16) 碶石錐	41
(17) 砥石	41
(18) 線刻縞	41
(19) 石皿台石類	41
3 石製品	41
VI 調査のまとめ	76
1 遺構	76
2 遺物	76
附編 自然科学分析	79
1 火山灰同定分析	79
2 放射性炭素年代測定	84
3 黒曜石产地同定分析	87
報告書抄録	120

## 図版目次

第1図 岩手県全図・遺跡位置図	1	第23図 楔形石器長幅比率	34
第2図 周辺の地形	2	第24図 スクレイバー類長幅比率	35
第3-1図 遺跡周辺の地質図	3	第25図 石核長幅比率	36
第3-2図 遺跡周辺の地形断面図	3	第26図 剥片出土分布図	37
第4図 周辺の遺跡分布図	5	第27図 碓器類長幅比率	39
第5図 基本土層(1)	7	第28図 敷磨器類長幅比率	40
第6図 基本土層(2)	8	第29図 出土土器(1)	42
第7図 基本土層(3)	9	第30図 出土土器(2)	43
第8図 基本土層(4)	10	第31図 出土土器(3)	44
第9図 基本土層(5)	11	第32図 出土土器(4)	45
第10図 基本土層(6)	12	第33図 出土土器(5)	46
第11図 グリッド配置図	14	第34図 出土土器(6)	47
第12図 遺構配置図	18	第35図 出土土器(7)	48
第13図 遺物包含層範囲図	22	第36図 出土土器(8)	49
第14図 1~9号土坑	23	第37図 出土土器(1)	50
第15図 10~17号土坑	24	第38図 出土土器(2)	51
第16図 18~25号土坑	25	第39図 出土土器(3)	52
第17図 26号土坑、1号焼上遺構、1·2号集石遺構	26	第40図 出土土器(4)	53
第18図 1~4号ピット	27	第41図 出土土器(5)	54
第19図 土器重量分布図(1~10グリッド)	30	第42図 出土土器(6)	55
第20図 石錐長幅比率	31	第43図 出土土器(7)	56
第21図 石匙長幅比率	32	第44図 出土土器(8)	57
第22図 斧状石器長幅比率	33	第45図 出土土器(9)	58

## 表目次

第1表 周辺の遺跡分布表	6	第16表 石斧類分類別石材表	39
第2表 基準点位置	15	第17表 碓器類分類別石材表	40
第3表 遺構名変更表	16	第18表 敷磨器類分類別石材表	41
第4表 土器個体数	29	第19表 土坑観察表	59
第5表 石錐先端角集計表	31	第20表 焼土遺構観察表	59
第6表 石錐分類別石材表	32	第21表 集石遺構観察表	59
第7表 石匙刃角集計表	33	第22表 ピット観察表	59
第8表 石匙分類別石材表	33	第23表 土器観察表	60
第9表 斧状石器刃角集計表	33	第24表 尖頭器観察表	72
第10表 斧状石器分類別石材表	33	第25表 石錐観察表	72
第11表 スクレイバー類分類別石材表	34	第26表 石錐観察表	72
第12表 スクレイバー類刃角集計表	34	第27表 石匙観察表	73
第13表 石核分類別石材表	35	第28表 斧状石器観察表	73
第14表 石核剥離角集計表	36	第29表 楔形石器観察表	73
第15表 剥片出土点数・重量集計表	38	第30表 スクレイバー類観察表	73

第31表	二次加工ある剥片観察表	73	第37表	礫器類観察表	75
第32表	微細剥離痕ある剥片観察表	74	第38表	敲磨器類観察表	75
第33表	抉入石器（異形）観察表	74	第39表	砥石観察表	75
第34表	剥片観察表	74	第40表	線刻礫観察表	75
第35表	石核観察表	74	第41表	石皿台石類観察表	75
第36表	石斧類観察表	74	第42表	石棒類観察表	75

## 写真図版目次

写真図版1	遺跡遠景	94	写真図版14	4号ピット、 遺物出土状況、作業風景	107
写真図版2	遺跡近景、 尾根上西側レンチ深掘	95	写真図版15	出土土器（1）	108
写真図版3	基本土層（1）	96	写真図版16	出土土器（2）	109
写真図版4	基本土層（2）	97	写真図版17	出土土器（3）	110
写真図版5	尾根上遺物包含層	98	写真図版18	出土土器（4）	111
写真図版6	1～4号土坑	99	写真図版19	出土土器（5）	112
写真図版7	5～8号土坑	100	写真図版20	出土土器（6）	113
写真図版8	9～13号土坑	101	写真図版21	出土土器（7）	114
写真図版9	14～17号土坑	102	写真図版22	出土石器（1）	115
写真図版10	18～21号土坑	103	写真図版23	出土石器（2）	116
写真図版11	22～25号土坑	104	写真図版24	出土石器（3）	117
写真図版12	26号土坑、1・2号集石	105	写真図版25	出土石器（4）	118
写真図版13	1号焼土、1～3号ピット	106	写真図版26	出土石器（5）	119

## I 調査に至る経過

本波Ⅶ遺跡は、「緊急地方道路整備事業本波工区」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

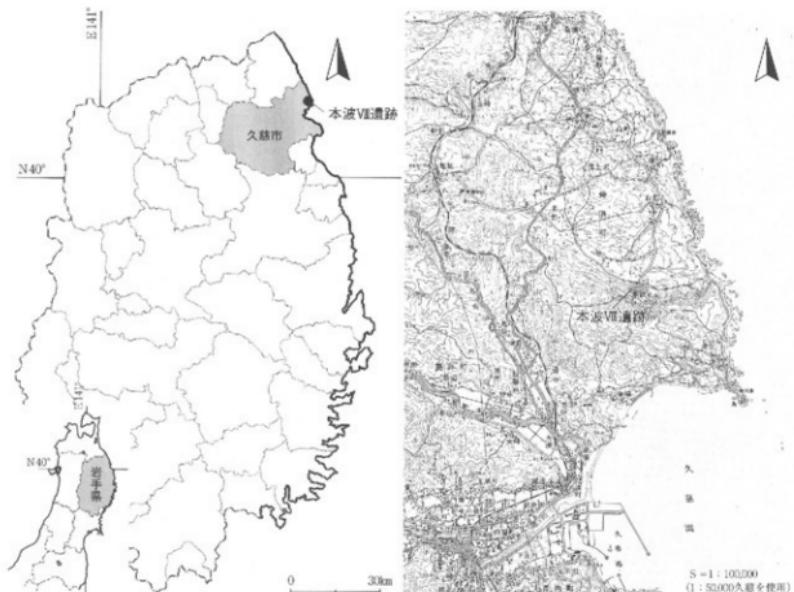
一般県道侍浜夏井線は久慈市北東部に位置し、一般国道45号（久慈市侍浜町）から一般国道395号（久慈市夏井町）に至る、一般国道45号の代替機能を持つ生活道路である。事業対象地域である「本波工区」は、険しい地形に沿って、幅員狭小、急カーブ、急勾配が連続する隘路で、安全で円滑な交通に支障をきたしている。このため、道路を整備することにより、隘路を解消し生活道路としての機能強化を図り、安全で円滑な交通を確保することを目的に事業着手したものである。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、久慈地方振興局土木部から平成18年7月19日付久地木第512号「緊急地方道路整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年8月1日～2日及び8月24日～25日に試掘調査を実施し、工事に着手するには本波Ⅶ遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年9月5日付教生第793号「緊急地方道路整備事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成19年7月31日付けで財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県久慈地方振興局土木部）



第1図 岩手県図・遺跡位置図

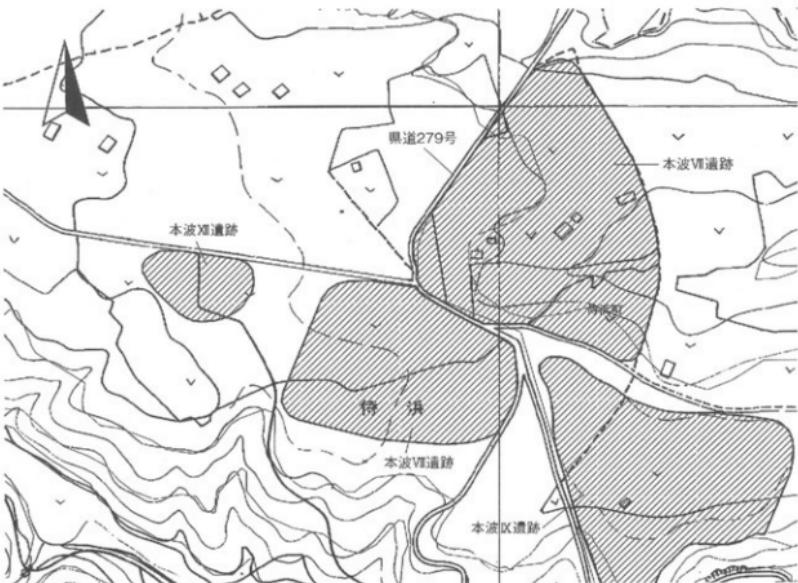
## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置

本波Ⅷ遺跡は岩手県久慈市侍浜町本波第11地割51-32ほかに所在し、国土地理院発行25,000分の1地形図「久慈」の図幅に含まれ、北緯40度14分20秒、東経141度48分36秒に位置する。遺跡は、久慈市役所の北北東に約5.6kmの場所にあり、九戸段丘（白前段丘）面である尾根状の微高地に立地している。標高は133～153m、現況は山林・原野・牧草地である。

久慈市は東に太平洋を望み、北に洋野町・軽米町、西に葛巻町・九戸村、南に岩泉町・野田村と接する岩手県沿岸北部の中核都市である。平成18年3月6日に、西に隣接していた山形村と合併し、新「久慈市」が発足した。人口は39,141人（平成17年度国勢調査調べ）、総面積623.14km<sup>2</sup>で、漁業を第一次産業とし、「海洋に拓かれた都市」づくりを目指している。

遺跡の所在する侍浜町は、久慈市の中で沿岸の北端に位置しており、高家・川津内・横沼・白前・本波・麦生などの漁港が入り組んだ海岸線に点在している。漁業は大変盛んで、ウニ・アワビをはじめ、ワカメや昆布、シャケ・イナダ・ドンコ・イカなど様々な海産物が獲れる。また、本波地区は牧畜も主要な産業であり、周辺には酪農牛のための牧草地が広がっている。加えて、ほうれん草の栽培に従事している家庭も多い。久慈湾に臨む半崎地区には久慈国家地下石油備蓄基地があり、175万㎘(全



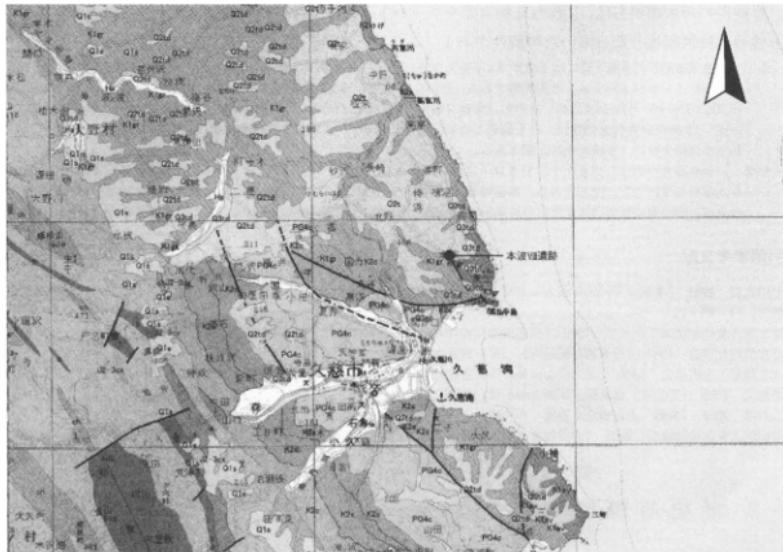
第2図 周辺の地形 (1 : 5,000)

国消費量の約3日分、岩手県内消費量の約1年分に相当）を貯蔵できるタンクが地下の岩盤を割り貫いて設置されており、地下利用施設「もぐらんびあ」が併設されている。

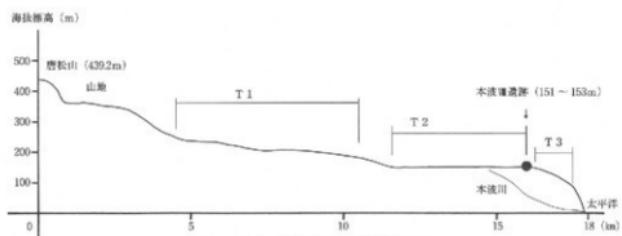
侍浜町を南北に縦断するように国道45号が通っており、沿岸部を結ぶ基幹道路となっている。久慈市侍浜支所近くの交差点から県道279号（一般県道侍浜夏井線）が海岸沿いに平行して通っており、本波神社の北側の東西に走る農免道と交差する小高い丘陵地に本遺跡がある。

## 2 地理的環境

本波Ⅶ遺跡は海拔高度133～153m、定高性があり、波状丘陵化した中期更新世の高位段丘面上（九戸面、T 1～3）に立地する。



第3-1図 遺跡周辺の地質図 (1:200,000) 社団法人東北復興協会(2006)より引用 本波Ⅶ遺跡の位置を加筆



第3-2図 遺跡周辺の地形断面図

遺跡の南には東西方向に開析谷が発達し、V字状の狭い谷底を本波川（呼称）が東流して太平洋に注いでいる。本波川の現河床面からの比高差は65~80m、典型的な岩石砂礫段丘である（第3-2図）。

段丘面は十和田起源の厚いテフラと下位に腐り礫化した薄い段丘礫層で構成されている。周辺の露頭観察によれば、その推定層厚は、段丘礫層2m、被覆テフラが9mである。テフラの上部にAT<sup>81</sup>、中部にAso-4、Toyaなどの広域火山灰を含み、Toyaの下位から赤色風化殻が発達して、段丘礫層は腐り礫化している。

段丘群の基盤岩は、北部北上山地の安家-田野畠帯（大上・永広 1988）堆積岩類と白亜紀に貫入した花崗岩に代表される（第3-1図）。

遺跡直下は両者の接觸域にあたり、遺跡南側の段丘崖には花崗岩とその風化帶が散見される。また、遺跡直下まで南東から北西方向に断層が伸び、断層を境に東側が段丘面高度を下げる<sup>82</sup>。

本波川の河床礫からは、これら花崗岩類やチャート、頁岩などの拳大の亜角礫～亜円礫が散見され、石器の母材供給地となっていた可能性がある。

※1 本波遺跡第Vb層下位にはTo-Of（火不動テフラ）由来の火山ガラスが検出されており（附編1参考）、同層下部の顯著なインボリューションと調和的である。しかし、Vb層下部泥炭質粘土層から採取した木炭片のC14・AMS年代は、15,300±70yrBP (IAAA-71749) を示し（用編2参考）、対岸に位置する麦生IX遺跡の同層C14・AMS年代45,100±1yrBP (土壤研究所No.101216) とも調和しない（附編2参考）。広域テフラの推定年代とC14年代の逆転については、地下水汚染を含め、今後の検討課題である。

※2 いわゆる九戸面は、高さとテフロクロノロジによって、上位・中位・下位の三面間に区分される。また、それを上位からT1・T2・T3とまとめ、本波遺跡はT2からT3面にかけて立地分布している。3-2図は本波Ⅶ遺跡を含む東西方向の地形断面図に本波川の河床断面を投影した。前者は切峰面図の最高点で作図してある。

### 引用参考文献

- 中川久大 1961 「本邦太平洋沿岸地方における海水準静的变化と第四紀編年」『東北大大学理学部地質学古生物学教室研究年報』54 P1-61  
 東北地方第四紀研究グループ 1969 「東北地方における第四紀海水準変化」『地図研報専報』15 P37-83  
 日本国第四紀学会 1987 「日本第四紀地図」（日）東京大学出版会  
 大上和良・永広昌之 1988 「北上山地の先宮古続堆積岩類に関する研究の総括と現状」『地球科学』42 P187-201  
 岩垣文 1998 「麦生Ⅲ・Ⅸ遺跡発掘調査報告書」 岩垣文第274集  
 八戸市 2005 「新編 八戸市史 別編 自然編」  
 社団法人東北建設協会 2006 「建設技術者のための東北地方の地質」

（菊池強一）

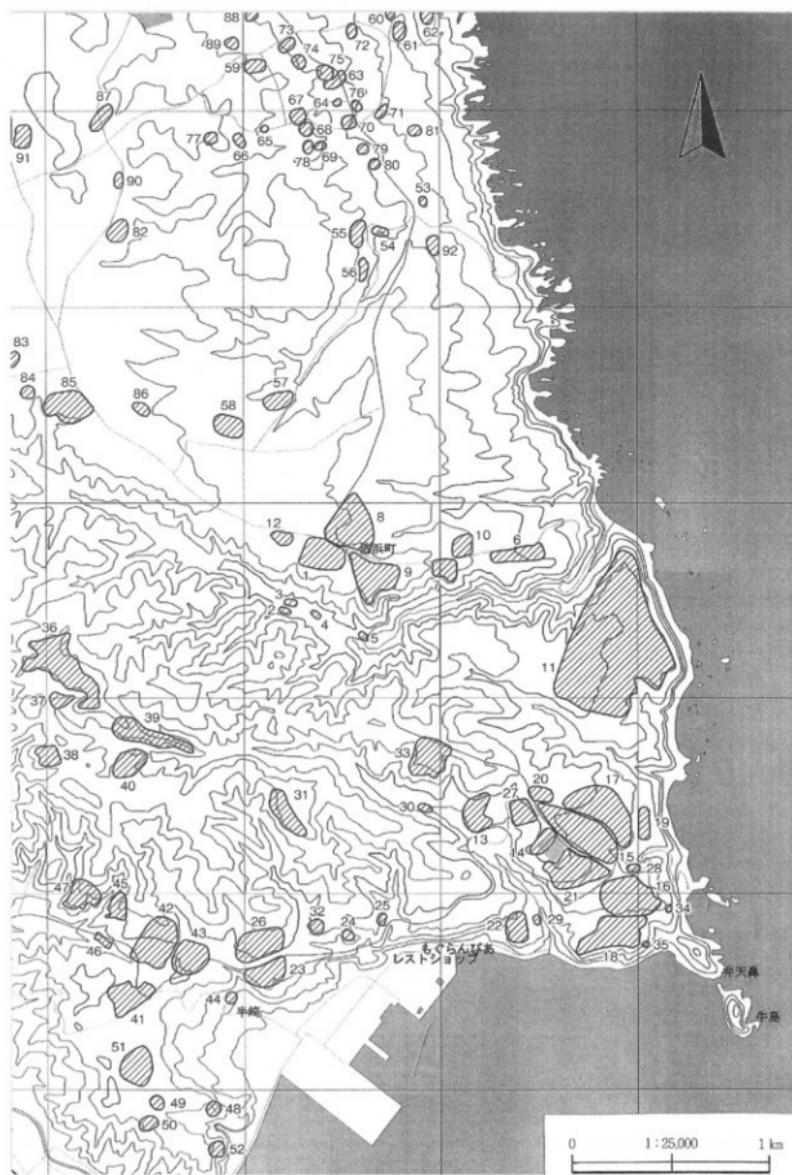
## 3 歴史的環境

久慈市では岩手県教育委員会によると、平成20年3月31日現在で615遺跡が報告されている。この中で本遺跡を中心として、久慈市侍浜町に点在する計92遺跡を第4図・第1表に示した。

久慈市内の遺跡分布については、これまで久慈市教育委員会が詳細な分布調査を行っている（久慈市教委 1990~1996）。また、久慈市教委、岩手県埋蔵文化財センターの調査報告書が多く刊行されているため、詳細はそれらに譲りたい。ここでは本遺跡近隣と縄文時代前期について触れる。

本遺跡の所在する久慈市侍浜町本波地区には現在のところ本波I~XIIの計12遺跡が確認されている（久慈市教委 1995）。遺跡の立地は、大半の遺跡が海岸段丘上に形成されており、段丘上平坦面を中心に分布が見られる。この地域一帯の遺跡密度は濃く、半崎・麦生地区（久慈市教委 1990）や侍浜地区（久慈市教委 1996）では数多くの遺跡が分布している。

縄文時代前期の遺物を出土しているのは、本波VI~Xの5遺跡で、いずれも本遺跡の周辺に分布している。本波VII遺跡からは今回の調査で出土した繊維混入の土器が検出されている。

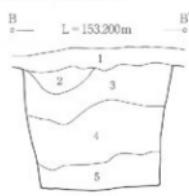


第4図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名・コード	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地	備考
1	JG1040332	本郷遺跡	散布地	國文	圓文土器、石器	佐久町本郷(11-63)	本郷古
2	JG1040351	本郷Ⅱ遺跡	散布地	國文・古代	圓文土器、石器	佐久町本郷(15-5)	
3	JG1040352	本郷Ⅲ遺跡	散布地	國文	圓文土器	佐久町本郷(11-12)	
4	JG1040353	本郷Ⅳ遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(11-12)	
5	JG1040354	本郷Ⅴ遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(11-12)	
6	JG1040355	本郷Ⅵ遺跡	散布地	國文	圓文土器、石器	佐久町本郷(12-35)	
7	JG1040357	本郷Ⅶ遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、石器	佐久町本郷(12)	H13範囲过大
8	JG1040358	本郷Ⅷ遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、石器、陶器	佐久町本郷(11-68)	H13範囲过大
9	JG1040359	本郷Ⅸ遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(7)	H13範囲过大
10	JG1100037	本郷X遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(12-34)	H13範囲过大
11	JG1040406	本郷X I 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(11)	
12	JG1040407	本郷X II 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(11)	
13	JG1100052	本郷Y 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、土器類、小住居跡	佐久町本郷(7-8)	平安元年式土器群集
14	JG110074	本郷Z 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(5)	
15	JG110077	本郷Z 遺跡	散布地	國文	圓文土器(前・中・後期)	佐久町本郷(5)	
16	JG114009	本郷Z 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(2-8)	H13範囲过大
17	JG114036	本郷Z 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、石器	佐久町本郷(4-36-10)	
18	JG114040	本郷Z 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、石器	佐久町本郷(1-32)	
19	JG111180	本郷Z 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1-36-22)	
20	JG113045	本郷Z 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1-36-23)	
21	JG113089	本郷Z 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、石器	佐久町本郷(2-39-2)	H13範囲过大・H13清秀
22	JG113123	本郷Z 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1)	
23	JG102220	本郷X I 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1)	
24	JG102215	本郷X II 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1)	
25	JG102216	本郷X III 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1)	
26	JG102220	本郷X IV 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器、鉢	佐久町本郷(2)	
27	JG111064	本郷X V 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(2)	
28	JG111065	本郷X VI 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器、鉢	佐久町本郷(2)	
29	JG112004	本郷X VII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	佐久町本郷(1)	
30	JG113056	本郷X VIII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(2)	
31	JG113051	本郷X IX 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	佐久町本郷(2)	
32	JG102220	本郷X X 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(2)	
33	JG104330	本郷X XI 遺跡	集落跡	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	佐久町本郷(2)	平安元年式土器群集
34	JG114111	本郷X XII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1)	
35	JG114112	本郷X XIII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1)	
36	JG114113	本郷X XIV 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1)	
37	JG104095	本郷XV 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1-32)	H13範囲过大
38	JG101200	本郷XVI 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1)	
39	JG101129	本郷XVII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1)	
40	JG101214	本郷XVIII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町本郷(1)	
41	JG102255	平郷I 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	更井町平郷(1)	
42	JG102256	平郷II 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	更井町平郷(2)	
43	JG102236	平郷III 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	更井町平郷(3)	
44	JG102237	平郷IV 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	更井町平郷(4)	
45	JG102238	平郷V 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	更井町平郷(5)	
46	JG102239	平郷VI 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	更井町平郷(6)	
47	JG102222	平郷VII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	更井町平郷(1)	
48	JG2040218	平郷VIII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	更井町平郷(2)	
49	JG2040219	平郷IX 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	更井町平郷(3)	
50	JG2040220	平郷X 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	更井町平郷(4)	
51	JG102285	牛崎I 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	夏井町牛崎(1-18)	
52	JG102286	牛崎II 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	夏井町牛崎(1-19)	
53	JG001359	牛崎III 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	夏井町牛崎(1-34)	
54	JG001362	牛崎IV 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	夏井町牛崎(1-44)	
55	JG001366	牛崎V 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	夏井町牛崎(4)	
56	JG001367	牛崎VI 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	夏井町牛崎(4)	
57	JG001375	牛崎VII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	夏井町牛崎(4-29)	
58	JG001233	白石I 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町白石(3)	
59	JG001259	白石II 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町白石(3-137-6)	
60	JG001260	白石III 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町白石(3-138-1)	
61	JG001261	白石IV 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町白石(3-138-2)	
62	JG001262	白石V 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町白石(3-138-3)	
63	JG001263	白石VI 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町白石(3-138-4)	
64	JG001264	白石VII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町白石(3-138-5)	
65	JG001301	熊沢I 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	佐久町熊沢(1-12)	
66	JG001302	熊沢II 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器	佐久町熊沢(1-13)	
67	JG001314	熊沢III 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町熊沢(1-14)	
68	JG001315	熊沢IV 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町熊沢(1-15)	H13範囲東東
69	JG001316	熊沢V 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町熊沢(1-16)	H13範囲東東
70	JG001306	熊沢VI 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町熊沢(1-17)	H13範囲東東
71	JG001307	熊沢VII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町熊沢(1-18)	H13範囲東東
72	JG000355	熊沢VIII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町熊沢(1-18-68)	
73	JG000356	熊沢IX 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町熊沢(1-19-68)	
74	JG000382	猪俣I 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町猪俣(1-9-38)	
75	JG000383	猪俣II 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町猪俣(1-9-7)	
76	JG000385	猪俣III 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町猪俣(1-9-56)	
77	JG000386	猪俣IV 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町猪俣(1-9-30)	
78	JG000387	猪俣V 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町猪俣(1-9-34)	H13範囲東東
79	JG001336	猪俣VI 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町猪俣(1-9-35-67)	
80	JG001335	猪俣VII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町猪俣(1-9-36-67)	
81	JG000358	猪俣VIII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町猪俣(1-9-37)	
82	JG001263	北野I 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町北野(1-52)	
83	JG001218	北野II 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町北野(1-52)	
84	JG001218	北野III 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町北野(1-52)	
85	JG000388	北野IV 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、石器、壺形、縫合、鉢	佐久町北野(1-52)	
86	JG001211	北野V 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町北野(1-52)	
87	JG001202	受付II 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町受付(1)	
88	JG001249	受付III 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)、乳牛土器、土如基、アメリカ式石瓶	佐久町受付(1-9-61)	H13範囲过大
89	JG000258	受付IV 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町受付(1-9-15)	
90	JG001233	受付V 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町受付(1-9-35)	
91	JG001109	受付VI 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町受付(1-9-35-23)	
92	JG011070	受付VII 遺跡	散布地	國文	圓文土器(後期)	佐久町受付(1-9-43)	

## 尾根上西側北基本土層



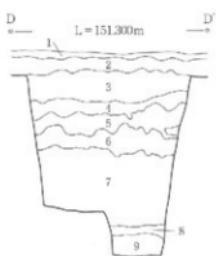
## 尾根上西側北基本土層

1. IOYR2/2 ~ 2/3 黒褐色 粘性やや弱 繊毛りやや強 表土層 繊毛樹が多い 腐化度2~3%
2. IOYR4/4 黄褐色粘土質 粘性やや弱 繊毛りやや強 カクランゼット? (繊毛りない)
3. IOYR5/6 黄褐色粘土質 粘性やや弱 繊毛りやや強 地山
4. IOYR6/6 黄褐色粘土質 粘性やや弱 繊毛りやや強 繊毛より明るい
5. IOYR6/6 明黄褐色粘土質 粘性やや弱 繊毛りやや強~中 水分若干多い 4層より明るい  
→3~5層にかけて、グラデーションのようになるほど明るくなる。

## 尾根上西側中央基本土層

1. IOYR2/2 黑褐色 粘性やや弱 繊毛りやや強 繊毛樹、水分多い 灰土
2. IOYR3/3 ~ 3/4 黄褐色 粘性やや弱 繊毛りやや強 繊毛を主体に IOYR5/6 黄褐色を薄層に散在 (植物根部分か) (遺物包含層)
3. IOYR3/4 硫褐色 粘性やや弱 繊毛りやや強 (植物灰分層)
4. IOYR4/4 硫褐色 粘性やや弱 繊毛りやや強~中 To-Cuバース(厚1mm) 3~5% 散在
5. IOYR4/6 黄褐色 粘性やや弱 繊毛り中 To-Cuバース(厚1~3mm) 2~3% 散在 (上部に多く、4層より少ない)
6. IOYR5/6 黄褐色粘土質 粘性やや弱 繊毛り中 地山層
7. IOYR6/6 明黄褐色粘土質 粘性中~やや強 繊毛りやや強

## 尾根上西側南基本土層



## 尾根上西側南基本土層

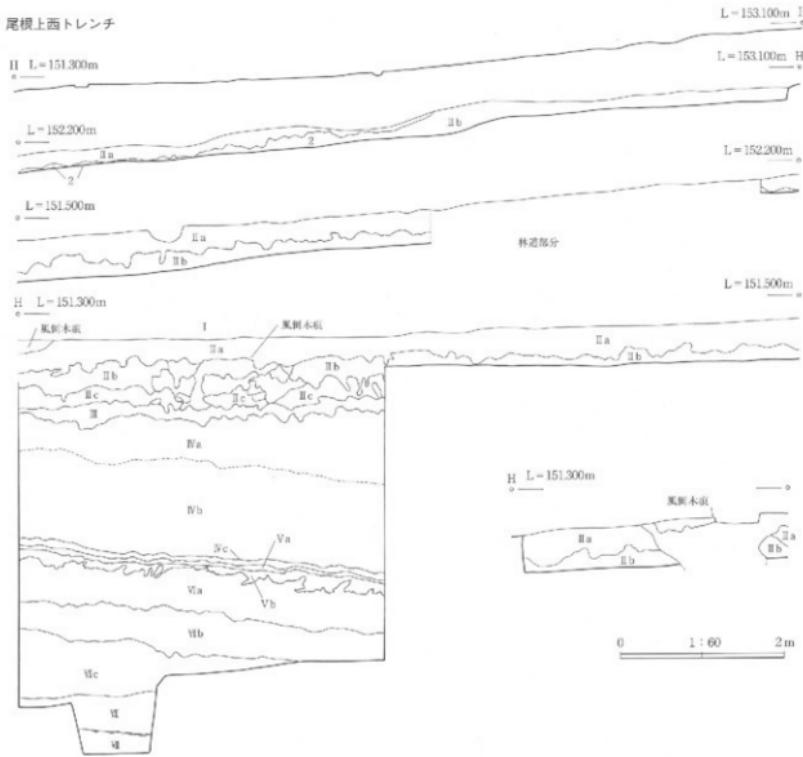
1. IOYR2/3 黑褐色 粘性強 繊毛り強 繊毛樹灰土 灰土
2. IOYR2/3 黑褐色 粘性やや弱 繊毛りやや強 II層転層
3. IOYR3/4 硫褐色 粘性やや弱 繊毛りやや強
4. IOYR4/4 硫褐色 粘性やや弱 繊毛りやや強~中 To-Cuバース(厚1mm) 2~3% 散在
5. IOYR4/6 黄褐色~4/4 黄褐色 粘性やや弱 繊毛り 中 To-Cuバース(厚1~3mm) 3~5% 散在 (上部に多い)
6. IOYR5/6 黄褐色粘土質 粘性やや弱 繊毛り中 To-Nbバース(厚5~10mm) 1~2% 散在
7. IOYR5/6 黄褐色粘土質 粘性やや弱~中 繊毛り中
8. IOYR6/6 明黄褐色粘土上 粘性強 繊毛りやや強 纖毛層 (9層より粘性。繊毛強)
9. IOYR5/8 黄褐色粘土 粘性やや強 纖毛り中~やや強 粘土層

## 北斜面北端基本土層

1. IOYR2/2 黑褐色 粘性やや弱 繊毛りやや強 表土
2. a. IOYR2/2 黑褐色 粘性やや弱 繊毛り中 变化土 (厚2~3mm) 1%未満 To-Cuバース(厚1~2mm) が層全体に分散する (2%)
3. b. IOYR2/3 黑褐色 粘性中 纖毛中 纖毛り中 To-Cu ?バース(厚1~5mm) が層全体に分散する (5%)。漏移層。
3. c. IOYR4/4 黄褐色粘土シルト 10YR3-3暗褐色シルトが64の割合で混在。粘性やや弱 繊毛りやや強 To-Cu ?バース(厚1~8mm) が層全体に分散する (15%)
4. IOYR4/6 黄褐色粘土シルト 粘性やや強 繊毛りやや強 To-Cu ?バース(厚2~8mm) を1%未満含む
5. IOYR5/6 黄褐色粘土シルト 粘性やや弱 纖毛り中 To-Cu ?バース(厚3~8mm) を1%未満含む
6. IOYR5/6 黄褐色粘土シルト 粘性やや弱 纖毛り中 加藤と同質の火山灰がブロック状 (厚8~10mm) に5%混入。ブロックは下位に集中。
7. 25YR7/6 明黄褐色粘土 粘性強 纖毛りやや強 纖丘構成

0 1:60 2m

第5図 基本土層 (1)



尾根上面トレンチ

- I 黑褐色土表層 (10YR2/3)。灌木層。

E a 細褐色土 (10YR3/3)。樹皮等表面腐葉物包含層。

b 細褐色土 (10YR3/3) に蘆薈 1 ~ 2mm の黄褐色火炭灰枝を 3 ~ 7% の密度で含む。

c 黃褐色土 (10YR4/4) に蘆薈 2 ~ 5mm の黄褐色火炭灰枝を 3 % 程度の密度で含む。

d 黃褐色細粒火炭灰 (10YR5/6)。直徑 1 ~ 2mm の浅黃褐色火炭灰を 2 ~ 3% 含む。

N a 黄褐色粗粒火炭灰 (7.5YR4/0)。非常に埋まつた角状鉢脚が発達し、本部下部 10 ~ 15 cm に著しい。

b 地盤 10 ~ 15 cm, N=60°, d=30 cm, NW で計 27 cm (斜行) 施行剤管理が促進する。一部、下部から 1 ~ 1.5 m の範囲に偽根糸原理が見られる。層の堆積は、上方に向かって薄くなるが認められ、部分的に直徑 3 ~ 5 mm の木炭片を 3 % は含む。

c 明褐色粗粒火炭灰 (7.5YR5/6)。黄褐色殘石 (10YR8/8) を + 2% 含む (直徑 3 mm)。黒雲母混入。

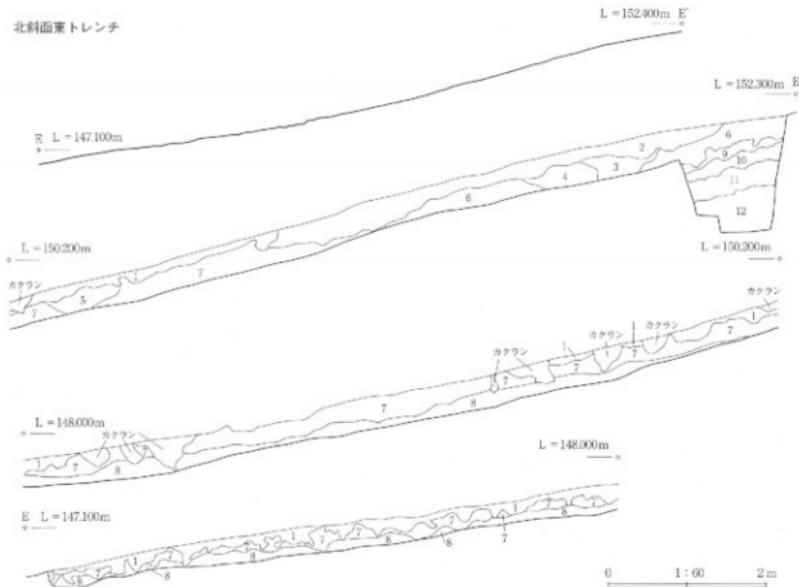
V にぶい赤褐色火炭灰 黃褐色土 (7.5YR6/6)。上部から 5 cm の範囲に黒褐色 (25YR7/1) の木炭片なし。黒化層した粘土層がレンズ状に包含される。

W a 黄褐色土 黃褐色土 (10YR5/8)。上半部に粘土層が 2 倍程度厚く、下部 20 cm に直徑 3 ~ 7 mm の発育の良い淡黃褐色石炭を 10 ~ 15% 含む。

b 明褐色赤褐色火炭灰 (7.5YR5/6)。底面下部 25 cm の部分に浅黃褐色石炭 (7.5YR3/3 ~ 6) を 1 % 発育 (直徑 2 ~ 3 mm)。底下部から 15 cm の部分はやや黒褐色火炭灰で底面 5 ~ 8 mm 大さの粘土塊 (Boudinage) 形成されたものと一層と不整合な断面) を含む。粘土塊の密度は約 7%。

c 7.5YR5/8 に細褐色火炭灰、底面 6 ~ 10 cm の部分で直徑 + 1 cm の粘土塊 (Bounded) を 20% 含む。灰化層 (直徑 2 mm) を 2 % 前後含む。

d 採掘粗粒火炭灰 (7.5YR4/4)。直徑 1 ~ 1.5 mm。球状・角閃石・鄧鐵石・安山岩・石炭 直徑 2 × 3 mm の A (角形) および火山ガラスが見られる。層中に直徑 2.5 cm ないし 3.5 ~ 4.5 cm に発達するレンズ状の 7.5YR5/8 深褐色火炭灰を含む。



北斜面東トレントン

1. 10YR2/3 黒褐色 粘性中 槌まり中 To-Cu ? バミス (径1~5mm) が層全体に分散する (5%)。二次堆積の転移層。
2. 10YR2/3 黒褐色 粘性弱 槌まり中 滲出包含層。
3. 10YR2/2 黒褐色 粘性強より共に中 To-Cu ? バミス (径1mm) 3% 蕊入。風割木痕。
4. 10YR2/2 黑褐色 粘性やや弱 槌まり中 To-Cu ? バミス (径1~3mm) 3% 蕊入。風割木痕。
5. 10YR2/3 黑褐色 粘性中 槌まりやや強 To-Cu ? バミス (径1~3mm) 5% 蕊入。風割木痕。
6. 10YR4/6 黑褐色 粘性弱 槌まり中 To-Cu バミス (径1~3mm) を層全体に跨る: 3%、炭化物5%含む。
7. 10YR4/4 黑褐色土質と 10YR3/3 黑褐色の64%の割合で混合。粘性やや強 槌まりやや強 To-Cu ? バミス (径1~8mm) が層全体に分散する (15%)。
8. 10YR4/6 黑褐色土質 粘性やや強 To-Cu ? バミス (径2~8mm) を1% 含む。
9. 10YR4/4 黑褐色土質と 10YR3/3 黑褐色の64%の割合で混合。粘性中 槌まりやや強 To-Cu バミス (径1~8mm) を15%含む。
10. 10YR5/8 黄褐色 粘性中 槌まり中 To-Nb バミス (径3~8mm) が下位に5% 蕊入。
11. 10YR5/8 黄褐色粘質 粘性やや強 槌まり強 To-Nb バミス 1% 滲出混入。転移層。
12. 10YR5/8 黄褐色粘質 粘性やや強 槌まり強

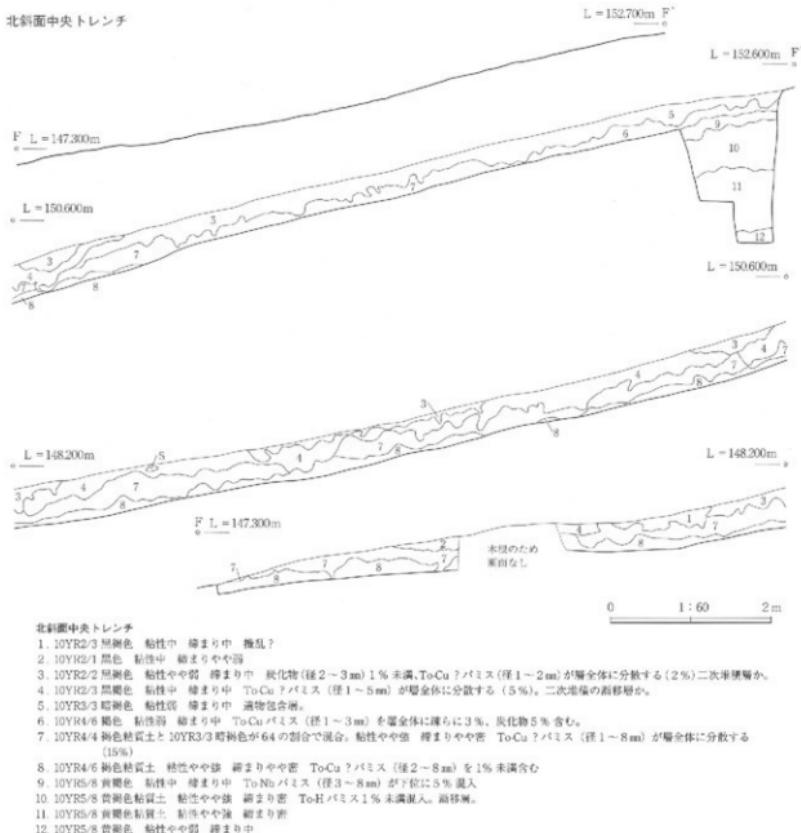
第7図 基本土層(3)

また、滻合遺跡からは縄文時代前期初頭の纖維混入土器を埋設した堅穴住居跡1棟が検出されている（久慈市教委 1989）。平沢I遺跡（岩畠文 1988）や中長内遺跡（久慈市教委 1988）でも縄文時代前期前業の堅穴住居跡が検出されており、縄文時代前期初頭～前業の集落が多く見つかっている。

#### 引用参考文献

- 岩手県教委 2008 「岩手県遺跡台帳」
- 久慈市教委 1988 「中長内遺跡」久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
- 久慈市教委 1989 「滻合遺跡」久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 久慈市教委 1990 「久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ」久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
- 久慈市教委 1995 「久慈市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅵ」久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書第19集（財）岩畠文 1988 「平沢I遺跡発掘調査報告書」岩畠文第125集
- （財）岩畠文 1999 「大芦I遺跡発掘調査報告書」岩畠文第306集

#### 4 基本層序と調査区内の地形

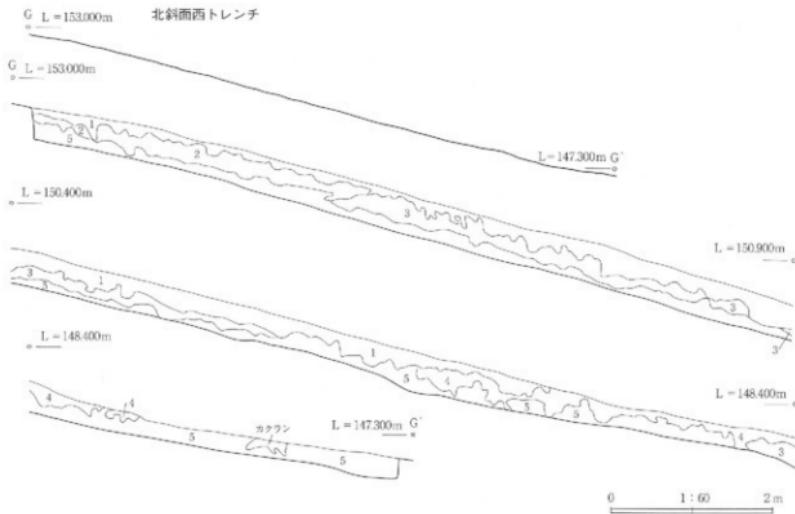


第8図 基本土層 (4)

#### 4 基本層序と調査区内の地形 (第5~10図)

本遺跡全体の基本層序は以下の通りである。基本的には尾根上西トレンチ深掘の層序に従うが、I層に関しては北斜面北端基本土層も考慮した。

- I a 黒褐色土 (10YR2/2~3)。腐植土 (表土)。
- b 黒褐色土 (10YR2/2)。
- II a 暗褐色土 (10YR3/3)。縄文時代前期前葉遺物包含層。
- b 暗褐色土 (10YR3/3) に直径1~2mmの黄褐色火山灰粒を3~7%の密度で含む。
- c 褐色土 (10YR4/4) に直径2~5mmの黄褐色火山灰粒を3%程度の密度で含む。



北斜面西トレンチ

1. 10YR3/3 黄褐色 粘性弱 緩まり中 遺物包含層。

2. 10YR4/6 黄褐色 粘性弱 緩まり中 To-Cuパミス (径1~3mm) を局全体に疊らし3%、炭化物5%含む。

3. 10YR4/4 棕褐色土質と10YR3/4 明褐色の6.4混合層 粘性中 緩まりやや強 To-Cuパミス (径1~8mm) を15%含む。

4. 10YR2/3 黄褐色 粘性中 緩まりやや強 To-Cuパミス (径2~3mm) を疊らし包含する。3層土をブロック状 (径5~8mm) に5%含む。1層と5層の崩落層。

5. 10YR5/8 黄褐色 粘性中 緩まりやや強 To-Cuパミス (径1~5mm) を1%含む。

第9図 基本土層 (5)

III 黄褐色細粒火山灰層 (10YR5/6)。直径1~2mmの浅黄橙色火山灰を2~3%含む。

IV a 浅黄橙色細粒火山灰層 (7.5YR8/4)。非常に縮まった角柱状節理が発達、下部10~15cmに著しい。

b 層厚10~15cm、N60°E、傾斜30°NWで計27層の斜行葉理層が発達する。一部、下部から1~1.5mの範囲に偽表葉理が見られる。層の堆積は、上方に向かって級化が認められ、部分的に直径3~5mmの大木炭片を3%ほど含む。

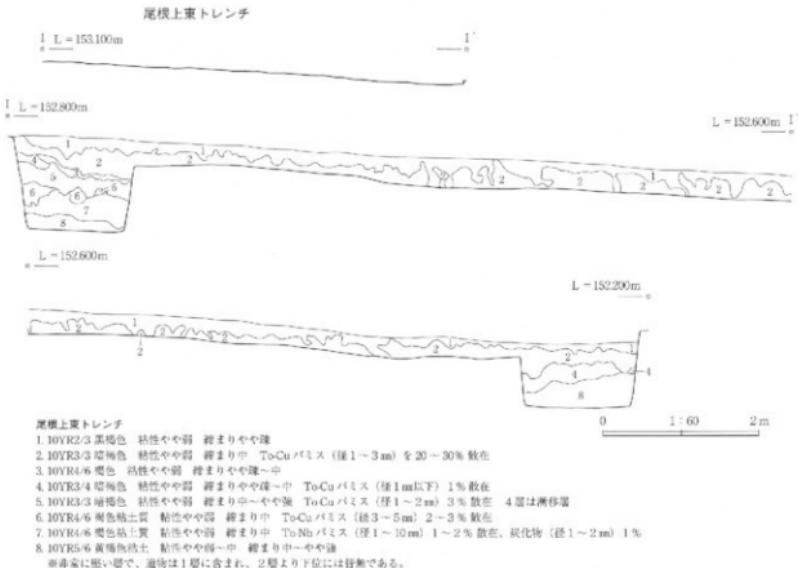
c 明褐色砂質粗粒火山灰層 (7.5YR5/6)。黄橙色軽石 (10YR8/8) を±2%含む (直径±3mm)。黒雲母混入。

V にぶい橙色火山灰質粘土層 (7.5YR6/4)。上部から5cmの範囲に赤黒色 (2.5YR1.7/1) の木炭片ないし泥質化した粘土層がレンズ状に包含される。

VI a 黄褐色浮石質火山灰層 (10YR5/8)。上半部は軽石粒が2%前後含む。下部20cmに直径3~7mm大の発泡の良い淡黄橙色軽石粒を10~15%含む。

b 明褐色浮石質火山灰層 (7.5YR5/6)。最下部より25cmの部分に浅黄橙色軽石 (7.5YR8/3~6) を1%含む (直径2~3mm)。最下部から15cmの部分はやや泥質火山灰で直径5~8mmの大の粘土塊を含む。粘土塊の密度は約7%。

c 明褐色火山灰層 (7.5YR5/8)。底から約30cmの部分まで直径±1cmの粘土塊を20%含む。



第10図 基本土層 (6)

炭化粒 (直径2mm) を2%前後含む。

VII 褐色粗粒火山灰層 (7.5YR4/4)。層厚1m+a。輝石・角閃石・磁鐵鉱・安山岩・軽石、直径2×3mmの角礫および火山ガラスが見られる。層中に直径2.5×3mmないし1.5×2mm大に堆積するレンズ状の明赤褐色火山灰 (5YR5/8) を含む。

VIII 段丘構成礫層。

調査区の地形を概観すると、調査区は東西に走る尾根状の段丘を南北に縦断した形となっており、現況での標高最高値は153m (尾根上7D区)、標高最低値は128m (南斜面17C区) である。調査区は南北に約160m、東西に約50mの範囲で、斜面の傾斜角は北斜面が約85.3°、南斜面が約17.44°である。

調査区の現況地形は山林、原野、牧草地で構成されている。主体は山林で尾根状を呈しており、北斜面の比高差は約10mで緩やかであるのに対し、南斜面は約25mあり、急傾斜で南北側の谷へ向かって落ち込んでいく。尾根上区のほぼ中央を東西に横断するように林道が通っており、やや平坦に造成されている。また、南斜面には伐採した木を運搬する際に作られたと考えられる重機道が北西から南東に向かって走っている。調査区北端の1~3区は傾斜を平坦にする地形改変がされており、牧草地として利用されていたと見られる。

調査区は現況では大半が松林であり、伐採後に残った切株が無数残存していた。また、枯木や枯枝、背丈を越える草が繁茂しており、これらの除去作業に丸四日間を費やした (業者委託による)。松の根は地中まで深く入り込んでおり、I層を擾乱するのみでなく、II層の遺物包含層やIII層まで深く到達しているものもあった。この影響により、層序が乱れ混在する箇所も認められた。

層序については、I層は森林腐植土や人工的に地形改変が行われた表土で、遺構は存在しないが縄文時代の遺物が表探できる。現況では、Ia層が層厚10~30cmで、尾根上は全体に薄い傾向がある。Ib層は層厚10~20cmで、尾根上区には見られず北斜面下位に存在する。土色は黒褐色を中心で、軟質であり、部分的に炭化物を多く混入する。

II層は暗褐色土主体に構成されており、上部のIIa層が縄文時代前期初頭の遺物包含層である。層厚は10~30cmで、北斜面1~3区及び南斜面の大半は存在しない。遺物包含層の範囲についてはIV検出構造述べる。IIb層は十和田中振テフラ(To-Cu)を、またIIc層は当初、十和田南部テフラ(To-Nb)と思われたが、分析の結果では十和田中振テフラとのことである(附編1参照)。これらを混入する層はそれぞれ層厚10~30cmである。

III層は暗褐色で構成され、十和田八戸テフラを2~3%含み非常に締まっている。

IV層は浅黄橙色主体で構成され、堆積状況からa·bの2層に分けられる。IVa層は層厚40~80cmで、粒径の大きい節理層が認められた。IVb層は層厚約100cmで、この中に斜行した葉理層が発達している。IVc層はIV層最下層にあり、層厚は10cm弱と薄い。黄橙色の軽石粒子が認められ、IV層全体が十和田大不動テフラに由来するものと思われる。

V層にはぶい橙色で構成される火山灰質粘土層で、上部に層厚5cm程度の炭化物層が認められる。この箇所における本炭片のAMS年代は、 $15,300 \pm 70$ yrBP(IAEA-71749)の測定結果が得られている(附編2参照)。V層とVI層の境界には北斜面へ向かってインボリューションが認められる。

VI層は黄褐色~明褐色テフラで構成され、堆積状況からa~cの3層に区分される。a層下位には軽石粒子が多く含まれる。b層の最下位は粘質の強い明褐色火山灰層で、直径1cm弱の粘土塊を含んでいる。c層下位には若干の炭化物粒を混入する。

VII層は褐色テフラで構成されるが、掘削最下位のため層厚は3m以上あると考えられる。上面から40~50cm下位から明赤褐色の火山灰と考えられる堆積が認められ、分析結果は不明である。阿蘇4テフラの可能性がある。

VIII層は斜面上部の西トレントでは確認できなかったが、北斜面下位では段丘構成層の最上部の砂礫層までを確認している。IX層岩盤層までの層厚は不明である。

以上、I~VIII層までの各層とIIa層の層序関係は、軽微な不整合の関係にある。

### III 調査と整理の方法

#### 1 野外調査方法

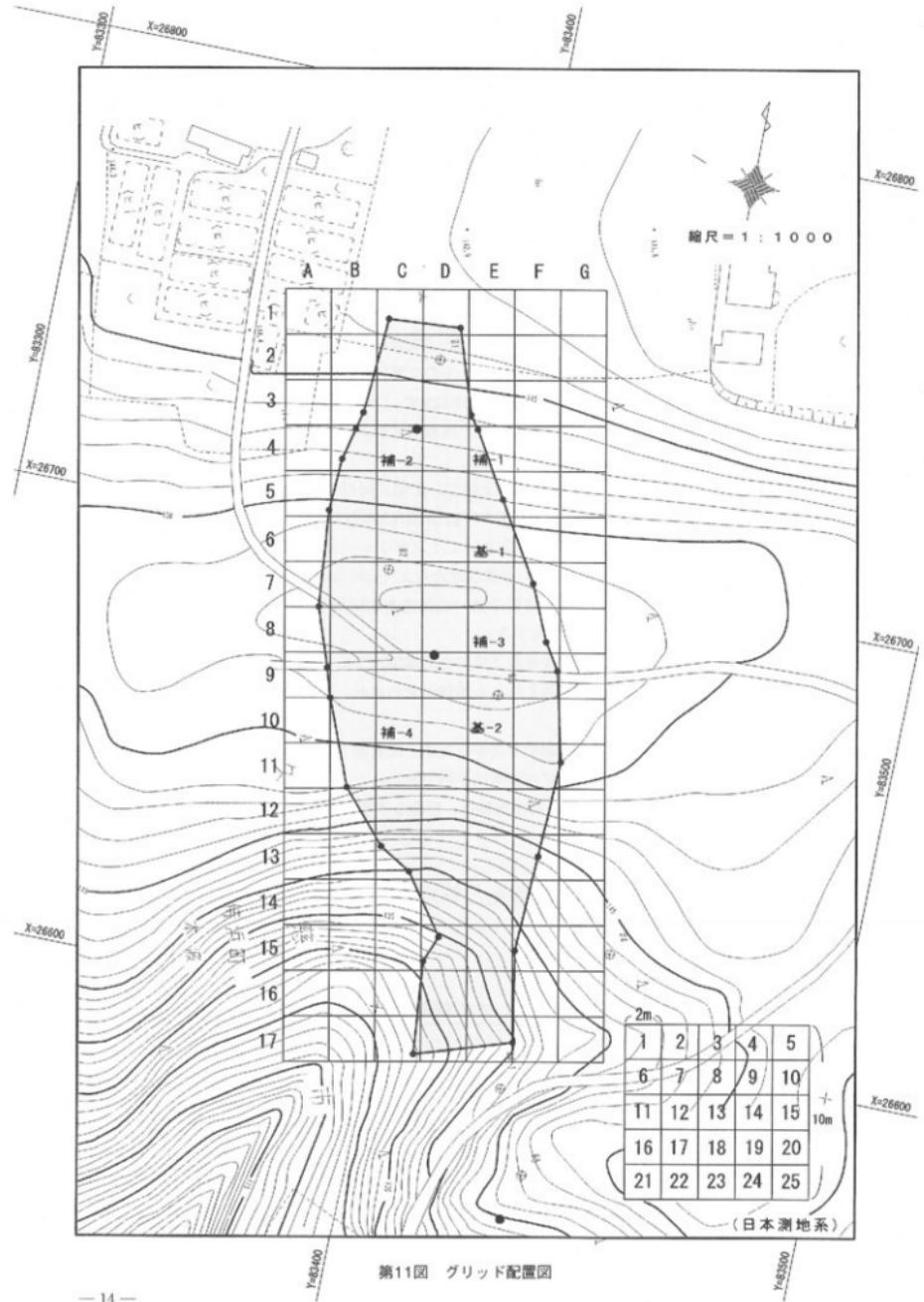
##### (1) グリッド設定(第11図)

本波VII遺跡の調査区域は北から南に約160m、東から西に約50mの範囲で、南北を長軸線とする道路幅と道路法面幅分の中央が膨らむ長形の形状を呈している。

グリッドについては地形に沿うように設定しており、国土座標X系から基1を起点に時計回りに10°振り、調査区全域をカバー出来るようにグリッドを設定した。大グリッド(10×10m)は長軸方向に

第2表 本波VII遺跡基準点位置

基準点	グリッド	日小源地名			世界測地系		
		X	Y	H	X	Y	H
基1	7E1	26700.000	83400.000	152.176	27006.639	83100.747	152.176
基2	11E1	26690.777	83407.845	152.295	26957.415	83108.591	151.295
基3	5E1	26719.612	83386.078	148.053	27026.251	83096.624	148.053
基4	5C1	26715.689	83376.166	148.423	27022.329	83077.213	148.423
基5	9F1	26680.388	83403.922	152.694	26987.027	83104.669	152.694
基6	11C1	26653.854	83388.238	150.938	26903.408	83088.980	150.938



第11図 グリッド配置図

算用数字1～17、短軸方向にアルファベット大文字A～Gである。また、小グリッドは大グリッドを $2 \times 2\text{m}$ で25に分割し、北西隅を起点として、東西方に1～5・6～10・11～15・16～20・21～25とした（例：1A1グリッド）。なお、基準点の成績値は第2表の通りである。

## （2）試掘調査

最初に、地形の状況と地層の堆積状況、遺構の有無、遺構・遺物集中区域の確認と把握を目的として、任意に約15箇所の $4 \times 20 \times 15\text{m}$ トレンチを設定し、人力でトレンチ調査を行った。また合わせて、岩手県教育委員会生涯学習文化課が平成18年8月1～2日、8月24～25日の2回行った試掘調査の時に重機で掘削したトレンチも掘り下げを行った。

初めに急傾斜の南斜面から着手した。谷部に向かって東西方向にトレンチ5箇所を設定して確認を行ったが、表土直下にⅢ層を検出し遺構・遺物とともに見つからなかった。この箇所については写真記録のみで精査を終了した。

南斜面上部は傾斜に沿ったトレンチ、尾根上は南側を中心にトレンチを設定したが、大半の箇所は表土が薄く、Ⅱ層・Ⅲ層が検出された。尾根上北東側から北斜面中位までⅡ層が広く、遺物の包含が確認された。

## （3）重機及び人力による粗掘・遺構検出

試掘調査の成果をもとに、トレンチ調査で終了した部分以外の重機が入れる箇所において、Ⅱ層黒褐色土及びⅢ層暗褐色土、Ⅳ層黄褐色粘土質土上面までのⅠ層現耕作土・表土を重機（バックホウ0.7）により掘削した。

この後、人力による1次検出などを行い、これによってⅡ層で遺構が検出された箇所に関しては精査を行い、それ以外の区域はさらに下層までの掘り下げを行った。基本的に遺構検出はⅡa層上面・Ⅲ層上面の2回行い、必要があればそれ以外の面での遺構検出を実施した。Ⅲ層以下の状況については、トレンチ箇所の斜面上側と下側などに深掘りを入れて確認を行ったが、Ⅲ層以下からは遺構・遺物とも検出されなかった。

## （4）遺構の調査方法

大型遺構の調査は四分法で、その他の遺構については原則的に二分法で行い、それぞれ堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。この際、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を随時行った。

なお、野外調査時点で付した仮名称と異なる性格の遺構種類となる場合は、室内整理時点で変更を行っている。

遺跡・遺構・現場出土遺物の写真撮影については、NikonFM2（35mm、モノクローム・スライドカラー各1台）と中判PENTAX67（モノクローム）を使用した。一部ではデジタル一眼レフカメラCanonEOS5D（1,200万画素）を使用し、メモ撮影としてデジタルカメラ（400万画素）を使用した。

また、平成19年11月13日に調査区域全体の航空写真撮影を実施した。

遺構実測図の縮尺は1/20を基本としたが、焼土遺構や配石遺構・遺物微細図などは1/10、その他の遺構や土壙断面なども種類や規模により1/50、1/100、1/200などの縮尺を用いて遺構実測図（第1原図）を作成した。なお、調査の進行上土壙断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみに留めた遺構もある。

## (5) 遺物の取り上げ方

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については出土遺構名と出土層位を記した。遺構外出土分は小グリッドごとに層位を記し、I・II・III層上位などと記載して取り上げた。ただしI層現耕作土・表土出土及び表探については大グリッド名のみのものもある。

## (6) 遺構の命名について

遺構名は現場段階で命名しているが、当初命名したものと異なった性格の遺構となった場合や登録抹消となる場合がある。このため、整理作業段階で遺構名を変更して付け直している（第3表参照）。

## 2 整理方法

平成19年11月1日～平成20年3月31日（5ヵ月：整理作業員1～2名）の期間で室内整理作業を行った。ただし、平成19年11月1日～29日までは野外調査を並行していたため、担当調査員は不在であった。

## (1) 遺構

遺構は現場で図化してきた遺構図面を第1原図とし、註記や遺構の切り合い、配置などを検討しながら担当調査員が遺構ごとに第2原図を作成し、その上でトレースを行った。

各遺構は、位置・規模・形態などの基礎データを抽出し、遺構一覧表を作成した。遺構図版は各遺構種別に、遺物包含層・土坑・焼土遺構・集石遺構・ビットの順で掲載した。

## (2) 遺物

## a 土器

水洗乾燥後、収納袋ごとに破片数及び重量計測を行った。次に註記、遺構・層位・グリッドごとに仕分けを行い、接合作業を行った。その後、復元作業、掲載遺物の選別、登録作業、実測、拓影、トレース、写真撮影といった手順で行った。

掲載土器については、遺構内出土は遺構帰属時期決定のため細片でも登録した。遺構外出土については分類別に仕分けした上で、立体土器・口縁部破片・器形復元可能な破片を優先として代表的な破片を掲載した。底部破片についてはすべて登録した。

## b 石器

水洗・註記を行った後、担当調査員が全点を観察し、分類・計測・登録作業を行い、一覧表を作成した。その後、分類ごとに代表的な形状を抽出し、実測、トレース、写真撮影を行い、掲載した。

掲載石器については、器種・分類に選別した石器から全体の形状が明瞭に分かれる完形品や黒色粘着物付着など使用痕跡が残存するものを優先して図化した。石器実測に当たっては剥離の場合、リング・フィッシャーは調査員が入れることとし作業の効率化を図った。また、礫石器の自然面は稜線のみで白抜きを基本とした。掲載できなかった石器についても全点について法量計測を行い、点数・重量の

第3表 遺構名変更表

遺構旧名	野外地図での 仮遺構名	編 号
I号土坑	1号土坑	根カクランか
Ⅱ号土坑	2号土坑	根カクランか
Ⅲ号土坑	3号土坑	根カクランか
Ⅳ号土坑	4号土坑	
Ⅴ号土坑	5号土坑	
Ⅵ号土坑	6号土坑	
Ⅶ号土坑	7号土坑	
Ⅷ号土坑	8号土坑	
Ⅸ号土坑	9号土坑	
Ⅹ号土坑	10号土坑	
Ⅺ号土坑	11号土坑	
Ⅻ号土坑	12号土坑	
ⅩⅢ号土坑	13号土坑	
ⅩⅣ号土坑	14号土坑	
ⅩⅤ号土坑	15号土坑	
ⅩⅥ号土坑	16号土坑	
ⅩⅦ号土坑	17号土坑	
ⅩⅧ号土坑	18号土坑	
ⅩⅨ号土坑	19号土坑	
ⅩⅩ号土坑	20号土坑	
ⅩⅪ号土坑	21号土坑	
ⅩⅫ号土坑	22号土坑	
ⅩⅩⅢ号土坑	23号土坑	
ⅩⅩⅣ号土坑	24号土坑	
ⅩⅩⅤ号土坑	25号土坑	
ⅩⅩⅥ号土坑	26号土坑	
ⅩⅩⅦ号土坑	27号土坑	
ⅩⅩⅧ号土坑	28号土坑	
ⅩⅩⅨ号土坑	29号土坑	
ⅩⅩⅪ号土坑	30号土坑	
ⅩⅩⅫ号土坑	31号土坑	
ⅩⅩⅩ号土坑	32号土坑	
ⅩⅩⅪ号土坑	33号土坑	
ⅩⅩⅫ号土坑	34号土坑	

計測、石材化分けを行った。なお、掲載遺物については観察表を作成し掲載したが、不掲載遺物については観察表の掲載を割愛した。ただし、不掲載遺物についても観察表は作成し、岩手県埋蔵文化財センターに保管している。

### (3) 掲載図版の構成

掲載図版は遺構と遺物を分け、遺構図版は遺構の種別で掲載し、遺物図版は土器・石器・石製品など種別で掲載した。

登録番号については、出土土器が0001～、出土石器・石製品が1001～とした。これに加えて、掲載遺物については全遺物について通しの「掲載番号」を付している。

このほかに、図版番号・写真図版番号も合わせて記載している。観察表の( )内数値は残存値、〔 〕内数値は推定値である。

## 3 野外調査経過

8月1日(水) 調査開始。現場設営。調査に先立って、7月30日～8月2日まで業者委託による草刈り・雑物撤去作業を行った。

8月2日(木)～8日(水) 試掘。南斜面谷部分から開始。15×1.5mトレンチを5本設定して確認を行ったが、遺構・遺物ともに検出されないため、写真記録のみ行い排土場とすることとした(約400m<sup>3</sup>)。ウニ採りなどで野外作業員の出勤率低下。

8月8日(水)～10日(金) 重機による表土除去(バックホウ0.7・キャリアダンプ8t)。尾根上から開始(約2,000m<sup>3</sup>)。並行して人力による1次検出作業を実施。調査区全体に松の切株が点在しております、捗らない。

8月20日(月)～24日(金) 南斜面の表土除去(約1,200m<sup>3</sup>)。急斜面のため、手間取る。

8月28日(火) 基準点設置。

8月27日(月)～30日(木) 北斜面の表土除去(約2,100m<sup>3</sup>)。表土除去終了。

9月3日(月)～14日(金) 南斜面の検出・精査。

9月18日(火)～10月17日(水) 北斜面の検出・精査。排土場が斜面下方にしか確保できず、作業効率低下。斜面下位から土坑がまとまって検出された。

10月18日(木)～11月2日(金) 尾根上西側の検出・精査。遺構密度は希薄。

11月8・9日(木・金) 関池強一氏(岩手大学非常勤講師)現地指導。

11月5日(月)～16日(金) 尾根上南側の検出・精査。

11月12日(月) 終了確認。

11月13日(火) 航空写真撮影。

11月19日(月) 近隣住民向け現地説明会(参加者15名)。

11月19日(月)～28日(水) 尾根上東側の検出・精査。

11月21日(水)～29日(木) 西トレンチ尾根上堆積層確認。

11月29日(木) 現場撤収。調査終了。



第12図 遺構配置図

## IV 検出遺構

今回の調査で検出された遺構数は、縄文時代前期前葉の遺物包含層2ヶ所（計2,141m<sup>2</sup>）、土坑26基、焼土遺構1基、集石遺構2基、ピット4個である。

### 1 遺物包含層（第13図・写真図版5）

尾根上から北斜面を中心に2,141m<sup>2</sup>の範囲に遺物包含層を検出した。まず始めに北斜面に3本、尾根上に2本のトレンチを設定して、層厚と層序の確認を行った。

北斜面の3本のトレンチ、西トレンチ、中央トレンチ、東トレンチは傾斜に沿ってほぼ等間隔に設定した。

西トレンチは1～5層に区分され、このうち1層が包含層で層厚は10～30cmである。2層以下には十和田中振テフラ（To-Cuテフラ）の降下砾石（バミス）と思われる径1～8mmの黄褐色粒を含んでいるため、1層はテフラ降下後の一次または二次堆積以後に形成されたものと考えられる。

中央トレンチは1～12層に区分され、このうち5層が包含層で層厚は10～30cmである。1・2層は擾乱層、3・4層は二次堆積層と思われ、6～8層はTo-Cuテフラのバミスを含む層、9層は十和田南部テフラ（To-Nbテフラ）のバミスを含む層、10層は十和田八戸（To-Hテフラ）のバミスを含む層、11・12層は粘土質層と続く。

東トレンチは1～12層に区分され、このうち2層が包含層で層厚は15～40cmである。1層は二次堆積層、3～5層は擾乱層、6～9層がTo-Cuテフラのバミスを含む層、10層はTo-Nbテフラのバミスを含む層、11層がTo-Hテフラのバミスを含む層、12層は粘土質層である。

これらの観察から、包含層はTo-Cuテフラ降下後に形成された、層厚10～40cmの暗褐色單一層に限定されることが分かった。

また、尾根上の2本のトレンチについては、北斜面の西トレンチをさらに南へ延長した尾根上西トレンチ延長と尾根上の東端に東西方向の尾根上東トレンチを設定した。

尾根上西トレンチ延長は尾根の最も標高が高い箇所から南斜面へ下る10区までに設定した。なお、このセクションの層序はほぼ本遺跡の基本層序となるため、ローマ数字で表記する。層位はI～Ⅲ層に区分され、このうちⅡa層が包含層で層厚は15～40cmである。詳細はすでにⅡ～4基本層序で記載済のため譲るが、Iは表土層、Ⅱb層はTo-Cuテフラのバミスを含む層、Ⅱc層がTo-Nbテフラのバミスを含む層、Ⅲ層がTo-Hテフラのバミスを含む層と続く。

尾根上東トレンチはこれまでに設定したトレンチと設定方向を異にする東西方向とした。これは、標高の高い方から低い方へと設定したためである。層位は1～8層に区分され、1層が包含層で層厚は5～20cmである。2層がTo-Cuテフラのバミスを含む層であるが、他箇所で見つかった同一層と思われるものと比べてテフラ含有量が非常に高く密で、20～30%の割合で含まれる。このため、非常に繊まっており、堅緻である。

以上、尾根上2本のトレンチから北斜面に設定した3本のトレンチ同様に、包含層はTo-Cu降下以後に形成された單一層という見通しが得られた。

設定したトレンチから観察した層序を日安に、小グリッド2×2m単位で掘り下げを行った。包含層が單一層に限定されるため、層位的な遺物取り上げは出来ないが、包含層が厚い場合は10cm単位で

1回目、2回目、3回目…と掘り下げ深度ごとに分けた。

遺物の取り上げを行った結果から、土器と石器・石製品の平面的な分布域を捉えたところ、第13図に示したように北と南の2箇所に集中する範囲が認められた。

北側は4～7・B～F区に位置し、東西方向48m、南北方向40m、集中域は東西方向31m、南北方向10mの範囲で、面積は1,060m<sup>2</sup>（集中域285m<sup>2</sup>）である。また、南側は8～10・C～E区に位置し、東西方向48m、南北方向27.5m、集中域は東西方向32m、南北方向22mの範囲で、面積は1,122m<sup>2</sup>（集中域329m<sup>2</sup>）である。これらはどちらも尾根上から斜面にかけて形成されており、流水などで包含層が形成されることなどの自然堆積は考慮されないため、いずれも人為的な捨て場と考えられる。以上から、これら2箇所の範囲を「北捨て場」、「南捨て場」と認定する。なお、捨て場範囲が尾根上東側で重複しているのは、どちらに含めるか不明確な部分である。よって、この重複分が範囲の総面積の和と異なる。

北捨て場の集中域は6～7・C～F区にあり、斜面を下るに従って出土量を減じて散逸的となる。集中域は調査区東端に接しているため、調査区外の東側へも捨て場が続いていると見られる。

また、南捨て場の集中域は8～10・C～E区にあり、南西斜面方向に下るに従って散逸的となる。集中域は調査区のほぼ中央に形成されているため、東西は徐々に出土量を減じており、捨て場範囲は調査区内に限定されると見られる。

なお、両捨て場範囲が重なる8・E～F区が出来たのは集中域より斜面上位の範囲のため、人為と自然の明確な区分に当て填まらなかつたことが理由に挙げられる。

## 2 土 坑 (第14～17図・写真図版6～12)

計26基見つかっている。本項では、各土坑の記載については省略し、一覧表にまとめた（第19表参照）。この中で、特徴のある土坑のみを取り上げた。

土坑の帰属時期を想定すると、土層観察から人為堆積と思われる12基を除き、その他は時期不明である。遺物を出土している土坑は、4・6・10・20～22・26号土坑の計7基であるが、堆積土中からの出土が大半であり、遺構の時期決定には不十分である。

人為堆積と思われる1～3・7・8・12～15・17・18・20号土坑の計12基は、いずれも北斜面下位の2～3区に位置している。2～3区は牧草地造成のためか斜面を削半して、平坦地化する地形改変が行われている箇所である。ここから見つかっている土坑は、平面は円形基調、断面は皿形が多く（一部は鍋底形）、規模は上端長軸平均103.6cm（82～131cm範囲）、深さは検出面からの平均で14.4cm（5.0～33.0cm範囲）である。堆積土はいずれも10YR2/2黒褐色を主体としており、これに褐色や黄褐色ブロックを混入する一括堆積の様相を呈する。

北斜面上位に位置するものは、4～6・9～11・21号土坑などがあるが、平面は円形や梢円形、不整円形など様々あり、規模も上端長軸・短軸ともにバラつきがある。また、尾根上に位置するのは、23～26号土坑であるが、これも同様である。

土坑からの遺物出土は前述の7基に限られる。いずれも少量の縄文土器を出土しており、21号土坑は敲磨器類1点も伴出している。縄文土器は尾根上～北斜面の遺物包含層から出土しているものと同時期と思われるもので、縄文時代前期前葉に位置付けられるが、遺構との関係は不明である。

### 3 焼土遺構（第17図・写真図版13）

計1基見つかっている。北斜面上位の6C15グリッドに位置し、II層上面で検出した。79.0×75.0cmの不整円形を呈しており、深さ8.0cmまで被熱して黒褐色～暗褐色主体で橙色を混入する色調をしている。焼成はやや弱いと思われるが、被熱範囲から現地性であろう。上面で縄文土器片1点が出土しているが、遺構に伴うか不明である。

### 4 集石遺構（第17図・写真図版12）

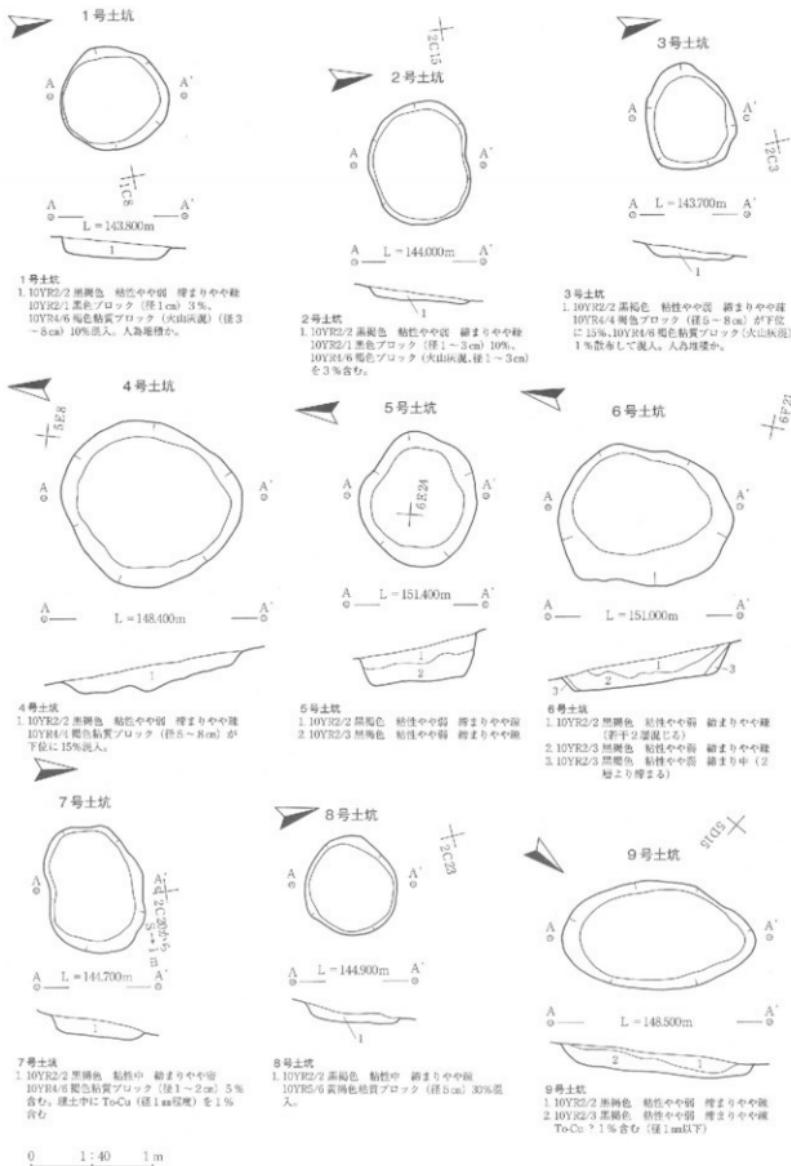
計2基見つかっている。1号集石は尾根上中央の8D21グリッド、2号集石は尾根上北側の7D21グリッドに位置している。いずれも自然疊を不整形（円形か）になるように配置している。規模は1号が83×63cm、2号が112×105cmで、1号は角疊7個、2号は渾円疊・角疊を12個以上用いている。1号のみにて使用疊の石材を観察したところ、7個のうち5個がダイサイト、2個が斑櫟岩であった。いずれも遺跡近傍からの採取と思われる在地の石材である。遺物は1号から縄文土器1片のみが出土している。遺構の時期については、後世の混入も考えられることから不明である。ただし、1号と2号の距離は直線でちょうど10mあり、この2遺構を開連付ければ新しい可能性もある。

### 5 ピット（第18図・写真図版13～14）

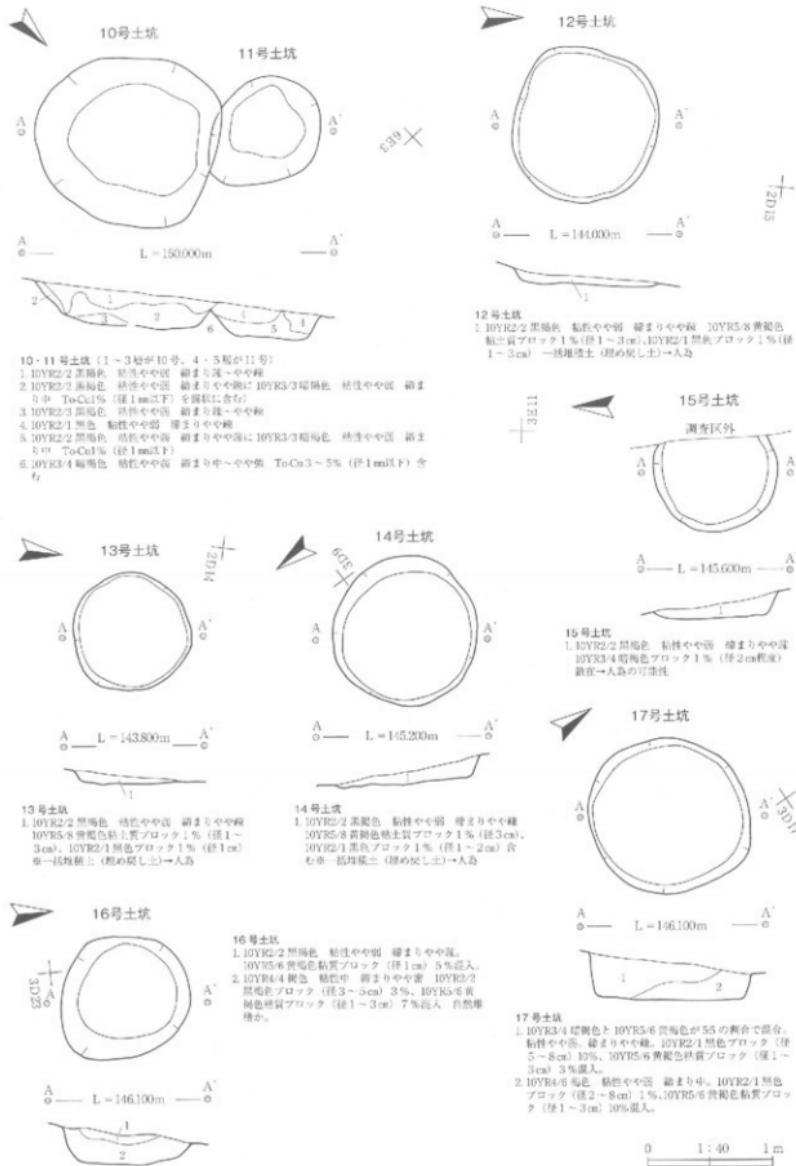
計4個見つかっている。分布に偏りは認められないが、尾根上を中心に検出している。検出層位はP1がIII層上面、P2～4がII層上面である。規模にも齊一性は認められず、上端直径が30～65cmの円形で、深さは7～40cmである。10E6グリッドのP4は2層に薄い炭化物層を持つ。時期はいずれも不明である。



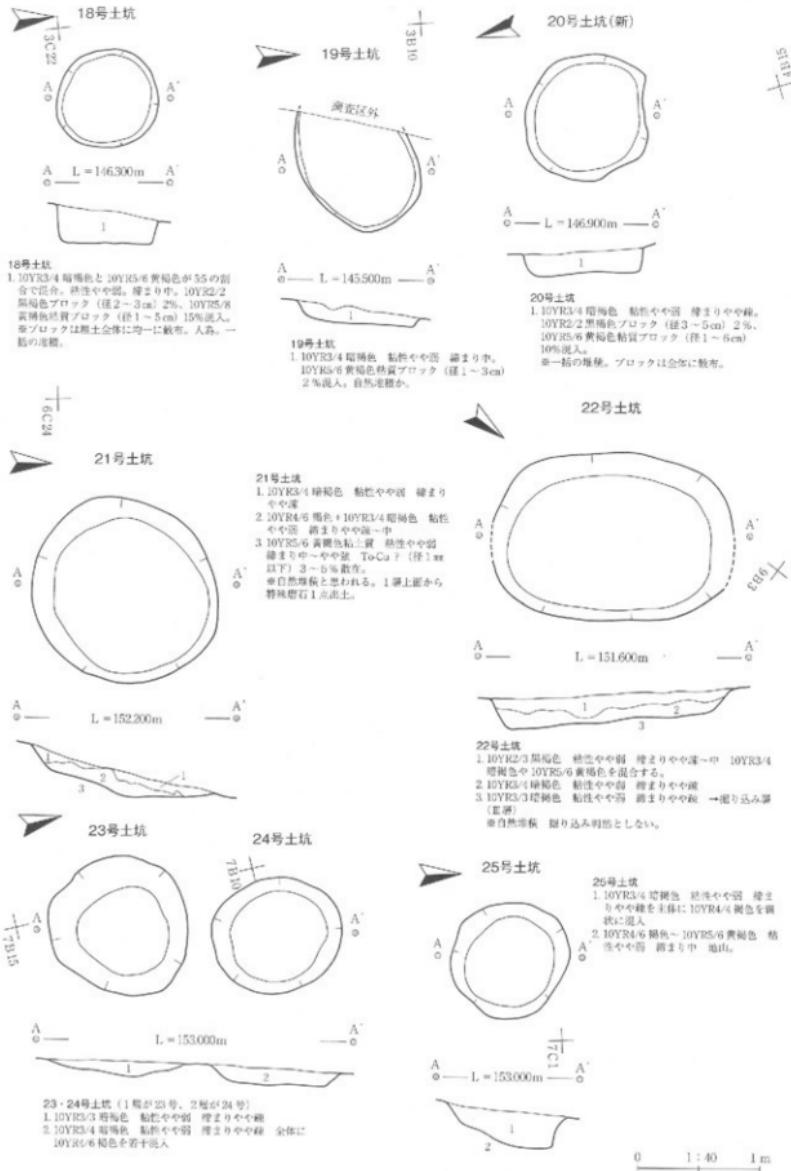
第13図 遺物包含層範囲



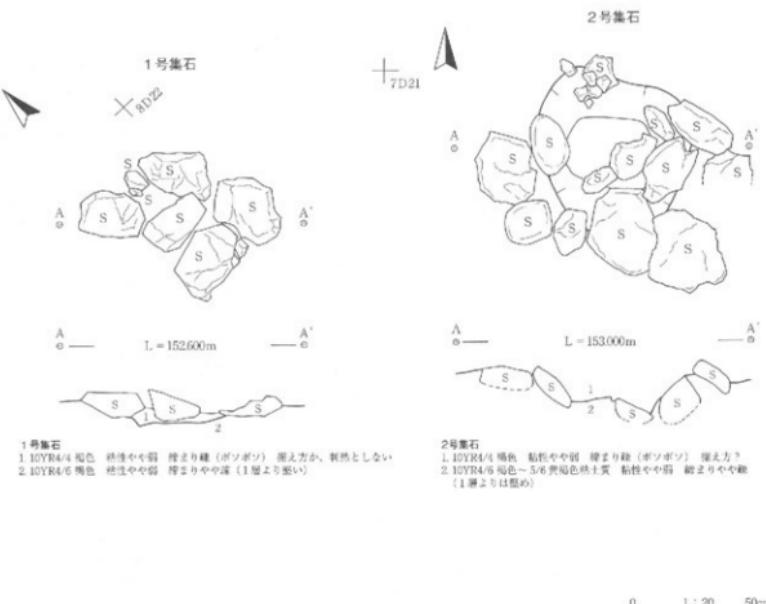
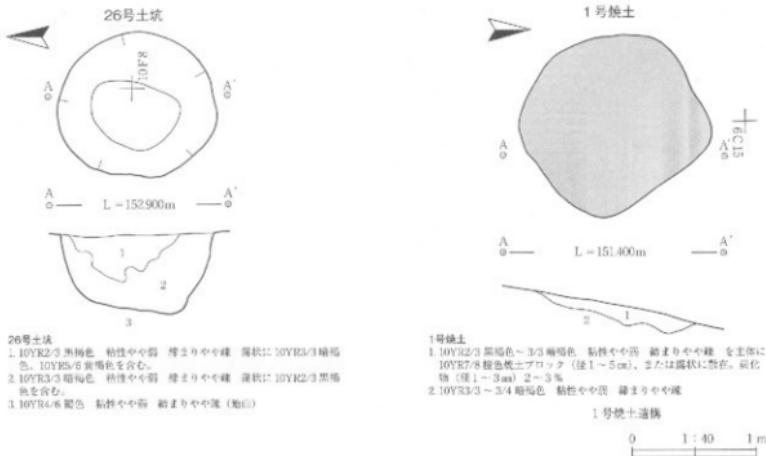
第14図 1~9号土坑



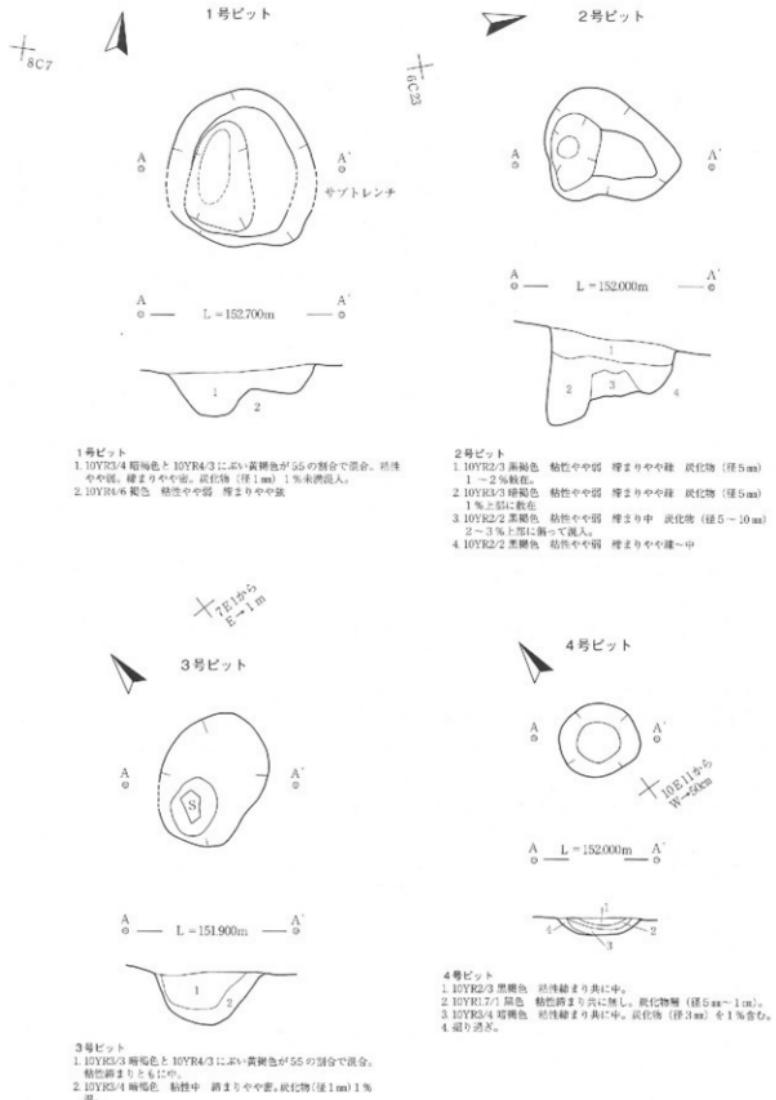
第15図 10~17号土坑



第16図 18~25号土坑



第17図 26号土坑、1号焼土遺構、1：2号集石遺構



第18図 1~4号ピット

0 1 : 20 50cm

## V 出 土 遺 物

### 1 土 器

今回の調査から大コンテナ8.5箱分（10,510片・94,214.5g）の土器が出土した。大半の土器は遺物包含層（北・南捨て場）からの出土であり、遺構内出土は僅かである。

出土土器の全点について観察したところ、大半は胎土に植物性纖維を含んでおり、特徴的な文様帶を持つものではなく、外面に縄文のみを施す土器群である。全体に焼成は良好で、内面調整は一部に指頭圧痕が認められるものの、ナデ・ミガキが施される。時期は縄文時代前期初頭～前葉に比定されると考えられる。

接合復元した上で器形が推定できるもの、特徴的な口縁部破片、底部破片について、計154点を選別し掲載した。全形を復元できた土器はほとんどなく、大半が破片資料である。底部が尖底のみ出土しているため、いずれも尖底土器であることは確かだが器形全体を把握することは困難である。

#### （1）群 別 土 器

施文方法を基準として、2群に大別した。その上で、口端形状や文様などを基に細分している。

##### 第Ⅰ群 貝殻文を施文する土器群（6）

縄文施文以外の施文法が唯一観察されたのは、6で10C22グリッドⅡa層最下位から出土している。施文には貝殻が用いられたと考えられ、8～9条の重層的な連続刺突文が横位に認められる。破片のため定かではないが、波状文を構成していると考えられる。

##### 第Ⅱ群 縄文を施文する土器群（1～5、7～154）

第Ⅰ群以外の縄文のみを施文する土器群を括した。計153点である。口端部形状や口縁に段差を有するもの、尖底部資料など計6類に細別した。また、1類はさらに計5種に分けた。

###### 1類 口端に施文のあるもの

- a種 棒状工具による刻み目があるもの（25～29）
- b種 縄文回転圧痕があるもの（30～36）
- c種 指頭圧痕があるもの（37）
- d種 内高外低の切り出し形を呈するもの（38～40）
- e種 口端断面形を角形に成形し、原体などが圧痕されないもの（52～87）

###### 2類 口縁に段差を有するもの（41～43）

###### 3類 口縁上端に原体圧痕を有するもの（45）

###### 3類 補修孔を有するもの（46～51）

###### 4類 輪積箇所にも縄文施文が有るもの（124・125）

###### 5類 尖底部資料（126～154）

###### 6類 上記以外の縄文のみを施文するもの（1～5・7～24・44・88～123）

## (2) 土器重量分布

出土土器の平面的な括りを観察するために、第19回土器重量分布図を作成した。IV-(1) 遺物包含層でも触れたが、分布は北捨て場と南捨て場の2箇所に集中域を持つ。

北捨て場は4~7・B~F区の東西方向48m、南北方向40m、集中域は東西方向31m、南北方向10mの範囲で、面積は1,060m<sup>2</sup>（集中域285m<sup>2</sup>）である。最も多いのは7E5の2,398g、次いで6C23の1,577g、6D20の1,396g、6D19の1,122g、6B16の1,078g、7F1の1,049gと続く。集中域の中でも傾斜変換点の北側斜面肩部の3カ所に密集して出土している。

南捨て場は8~10・C~E区に位置し、東西方向48m、南北方向27.5m、集中域は東西方向32m、南北方向22mの範囲で、面積は1,122m<sup>2</sup>（集中域329m<sup>2</sup>）である。最も多いのは10D5の1,745g、次いで7E1の1,617g、7E2の1,514g、9D16の1,475g、9E22の1,188gと続く。北側と同様、集中域の中でも傾斜変換点の南側斜面肩部に密集する傾向にあるが、約10mの範囲1カ所が最も出土している傾向にある。

出土土器を合わせて考えると、捨て場は斜面の南北両方向に形成されているが、ほぼ同一時期に廃棄されたものと考えられる。両集中域は斜面肩部に集中していることから、平坦部から傾斜方向に投げ捨てられたと見てよい。また、西側よりも東側に集中域が形成されていることから考えても、集落は調査区東に存在しており、尾根上から不要になった土器を捨てる「土器廃棄の場」であったと考えられる。

## (3) 土器の個体数

今回の調査で出土した土器の個体数調査を実施した。土器個体数を算出することにより、集落の存続時期にどのくらいの土器が使用または廃棄されたのかを推定するものである。

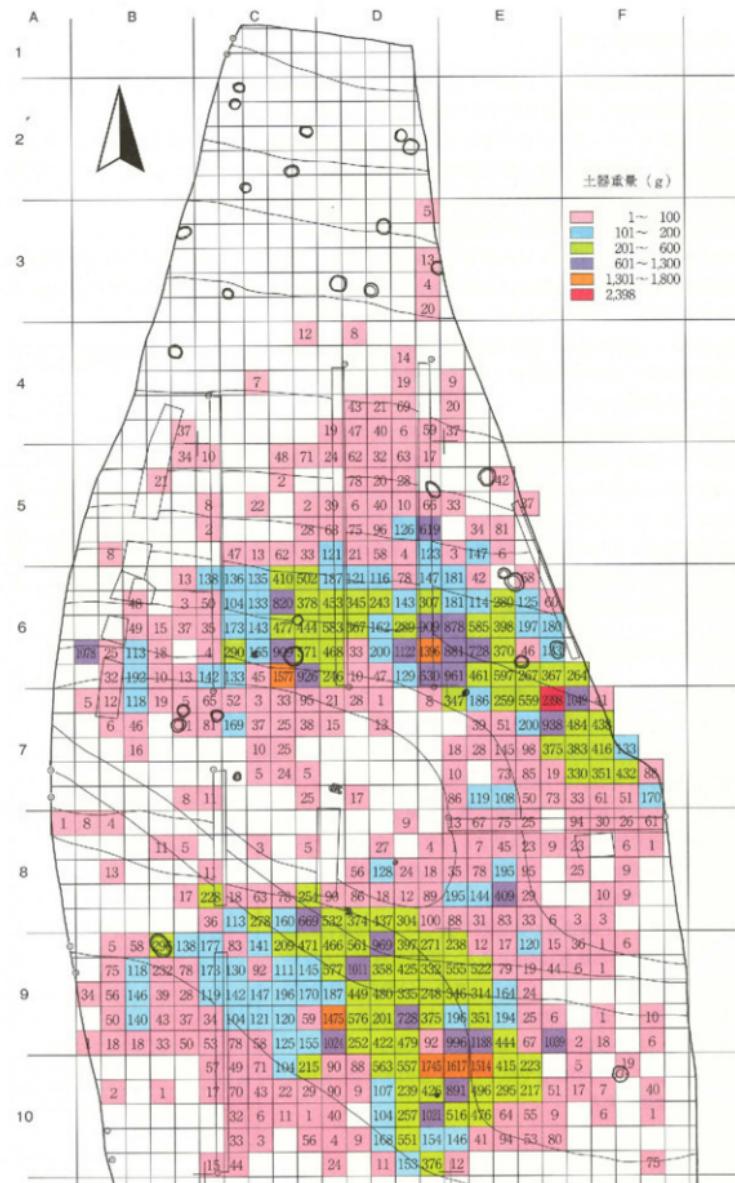
今回の調査から大コンテナ85箱分（10,510片・94,214.5g）の土器が出土した。これについて接合・復元作業を行い、同一個体と思われる破片資料についてはダブルカウントしないようにした。また、胴部破片については出土した土器の大半が地文のみであるため、口縁部・底部資料のみを抽出した。

第4表に集計した口縁部及び底部数を表した。底部資料の総数は25、口縁部資料の総数は470である。底部が残存する資料の総数25は最小個体数と捉えられる。また、口縁部総数の470には接合しなかったが、1個体となる資料も相当数含まれていると考えられ、言わば個体数の上限と捉えられる。

以上のことから、今回の調査で出土した土器の個体数( $\alpha$ )は、 $25 \leq \alpha \leq 470$ 個体である。

第4表 土器個体数

グリッド	口縁部数	底部数	合計
4	B	1	1
	D	3	3
5	B	1	1
	C	5	5
6	D	11	12
	B	10	10
7	C	40	45
	D	58	61
8	E	19	21
	B	2	2
9	C	4	4
	D	—	1
10	E	23	24
	F	31	34
11	C	5	7
	D	26	26
12	E	13	13
	F	2	2
13	B	4	4
	C	31	33
14	D	76	78
	E	28	30
15	C	3	3
	D	19	20
16	E	42	42
	F	2	2
17	C	1	1
	D	1	1
18	E	1	1
	F	—	—
19	E	5	5
	D	1	1
20	不 明	2	2
	合 計	470	495



第19図 土器重量分布図（1~10グリッド）

## 2 石 器

### (1) 尖頭器

先端部に二次加工を施し鋭く尖らせた石器を尖頭器とした。基準として長さ5cmを目安に尖頭器とした。計3点出土しており、すべて掲載した。いずれも遺構外出土である。石材は1・2が頁岩で、3が珪質頁岩である。2・3は基部幅がやや広く範状石器の可能性もあるがここに含めた。先端角はいずれも60°付近に偏っており、規格性を感じられる。

### (2) 石 鐵

先端部に二次加工を施し鋭く尖らせた、扁平の石器を石鐵とした。基本的に長さ5cm未満のものを石鐵としたが、それ以上でも形態から石鐵と認められるものも含んでいる。計83点出土しており、21点を図示した（掲載率25.3%）。いずれも遺構外出土である。

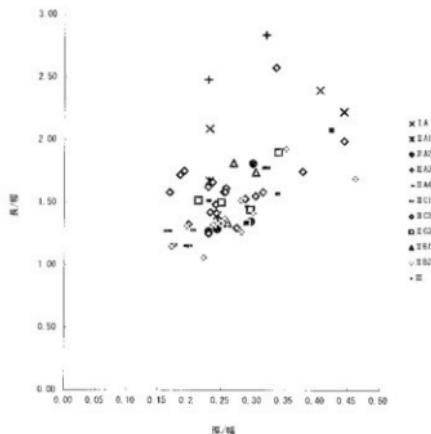
基部の有無により、2形態に大別される。有茎（I類）が3点、無茎（II類）が77点で、また欠損により分類不明なもの（III類）が3点である。

I類の基部形態についてはいずれも凸基形（A類）に限られる。また、II類は基部形態から平基形（A類）、円基形（B類）、凹基形（C類）の3形態に分けられる。数量はA類17点、B類18点、C類42点とC類が突出している。

II類を側線形態に着目して細分すると、A類は直線的なもの（1類）4点、外湾するもの（2類）4点、先端を作出するもの（3類）3点、先端を作出するもの（2類）4点に分けられる。またB類は直線的なもの（1類）3点、外湾するもの（2類）15点である。C類については直線的なもの7点、外湾するもの31点、先端を意図的に作出すもの（3類）4点である。

法量について観察するために、第20図に長幅比率を示した。縦軸に長幅/幅、横軸に厚/幅を設定し、指標による比較を行った。61点について計測可能である。

特徴的な偏りは見られないが、数



第20図 石鐵長幅比率

第5表 石鐵先端角集計表

		先端角(度)												件
		30~35	36~40	41~45	46~50	51~55	56~60	61~65	66~70	71~75	76~80	81~85	86~90	
分	I A	1			2									3
	II A1	1				1								2
	II A2				1	2			1					4
	II A3				1	1								2
	II B1		1	3		1								5
	II B2		2		1									3
合	I C1			1	2						1		2	11
	II C2		1	2	5	6	2	4	2	1				22
	II C3		2	2										4
	B				1	1					1			3
	計	2	2	7	17	10	6	6	5	4	1	2	1	63

値は長/幅1.06~2.84、厚/幅0.17~0.46の範囲に分布している。さらに先端角について見ると（第5表先端角集計表を参照）、46~50°範囲にピークがあり、51~55°範囲がこれに次ぐ。分類で見れば、II C 2類は全体の傾向とほぼ同様であるが、II B 2類などは56°以上に散在している。

使用石材については第6表分類別石材表を参照されたい。大半が頁岩を用いており、全体の88%を占める。次いで、珪質頁岩6点（7.2%）で、他は1点のみ使用されている。分類で見ると、I A・II A 2・II A 3・II B 1・II C 3類は頁岩のみが使用されている。今回の調査で黒曜石製品として唯一出土したII C 1類の173は、産地同定から青森県深浦から産出されたものを用いていることが分かった（附編3参照）。原石で持ち込まれたか、製品としてかは、今回の調査では他に2点の黒曜石製剝片が出土したのみであるため不明である。

### （3）石錐

剥片の尖頭状の端部に両側縁から二次加工が施された石器を石錐とした。計7点出土しており、3点を図示した（掲載率42.9%）。いずれも遺構外出土である。

形状から2分類した。尖基形のものをI類、剥片の一部に二次加工を施して尖らせたものをII類とした。I類が5点、II類が2点である。石材はI類の180のみが珪質頁岩で、他はすべて頁岩である。

先端角は計7点について計測可能で、平均64.0°（50.0°~115.0°範囲）でバラつきがある。法量も同様でバラつきがあり、まとまりを欠く。

### （4）石匙

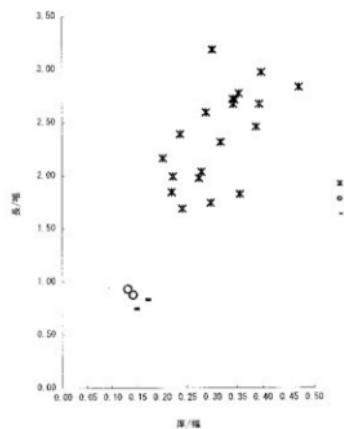
摘み状の突起を一端に有し、スクレイパー類と同様の刃部を作出している石器を石匙とした。計38点出土しており、9点を図示した（掲載率23.7%）。いずれも遺構外出土である。

摘み部を上にして置き、抉り部が水平になるようにした場合（摘み部の軸を垂直に位置させた場合）、形状が縦長の形になるものをI類、斜めに長くなるものをII類、横長になるものをIII類、不明をIV類とした。I類は30点（79%）、II類は4点（10.5%）、III類は2点（5.3%）、IV類は2点（5.3%）である。

さらに刃部形態が両刃のものをA類、片刃のものをB類とすると、I A類が20点と最も高く、全体の52.6%を占め、I B類が9点、II A類3点、II B類1点、III A類2点、IV B類2点と細分される。

第6表 石鐵分類別石材表

		石 材					計
		頁 岩	珪質頁岩	凝灰岩	石灰岩	瑪 瑙	
	I A	3					3
	II A 1	3			1	1	5
	II A 2	4					4
	II A 3	3					3
	II A 4	5					5
	II B 1	3					3
分 類	II B 2	12	2	1			15
	II C 1	5	1			1	7
	II C 2	29	2				31
	II C 3	4					4
	III	2	1				3
	計	73	6	1	1	1	83



第21図 石匙長幅比率

法量について観察するために、第21図長幅比率を示した。縦軸に長/幅、横軸に厚/幅を設定し、指標による比較を行った。24点について計測可能である。I～III類は平面形態に比例して、3傾向に分かれる。I類は長/幅1.69～3.19、厚/幅0.20～0.47と綫長の範囲、II類は長/幅0.88～0.93、厚/幅0.13～0.14と斜長の範囲、III類は長/幅0.74～0.83、厚/幅0.15～0.17と横長の範囲になる。また類型ごとの

刃角に着目すると（第7表刃角集計表）、全体のピークは56～60°にあり、次いで51～55°である。最も出土しているI類のピークも同様に56～60°の範囲にある。

使用石材については第8表分類別石材表に示した通りである。全体の89.5%（34点）を頁岩が占める。他に赤色頁岩、凝灰岩、瑪瑙が見られるが、少ない。

### （5）範状石器

左右の側縁がほぼ対称で基部側が狭く、刃部側に広がりを持つ石器を範状石器とした。計8点出土しており、このうち2点を図示した（掲載率28.6%）。いずれも遺構外出土である。

平面形態に着目すると、2形態に大別される。基部から端部にかけて、ほぼ直線的な形態の短冊形となるもの（I類）が4点、端部にかけて幅広になる形態の撥形（II類）が4点である。

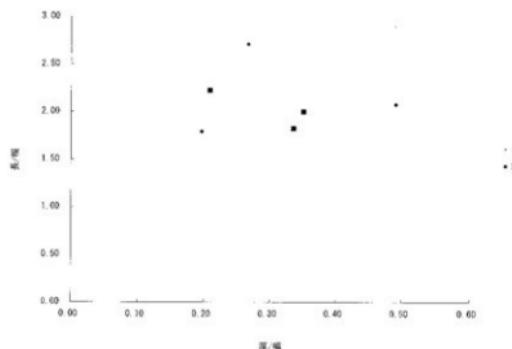
法量について観察するために、第22図長幅比率を示した。縦軸に長/幅、横軸に厚/幅を設定し、指標による比較を行った。6点について計測可能である。出土数が限られるため一概に言えないが、

第7表 石匙刃角集計表

類型	分類	刃角（°）										計
		35～40	41～45	46～50	51～55	56～60	61～65	66～70	71～75	76～80	81～85	
I	I A	1		2	3	8	1	3	2			20
	I B	1	1	1	1	1	1	2	1			9
	II A				2						1	3
	II B				1							1
	III A					1	1					2
	IV B					1					1	2
	計	2	1	3	7	11	3	5	3	1	1	37

第8表 石匙分類別石材表

類型	分類	石材				計
		頁岩	赤色頁岩	凝灰岩	瑪瑙	
I	I	27	1	1	1	30
	II	3		1		4
	III	2				2
	IV	2				2
	計	34	1	2	1	38



第22図 範状石器長幅比率

第9表 範状石器刃角集計表

類型	刃角（°）								計
	46～50	51～55	56～60	61～65	66～70	71～75	76～80	81～85	
I	1	1		1			1	4	7
II		1		1	1				3
計	1	2		2	1				7

第10表 範状石器分類別石材表

類型	分類	石材		計
		頁岩	凝灰岩	
I	I	3	1	4
II	4			4
計	7	1	1	8

長/幅1.79~2.71、厚/幅0.20~0.49の範囲に認められる。2つの類型が同じ傾向を示すのは、規格性を意味していると思われる。

また、作出された刃部の角度(刃角)に着目する(第9表刃角集計表)。計7点について見ると、50°付近と60°半ばにやや集中するものの傾向は見出せない。

使用石材は凝灰岩が1点のみで、他は頁岩製である。

### (6) 楔形石器

両極剥離痕と2個一対または4個二対の刃部を有する石器を楔形石器とした。剥片生産時の両極打痕のみが残された剥片はここには含んでいない。計14点出土しており、3点を図示した(掲載率21.4%)。いずれも遺構外出土である。

刃部の作出位置から2形態に分けられる。2個一対の剥離痕を持つもの(I類)が11点、4個二対の剥離痕を持つもの(II類)が3点である。

法量について観察するために、第23図長幅比率を示した。縦軸に長/幅、横軸に厚/幅を設定し、指標による比較を行った。全点について計測可能である。

I・II類ともには同じ範囲に集中するが、I類は長/幅0.80~1.64・厚/幅0.21~0.54とやや広く、II類は長/幅0.87~1.42・厚/幅0.21~0.41と若干狭い。石材はすべて頁岩製である。

### (7) スクレイパー類

定形石器以外で、機能部として刃部を有し、切る、削る、搔く作業に使用されたと見られる石器をスクレイパー類とした。計26点出土しており、3点を図示した(掲載率11.5%)。なお、二次加工ある剥片も同様の機能が考えられるが、全縁辺の1/2以上に二次加工が施されている場合を本分類とし、それ以下を二次加工ある剥片とした。いずれも遺構外出土である。

素材である剥片の形状から2形態に分けられる。縦長の剥片を素

第11表 スクレイパー類分類別石材表

分類	石材			計
	頁岩	チャート	計	
I	18	1	18	
II	6	2	8	
計	24	2	26	

第12表 スクレイパー類刃角集計表

分類	刃角(°)								計
	46~50	51~55	56~60	61~65	66~70	71~75	76~80	81~85	
I	2	1	1	3	4	3	1	1	16
II	1	1	1	1	2	1	1	1	8
計	3	2	2	4	6	4	1	2	24

材とするもの（I類）が18点、横長の剥片を素材とするもの（II類）が8点である。

法量について観察するために、第24図長幅比率を示した。縦軸に長/幅、横軸に厚/幅を設定し、指標による比較を行った。22点について計測可能である。I・II類は平面形状が縦長と横長に分かれるため、結果も明確に2傾向が表された。I類は長/幅0.74～3.87、厚/幅0.18～0.64と縦長の範囲、II類は長/幅0.46～0.90、厚/幅0.13～0.38と横長の範囲である。また分類ごとの刃角に着目すると（第12表刃角集計表）、I・II類ともピークは61～75°の範囲にあり、特に66～70°の値が高い。

使用石材については第11表分類別石材表に示した。全体の92.3%（24点）を頁岩が占める。他はチャート2点がある。

#### （8）二次加工ある剥片

スクレイバー類に比べて刃部の作出範囲が狭い（全縁刃の1/2未満）が、同様の機能を有する石器を二次加工ある剥片とした。計14点出土しており、2点を図示した（掲載率14.3%）。いずれも遺構外出土である。

素材である剥片の形状から2形態に分けられる。縦長の剥片を素材とするもの（I類）が10点、横長の剥片を素材とするもの（II類）が4点である。14点中8点が欠損しているため、詳細は不明だが、縦長の剥片がよく利用されている。

使用石材については、I類の1点が珪質頁岩以外はすべて頁岩である。

#### （9）微細剥離痕ある剥片

剥片剥離工程において産出された石器製作に不適な剥片であるが、縁辺部に微細な剥離痕が観察される剥片を微細剥離痕ある剥片とした。計1点出土している（掲載率0%）。素材は縦長の剥片で、頁岩製である。

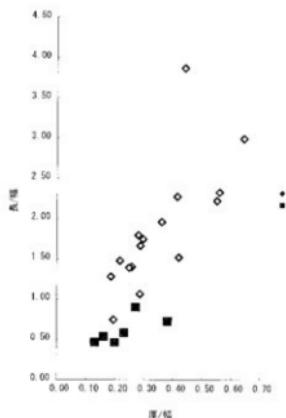
#### （10）抉入石器

縦長剥片を素材とした側縁に抉り部を持つ二次加工ある剥片を抉入石器とした。計1点出土している（掲載率100%）。石材は頁岩である。

#### （11）石核

剥片剥離作業が行われて産出されたと考えられるすべての残核を石核とした。計16点出土しており、3点を図示した（掲載率18.8%）。いずれも遺構外出土である。

今回は整理時間の都合上、石核及び剥片の接合は行えなかった。よって、本遺跡の剥片剥離作業については石核から類推するに留めたい。なお、石核の分類については新潟県清水上遺跡（新潟県教委 1990）、新潟県アチヤ平遺跡上段（新潟県・朝日村教委



第24図 スクレイバー類長幅比率

第13表 石核分類別石材表

	石核			計
	頁岩	流紋岩	斑晶岩	
I	4	1		5
II	4		1	5
III	1			1
IV	5			5
計	14	1	1	16

2002) を用いた。

剥離作業の手順から 4 分類した。第13表に石核分類別石材表を示した。I類は同一打面から同一作業面に同一方向の剥離を行うもので、5点(31.3%)である。頁岩を主に用いており、流紋岩製が1点ある。II類は同一作業面に別々の打面から剥離を行うもので、5点(31.3%)である。これも主に頁岩を使用しており、斑岩が1点ある。III類は古い作業面を打面とする剥離で、1点のみに見られ、頁岩を用いている。IV類は両極技術による剥離で、5点(31.3%)に見られ、すべて頁岩製である。

第25図長幅比率を作成し、法量の相違を観察した。縦軸に長/幅、横軸に厚/幅を設定し、指標による比較を行った。16点について計測可能である。I類は長/幅1.23~1.94、厚/幅0.53~0.99の範囲、II類は長/幅1.01~1.97、厚/幅0.53~0.95の範囲、III類は1点のみで長/幅1.09、厚/幅0.59、IV類は長/幅1.15~1.82、厚/幅0.64~0.77の範囲に散在している。類別の差は少なく、ほぼ同範囲に集中する傾向にある。これはほぼ同サイズの原石を用いているためである。

第14表に石核剥離角集計表を示した。全体に大きな違いは見られず、散在しているが、I・II類は剥離角が大きく、III・IV類は小さい傾向にある。

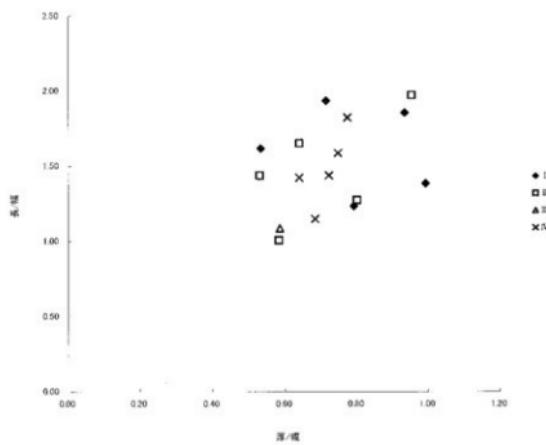
## (12) 剥 片

第14表 石核剥離角集計表

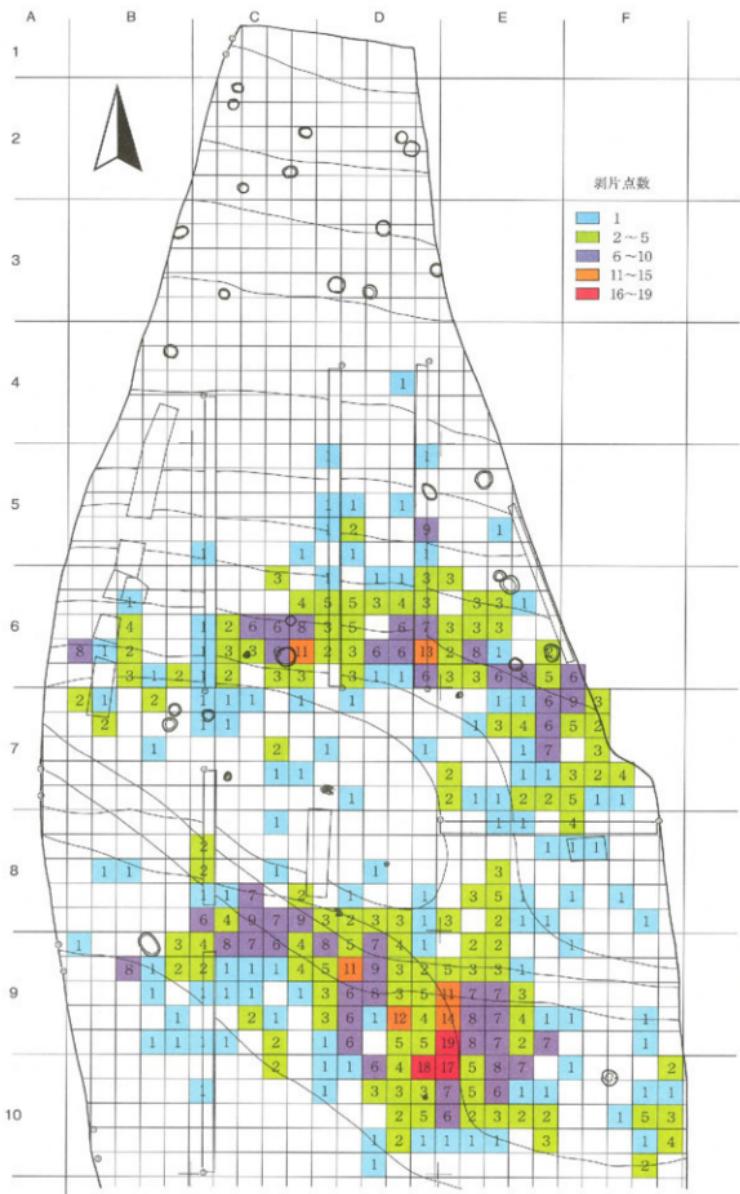
剥片剥離作業において产出された石器製作に不適な剥片や加工の施される属性を有した剥片を一括した。計1,258点(重量12827.54g)出土しており、このうち黒曜石製の2点のみを図示した(掲載率0.2%)。この2点については、蛍光X線による产地同定分析を行っている(附編3参照)。

整理時間の都合上、剥片に関する詳細な分析は行えなかった。石材については、大半が頁岩である。その他に水晶1点、石英2点、黒曜石2点などが出土している。

第26図に剥片出土分布図を作成した。1~10区までの平面分布を示している。全体の出土量は第15表に表した。



第25図 石核長幅比率



第26図 剥片出土分布図

表15 剥片出土点数・重量集計表

北捨て場では地形変換点の斜面肩部に集中域が拡がっており、6D20が13点と最も多い。6C20が11点と続き、他も6区南から7区北にかけて多い。また、南捨て場でも地形変換点の斜面肩部に集中域が拡がっており、9E21が9点、10D5が18点、10R1が17点と密で、9区から10区北までが多い。

(13) 石 父 類

器面全体または一部を研磨・敲打・剥離などで成形した刃部を有する斧形の石器を石斧類として括した。計88点出土しており、13点を図示した（構成率14.77%）。

成形段階の敲打・剥離・研磨などの加工から2形態に分けられる。器面全体を研磨して成形している斧形石器（磨製石斧）がⅠ類で37点、敲打・剥離のみで成形している斧形石器（打製石斧）がⅡ類で51点である。

I類について細分すると、最大幅が刃部付近にあるもの（A類）が13点、最大幅が中央付近にあるもの（B類）が5点、幅がほぼ直線的になるもの（C類）が6点、不明なもの（D類）が13点である。II類は、裏面が自然面となる亀の子型を呈するもの（A類）が19点、正裏両面に自然面を有し、側縁のみに二次加工が施されるもの（B類）が28点、全面に複雑成形が及ぶもの（C類）が4点である。

刃部形状に着目すると、I類は平面22点、断面23点について観察可能である。平面形は直刃4点、偏刃3点、円刃15点で、断面形は両刃21点、片刃2点となる。II類は平面・断面ともに7点について観察可能である。平面形は直刃3点、円刃4点で、断面形は偏刃1点、片刃6点である。

法量値については、欠損品が多いため、比較するに至らなかつた。

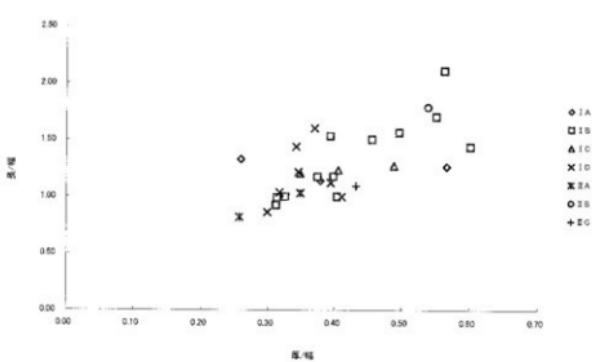
第16表 石斧類分類別石材表

		石 材						合 計
		砂 岩	砾 岩	砂 岩	質 岩	超 基性岩	凝 灰岩	
分 類	I A	6	4	1	1	1		13
	I B	2	3					5
	I C	4	1	1				6
	I D	3	5	1	3	1		13
	II A	11	4	2				17
	II B	13	10	3	1		1	28
合 計		39	30	8	5	2	1	86

(14) 碰 器 類

礫または人形で厚手の剥片の一部に、片面・両面から二次加工を施し、刃部を作り出した石器を礫器類とした。計30点出土しており、4点を図示した(掲載率13.3%)。いずれも遺構外出土である。

素材の性格から2  
形態に分けられ



第27図 硬器類長幅比率

る。礫素材のもの（I類）が26点、大形で厚手の剥片を素材とするもの（II類）が4点である。

また刃部の形状から4細分される。刃部の平面形が刃刃、断面形が両刃のものがA類、平面形が刃刃、断面形が片刃のものがB類、平面形が直刃、断面形が両刃のものがC類、平面形が直刃、断面形が片刃のものがD類とした。

I A類3点、I B類13点、I C類3点、I D類7点、II A類2点、II B類1点、II C類1点に細分される。全体に見るとI類の比率が高く、86.7%を占める。また、その中でもI B類が13点とI類の50%を占めている。

法量を観察するために、第27図長幅比率を示した。縦軸に長/幅、横軸に厚/幅を設定し、指標による比較を行った。29点について計測可能である。全体に密集する傾向にあるが、I B類はやや横長で形態差がある。II A類はサイズが若干小さい。

第17表に分類別石材表を示した。全体の53.3%（16点）を斑岩が占める。次いで、玢岩が多い。II類は砂岩を用いられる傾向がある。加工のしやすさが要因であろうか。

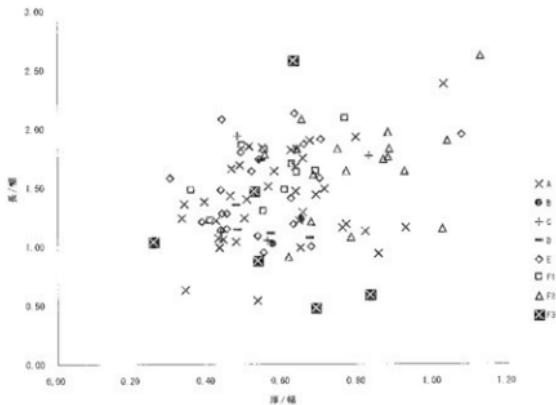
### (15) 敲磨器類

砾の表面に残された使用痕跡を敲打痕、磨痕、凹痕の3種類に規定し、これらの痕跡のいずれかが認められるものを敲磨器類とした。計124点出土しており、7点を示した（掲載率5.7%）。いずれも遺構外出土である。

使用痕跡（敲打痕・磨痕・凹痕）の組み合わせにより6分類できる。A類は敲打痕だけを有するもので39点、B類は敲打痕と磨痕が認められるもので2点、C類は敲打痕と凹痕が認められるもので3点、D類は磨痕だけが認められるもので6点、E類は凹痕だけが認められるもので24点、F類はいわ

第17表 磨器類分類別石材表

	石 材					合 計
	玢 岩	玢 岩	砂 岩	頁 岩	斑 岩	
I A	2	1				3
I B	2	7	2	1	1	13
I C	1	1				1
I D	1	5	1			7
II A		1	1			2
II B			1			1
II C			1			1
合 計	6	15	6	1	2	30



第28図 敲磨器類長幅比率

ゆる「特殊磨石」と呼称されるもので48点である。F類が全体の38.7%を占め、次いでA類が31.5%、E類が19.4%と続く。

第28図長幅比率を作成し、法量の相違を観察した。縦軸に長/幅、横軸に厚/幅を設定し、指標による比較を行った。102点について計測可能である。全体に長/幅0.48~2.62、厚/幅0.26~1.12の範囲に散在する。

第18表に分類別石材表を示した。最も多いのは斑纏岩で、41.9%（52点）を占める。次いで、花崗閃緑岩が24.2%（30点）、砂岩が12.9%（16点）である。分類別に見ると、A類は斑纏岩・チャート、

第18表 敷設器類分類別石材表

分類	石 材							合 計
	玢 岩	斑纏岩	チャート	砂 岩	花崗閃緑岩	凝灰岩	頁 岩	
A	3	13	7	3	8	1	4	39
B		2						2
C		1		2	1		1	5
D		1		1	2	1		6
E		9		4	8	2	1	24
F	2	26		6	11		2	48
合 計	5	52	7	16	30	4	8	124

F類は斑纏岩・花崗閃緑岩の占める割合が高い。チャートはA類にのみ用いられている。

#### (16) 碓 石 錘

礫の両側縁または片側縁を打ち欠き、「紐掛け」を作出したと考えられるものを礫石錘とした。計1点出土している（掲載なし）。上2箇所、下1箇所に紐掛けと思われる剥離があり、斑纏岩が使用されている。

#### (17) 砥 石

礫の表面に溝状の痕跡が認められるものを砥石とした。計1点出土している。232は正面に礫長軸方向に溝状の痕跡がある。石材は斑纏岩であるが、欠損している。

#### (18) 線 刻 磬

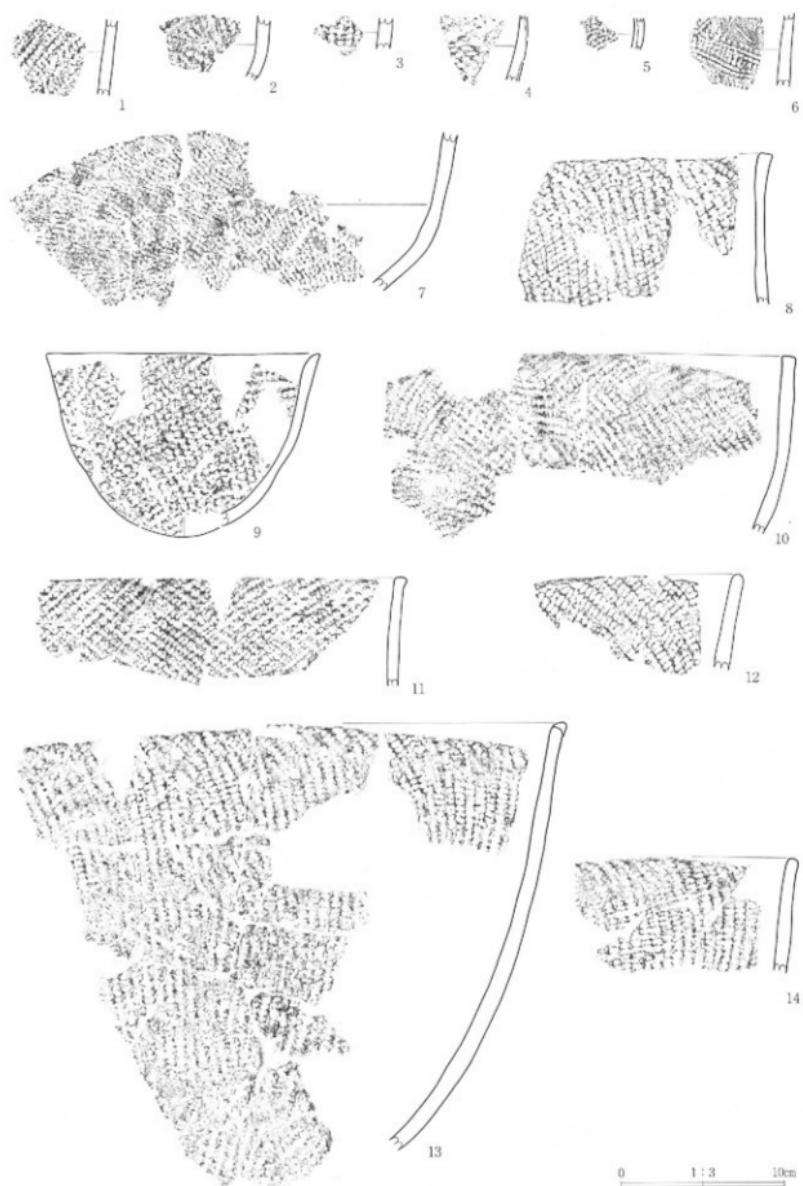
礫表面に線状痕が認められるものが1点出土した。観察では自然礫とも考えられる。石材は頁岩であり、形状は扁平である。

#### (19) 石 盆 台 石 類

表面に使用痕跡（敲打痕・擦痕）が認められる扁平礫で、擦るまたは敲く際の台として使用されたと考えられるものを石盆台石類とした。計3点出土しており、1点を図示した（掲載率33.3%）。出土しているものはいずれも加工されていないものである。

### 3 石 製 品

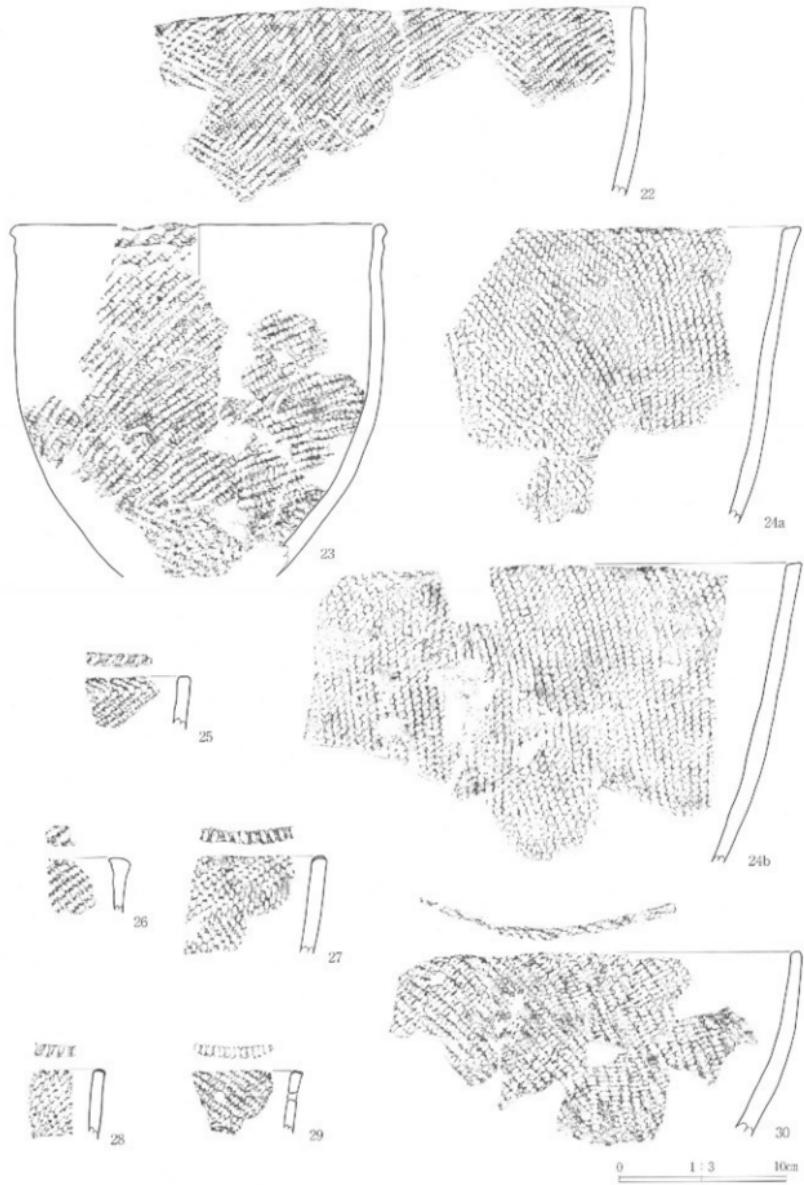
棒状の素材礫に敲打や剥離、研磨などにより成形したもので石棒類と思われるものが2点出土した。235は扁平礫で周囲を剥離で成形している。236は棒状礫で全体を敲打で成形したものと思われる。使用石材は、235が砂岩、236が玢岩である。



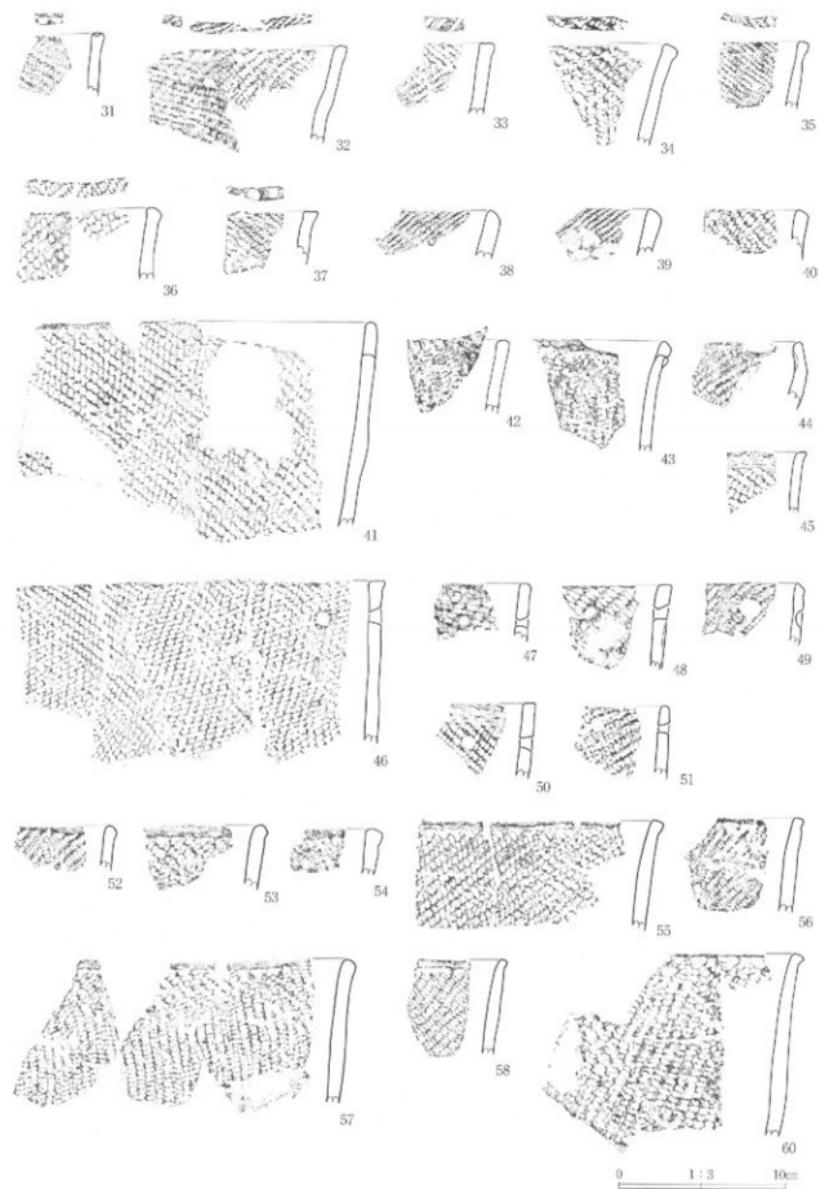
第29図 出土土器 (1)



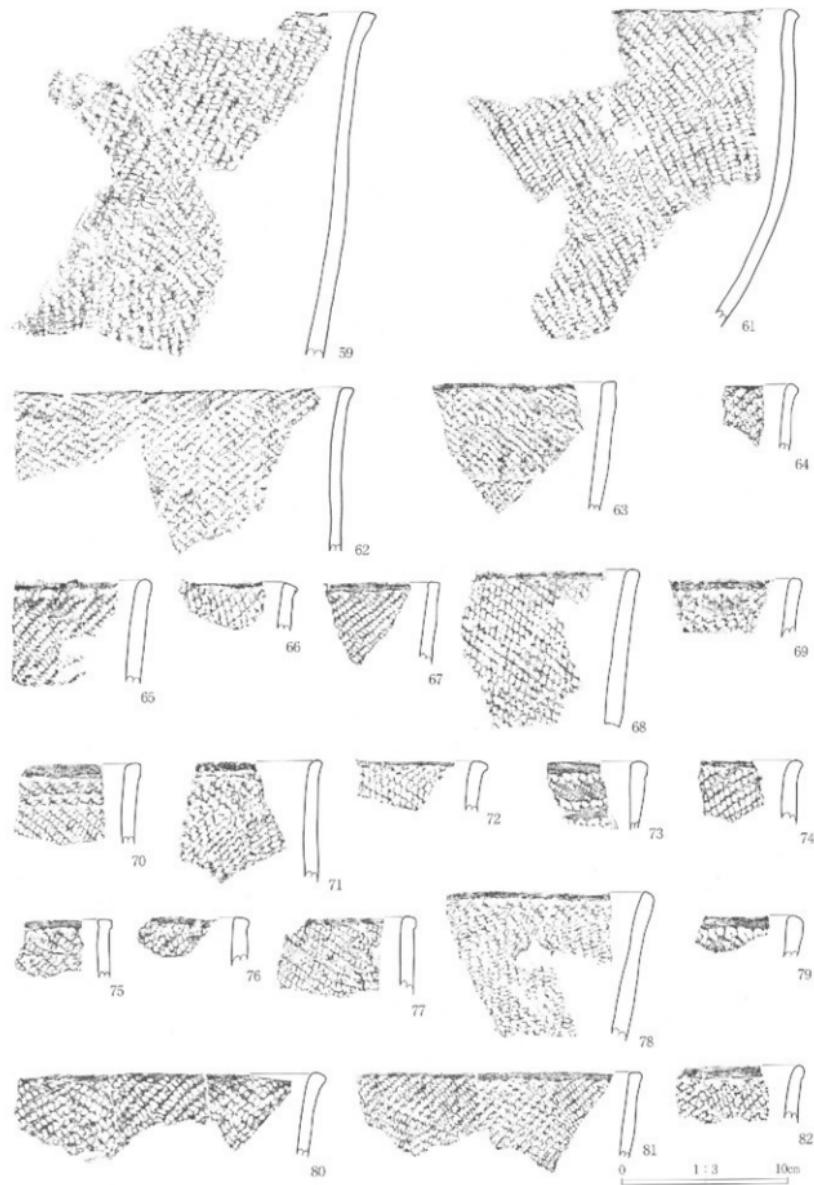
第30図 出土土器（2）



第31図 出土土器 (3)



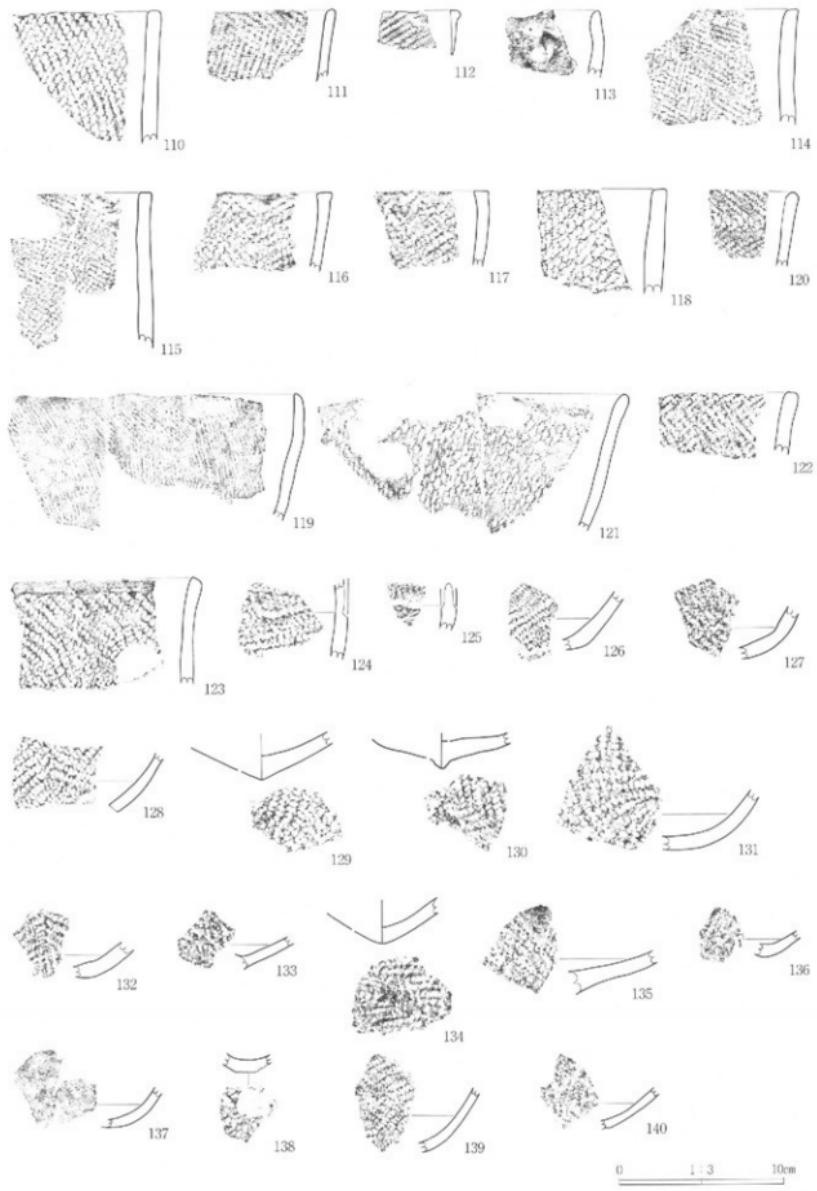
第32図 出土土器 (4)



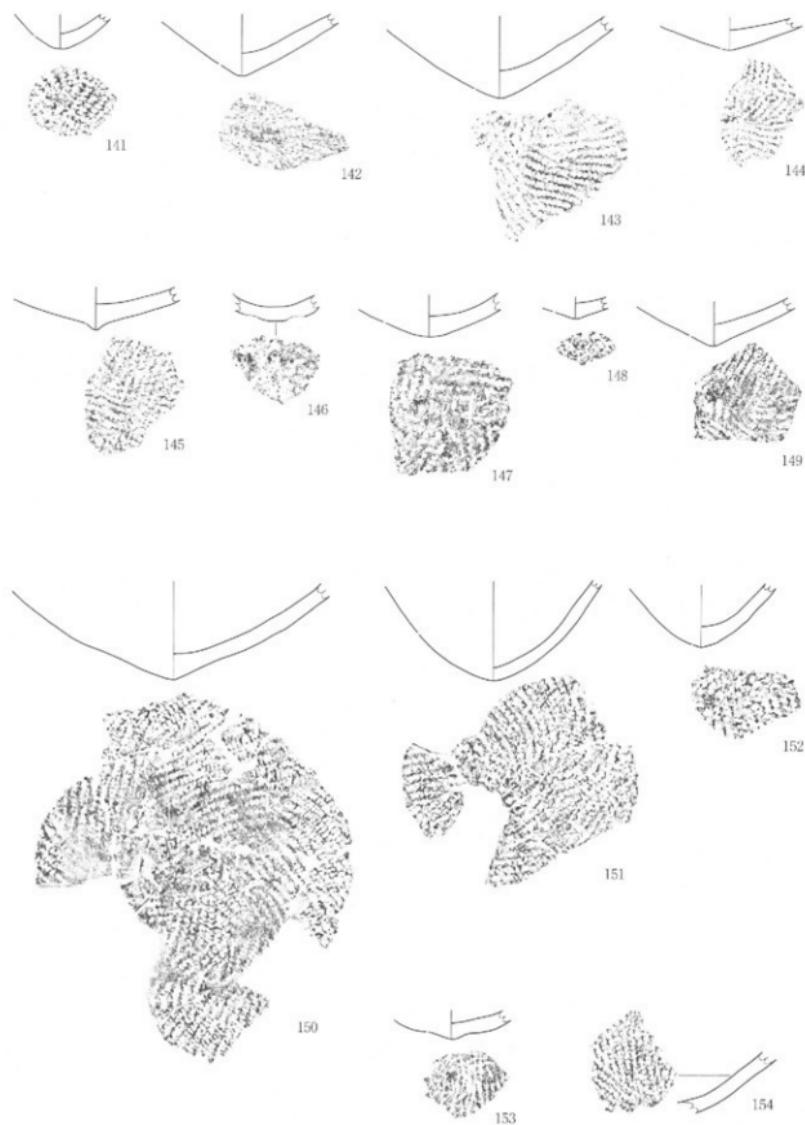
第33図 出土土器 (5)



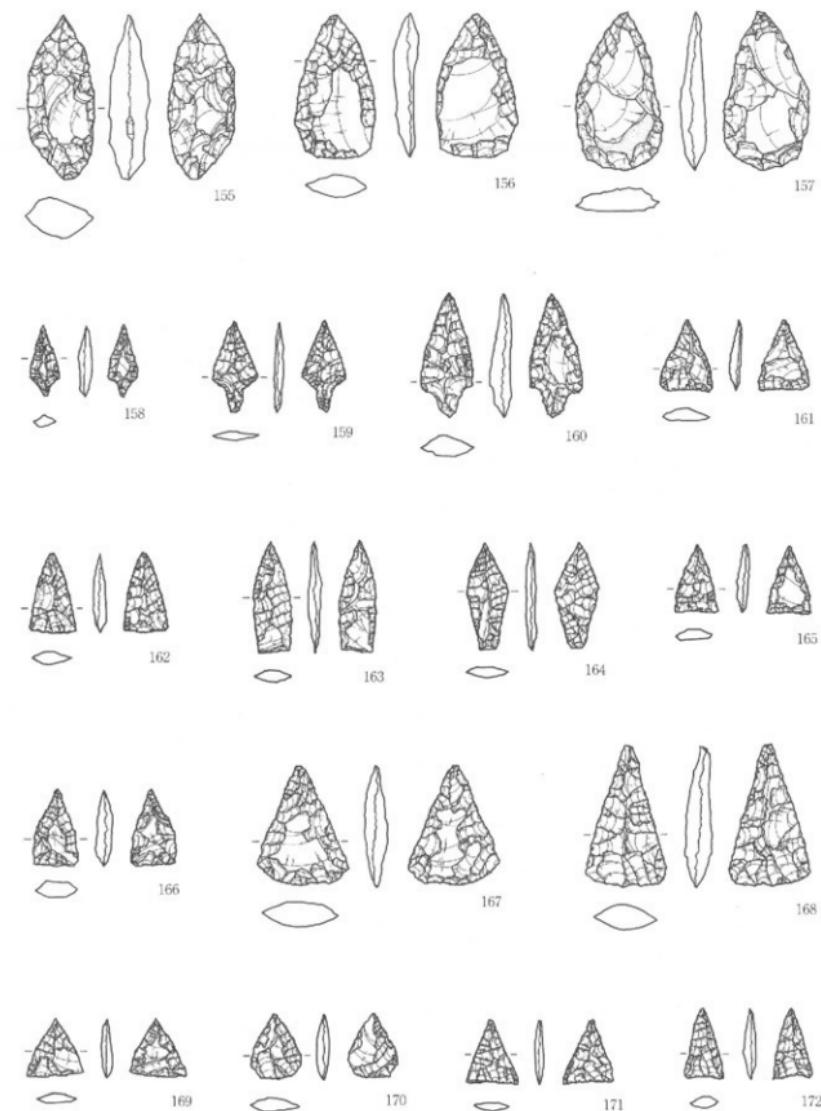
第34図 出土土器（6）



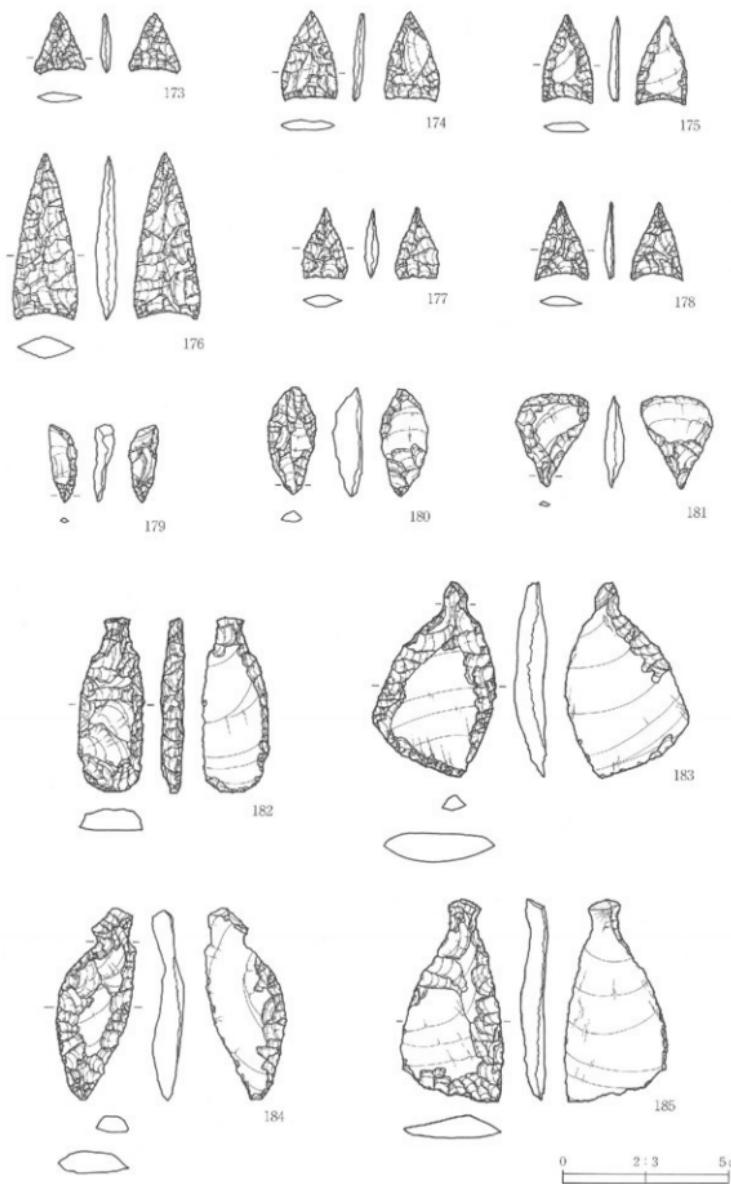
第35図 出土土器 (7)



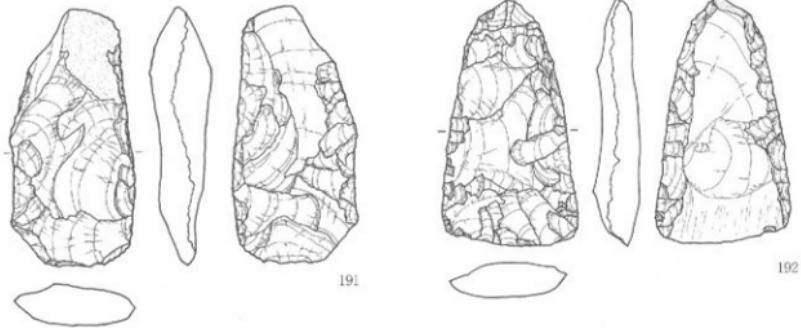
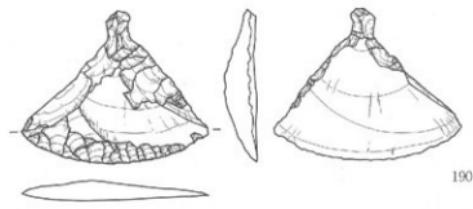
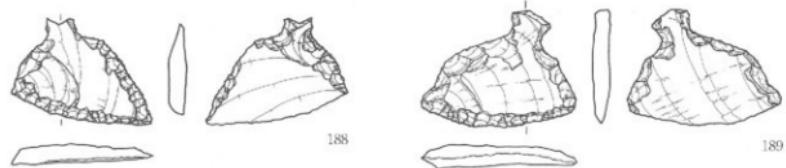
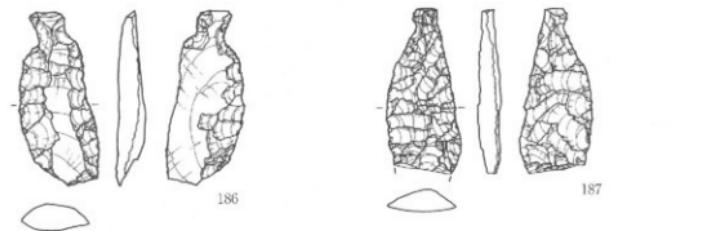
第36図 出土土器 (8)



第37図 出土石器（1）

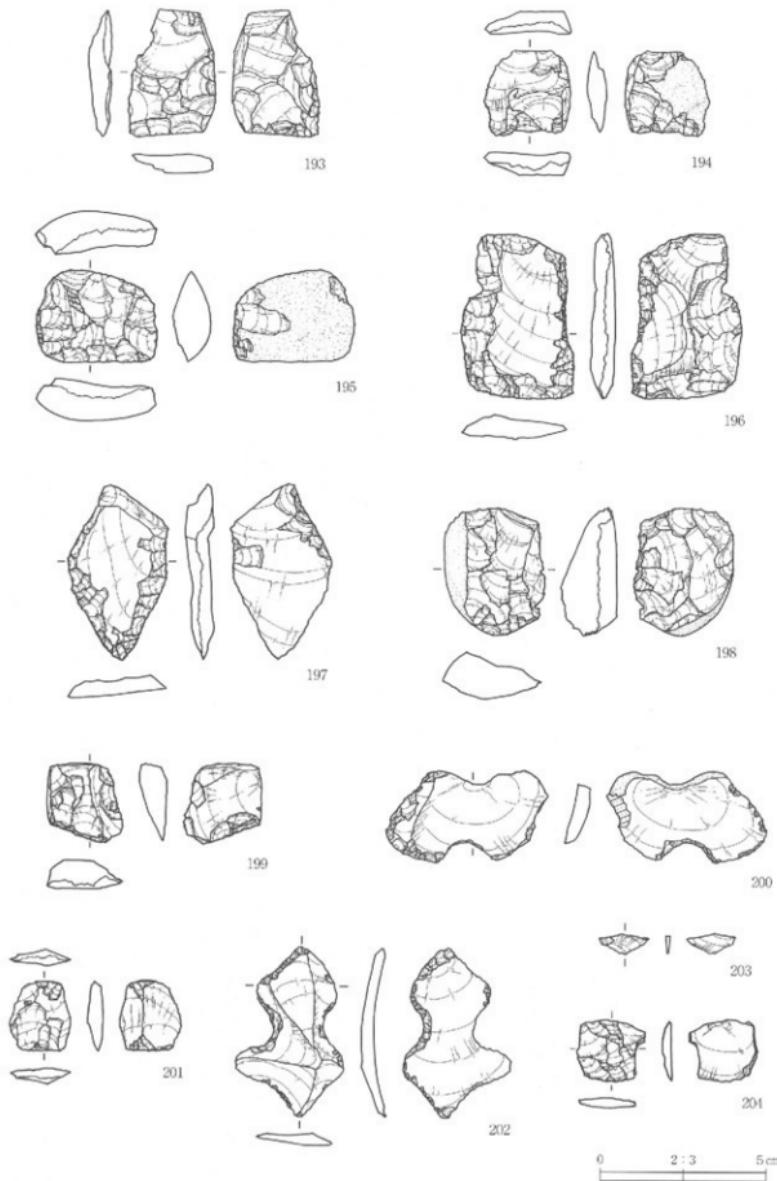


第38図 出土石器（2）

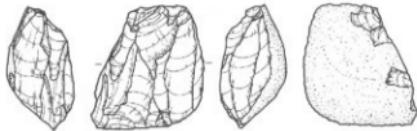


0 2 : 3 5 cm

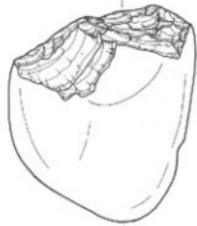
第39図 出土石器 (3)



第40図 出土石器 (4)



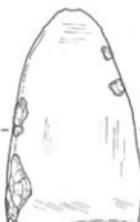
206



205



207



208



211



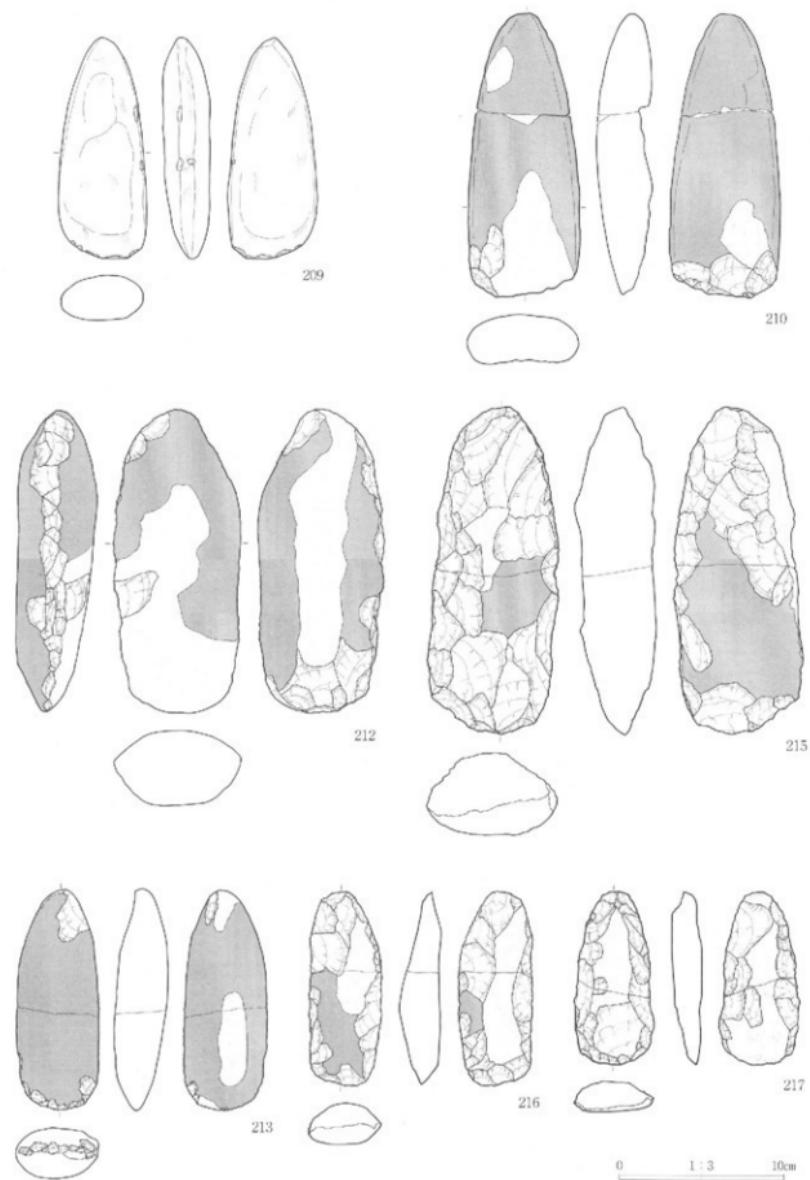
214



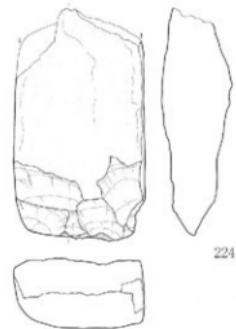
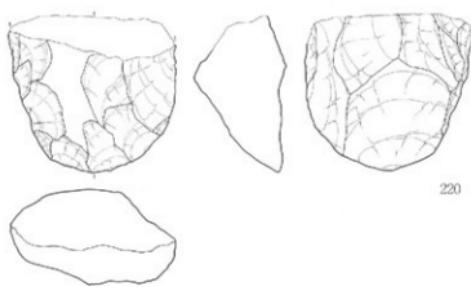
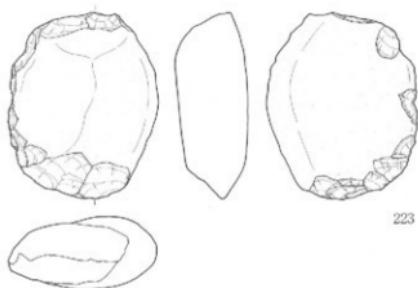
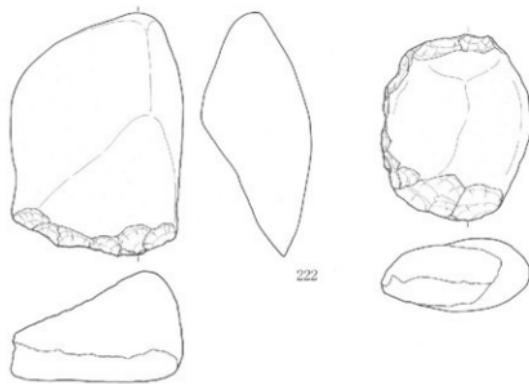
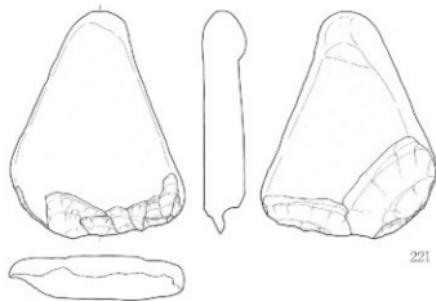
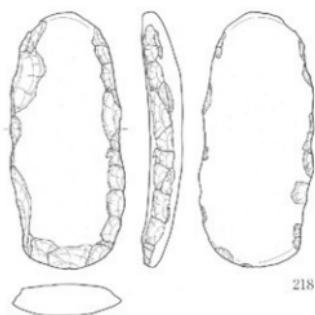
219



第41図 出土石器 (5)



第42図 出土石器（6）

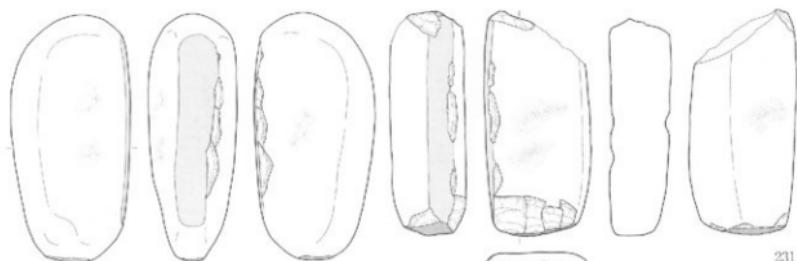


0 1 : 3 10cm

第43図 出土石器 (7)



第44図 出土石器 (8)



230

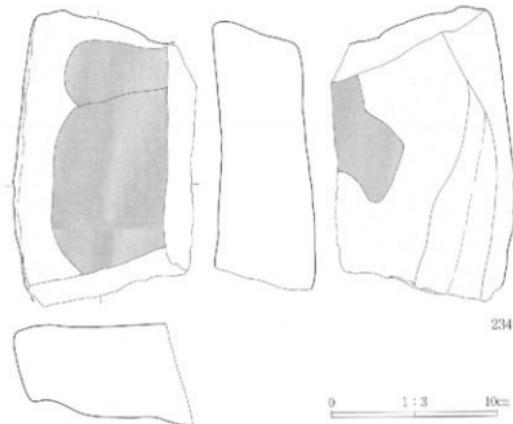
231



232

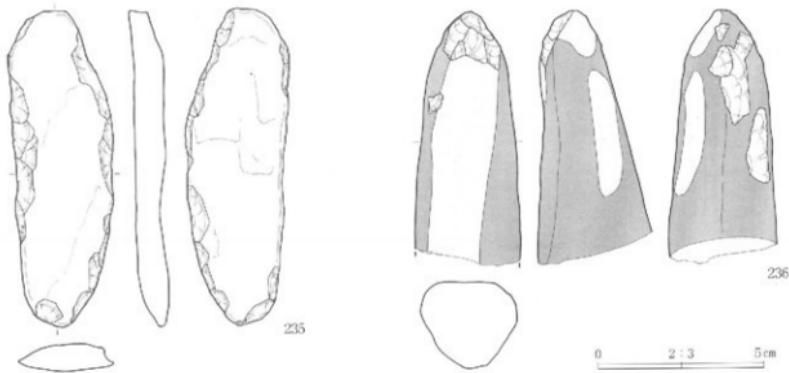


233



234

0 1 : 3 10cm



235

236



0 2 : 3 5cm

第45図 出土石器 (9)

第19表 土坡地分類表

測量名	位置(グリッド)	検出面積	面積(ha)	平均	最高	最低	流さ	流域	流域標高(m)	平均	最高	最低	流域の状況	自然	人為	地質	地図	地主植物	地形	地主植物
1号・2号	N管面	検出面積																		
1号・2号	20.12																			
2号・3号	N管面	890	860	81.0	720	110	15,680	門型	山地	80	115,966	門型	山地	深層	人為	無	無	無	無	無
3号・4号	N管面	103.0	940	90.0	730	70	14,680	内円形	盆地	60	115,966	内円形	盆地	深層	人為	無	無	無	無	無
4号・5号	N管面	149.0	1260	1260	1080	200	147,088	内円形	盆地	50	115,966	内円形	盆地	深層	人為	無	無	無	無	無
5号・6号	11.30	11.30	970	830	770	280	150,752	内円形	盆地	40	115,966	内円形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
6号・7号	11.30	11.30	1160	1120	940	210	150,428	不規則形	盆地	30	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
7号・8号	N管面	1060	1160	1120	940	680	130	144,296	不規則形	盆地	20	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
8号・9号	N管面	82.0	760	740	690	80	144,758	不規則形	盆地	10	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
9号・10号	N管面	157.0	1360	1340	740	750	147,381	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
10号・11号	N管面	152.0	154.0	150.0	860	350	149,353	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
11号・12号	N管面	104.0	1140	570	240	140	149,272	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
12号・13号	N管面	129.0	1230	1210	1140	50	115,966	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
13号・14号	N管面	12.0	970	950	910	870	50	115,966	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
14号・15号	N管面	124.0	1160	1050	1050	250	149,204	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
15号・16号	N管面	160.0	1760	1650	1050	850	150.0	149,204	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
16号・17号	N管面	113.0	1230	1200	810	790	260	149,377	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
17号・18号	N管面	20.16	2160	2120	1160	210	145,986	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
18号・19号	N管面	81.0	860	810	740	710	290	145,786	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
19号・20号	N管面	107.0	960	960	910	840	140	145,286	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
20号・21号	N管面	105.0	970	960	890	840	170	146,490	人跡化形	盆地	50	115,966	人跡化形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
21号・22号	N管面	156.0	151.0	150.0	1280	220	151.540	印字形	盆地	50	115,966	印字形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
22号・23号	N管面	196.0	186.0	186.0	186.0	260	151.051	印字形	盆地	50	115,966	印字形	盆地	深層	自然	無	無	無	無	無
23号・24号	N管面	270.0	270.0	260.0	1120	750	110	153,625	印字形	盆地	50	115,966	印字形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
24号・25号	N管面	118.0	1140	860	760	710	140	126,655	印字形	盆地	50	115,966	印字形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
25号・26号	N管面	105.0	990	950	750	730	250	126,228	印字形	盆地	50	115,966	印字形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
26号・27号	N管面	120.0	120.0	120.0	530	650	670	131,968	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無
27号・28号	N管面	180.0	180.0	180.0	530	650	670	131,968	不規則形	盆地	50	115,966	不規則形	盆地	深層	自然	無	無	無	無

第20表 情土遭損調査表

測量名	位置(グリッド)	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	耕作場所	
1号渠行	60.15	750	750	80.0	151.179	小切替	小切替													

第21表 集石遭損調査表

測量名	位置(グリッド)	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所	检测場所
1号渠行	80.21	53	63	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260	152.260
2号渠石	70.221	112.0	1050	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880	152.880

第22表 ピット調査表

測量名	位置(グリッド)	坑口	坑底	坑壁	坑底	坑壁	坑底	坑壁	坑底	坑壁	坑底	坑壁	坑底	坑壁	坑底	坑壁	坑底	坑壁	坑底
P1	36.7	65.0	53.0	45.0	18.0	152.293	直立												
P2	47.28	56.0	48.0	40.0	151.588	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立
P3	51.065	51.0	24.0	18.0	151.150	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立
P4	51.065	31.0	20.0	17.0	151.688	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立	直立

第23表 土器観察表

施設No	周辺No	出土地点	層位	接合或片数 内割数 枚数	器種	既存位置	法量(cm)			口端部 外側溝 等文など	
							口径	底径	高さ		
1	29	15	4号土坑	堆積土中	1 漢鉢	腹	(4.5)	0.6~0.7		地文	
2	29	15	10号土坑	堆積底面(並層)	1 漢鉢	腹下平	(3.9)	0.6~0.8		地文	
3	29	15	26号土坑	堆積上位	1 漢鉢	腹	(1.9)	0.8		地文	
4	29	15	1号集石	堆山面	1 漢鉢	腹	(4.1)	0.6~0.8		地文・削落	
5	29	15	1号池土	上面	1 漢鉢	腹	(2.0)	(0.4)		地文	
6	29	15	10C22	Ⅱ a層粘土段下位	1 漢鉢	腹	(4.2)	0.6~0.8		引出物: 引 文(濃度)	
7	29	15	6C24	Ⅱ a層粘土段下位	10 漢鉢	腹半~底	(9.9)	0.7~1.0		地文	
8	29	15	6C5	Ⅱ a層粘土段下位	3						
			6C10	Ⅱ a層粘土段下位	1	4 漢鉢	口縁	(9.4)	0.6~0.8	地文	
			6E17	Ⅱ a層粘土段下位	3						
9	29	15	6E17	Ⅱ a層粘土段下位	2	19 漢鉢	口縁~腹下 平	(10.5)	0.5~0.8	地文	
			6E21	Ⅱ a層粘土段下位(二 次状)	14						
10	29	15	7E5(土器集中)	Ⅱ a層粘土段中位	5 漢鉢	口縁	(10.9)	0.7~0.9		地文	
			7F12	Ⅱ a層粘土段中位	3						
			7E4	Ⅱ a層粘土段中位	1						
11	29	15	8C24	Ⅱ a層粘土段上~中位	2	7 漢鉢	口縁	(6.7)	0.6~0.7	地文	
			9C11(四字印記工X)	Ⅱ a層粘土段中位(中 鉢底)	1						
			7F11	Ⅱ a層粘土段中位	3	4 漢鉢	口縁	(5.9)	0.8~1.0	地文	
			7F11	Ⅱ a層粘土段下位	1						
13	29	15	7E5(土器集中②)	Ⅱ a層粘土段中位	5 漢鉢	口縁	(7.1)	0.8~0.9		地文	
14	29	15	7E10(1番集中)	Ⅱ a層粘土段中位	17	20 漢鉢	口縁	(7.1)	0.7~0.9	地文	
			7F10	Ⅱ a層粘土段中位	3						
15	30	15	8D17	Ⅱ a層粘土段上面	1	4 漢鉢	口縁	(7.7)	0.6~0.8	地文後ナダ	地文
			8E17	Ⅱ a層粘土段下位	3						
			9G6	Ⅱ a層粘土段上位	11						
			9D21	Ⅱ a層粘土段上位	19						
16	30	16	9G6	Ⅱ a層粘土段中位	22	57 漢鉢、1箱		(25.9)	0.7~0.9	地文後ナダ	地文
			10C5	Ⅱ a層粘土段上~中位	3						
			9G16	Ⅱ a層粘土段中~下位	1						
			9D21	Ⅱ a層粘土段上面	1						
17	30	16	9G21	Ⅱ a層粘土段上位	2	3 漢鉢	口縁	(6.6)	0.6~0.9	地文	
			9G22	Ⅱ a層粘土段上位	1						
18	30	16	9E22	Ⅱ a層粘土段上位	3 漢鉢	口縁	(4.7)	0.4~0.7	地文後ナダ	地文	
			10D15	Ⅱ a層粘土段中位	6						
19	30	16	10F9	Ⅱ a層粘土段上位	1	8 漢鉢	口縁	(16.3)	0.7~0.9	地文後ナダ	地文
			10G19	Ⅱ a層粘土段上位	1						
20	30	16	10D15	Ⅱ a層粘土段中位	3	4 漢鉢	口縁	(12.1)	0.6~0.7	地文	
			10D14	Ⅱ a層粘土段上位	1						
			10E5	Ⅱ a層粘土段中位	2						
21	30	16	10G20	Ⅱ a層粘土段上位	1	6 漢鉢	口縁	(10.4)	0.6~0.8	地文後ナダ	地文
			10G5	Ⅱ a層粘土段上位	2						
			10D10	Ⅱ a層粘土段上位	1						
			10E2	Ⅱ a層粘土段上位	4						
22	31	17	10E3	Ⅱ a層粘土段上位	1	6 漢鉢	口縁	(11.5)	0.8~0.9	地文後ナダ	地文
			9E23	Ⅱ a層粘土段上位	1						

円山周壁 施入など	スコゴ	縄文灰体				結節	施土	色調内面	色調外側	備考
		地文	条の組き	開閉方向	条幅					
ナデ	外蓋スス	LR	右	横			織維多	10YR5/3にぶい 黄緑	10YR5/3にぶい 黄緑	
ナデ		RL	左・直立	横・斜			織維少	10YR6/3にぶい 黄緑	10YR5/3黄緑	
ナデ		RL	左	斜			織維少	10YR6/3にぶい 黄緑	10YR5/3黄緑	
ナデ	外蓋スス	LRL	左	縦			織維多	10YR6/2灰黄緑	10YR5/4にぶい 黄緑	
ナデ		RL	右	横			織維多	10YR5/3にぶい 黄緑	10YR6/4にぶい 黄緑	
ミガキ							需母	10YR2/1黒褐	10YR5/4にぶい 黄緑	
ナデ							織維多	10YR3/1黒褐	5YR5/6褐	
ナデ		RL	左・直立	横・斜			織維多	10YR7/4にぶい 黄緑	10YR7/3にぶい 黄緑	
ナデ		LR	左・右	横・斜			織維多	10YR2/3黒褐	7.5YR5/6明褐	
ナデ		RL	左・右	横			織維多	10YR3/1黒褐	10YR4/1褐	
ナデ		LR	左・右	横			織維多	10YR7/4にぶい 黄緑	10YR8/4灰黄緑	
ナデ		RL	左	横				10YR1/1褐色	10YR2/1黒	今代測定試料No2
ナデ	外蓋スス	RL	左・直立	横・斜			織維特多	7.5YR6/6褐	7.5YR4/3褐	
ナデ	外蓋上部スス	RL	直立	斜			織維多	10YR7/6明黄緑	7.5YR6/6褐	内外面施けはじけ
ナデ	外蓋スス	RRL	左	横			織維多	10YR6/4にぶい 黄緑	10YR5/2灰黄緑	
ナデ	外蓋スス	RRL	左	横			織維多	10YR7/4にぶい 黄緑	10YR7/6明黄緑	
ナデ	外蓋スス	RL	左・直立	横・斜			織維多	10YR4/1褐色	10YR6/4にぶい 黄緑	
ナデ		RL	左	横			織維多	10YR4/1褐色	10YR7/3にぶい 黄緑	
ナデ		RRL	左	横			織維多	10YR6/6明黄緑	10YR4/4褐	
ナデ	外蓋スス	RRL	左	横			織維多	10YR2/3にぶい 黄緑	10YR4/2灰黄緑	内面施けはじけ
ナデ		RL	右	横			織維多	10YR4/2灰黄緑	10YR5/29灰	
ナデ		LR	左・右	横			織維多	10YR4/1褐色	10YR4/1褐色	

内数No	回数No	等級No	出土地点	層位	接合破片数 内訳数 縦軸	器種	残存位置	法量(cm)			外的特徴・ 添文など
								口径	底径	器高	
23	31	17	8C23	II a 層縫隙上位	12	深鉢	口縁	(21.5)	06~10	施文後ナメ	地文
			8C24	II a 層縫隙上～中位	1						
			8C25	II a 層縫隙上～中位	1						
			8C26	II a 層縫隙上位	3						
			8C28	II a 層縫隙上位	1						
			9C4	II a 層縫隙(?)下位	1						
			9C5	II a 層縫隙中～下位	3						
			8D	板カラシ	1						
24	31	17	9C5	II a 層縫隙上～中位	1	深鉢	口縁	(18.3)	07~11	地文	地文
			8C23	II a 層縫隙下位	1						
			9E25	II a 層縫隙中位	9						
			9E26	II a 層縫隙中位	1						
			10C5	II a 層縫隙上位	3						
			10C6	II a 層縫隙中位	1						
			10C7	II a 層縫隙下位	1						
			10C8	II a 層縫隙中位	1						
25	31	17	6D13	II a 層縫隙下位	1	深鉢	口縁	(3.3)	0.8	地状工具による斜位压板	地文
26	31	17	7E3	II a 層縫隙下位	1	深鉢	口縁	(3.3)	0.5~1.3	LR凹板	地文
27	31	17	8D3	II a 層縫隙上位	1	深鉢	口縁	(6.0)	0.9~1.0	像状工具による斜位压板	地文
			青銅附証土模てす		1						
28	31	17	9C20	II a 層縫隙中位	1	深鉢	口縁	(4.3)	0.7	地状工具による斜位压板	地文
29	31	17	7F1	II a 層縫隙下位	1	深鉢	口縁	(3.8)	0.6~0.7	地状工具による斜位压板	地文
30	31	17	9D16	II a 層縫隙上位	3	深鉢	口縁	(11.8)	0.7~1.1	RL凹板	地文
			9D17	II a 層縫隙上位	4						
31	32	17	7E14	II a 層縫隙中位	1	深鉢	口縁	(3.8)	0.7~0.8	RL凹板压板	地文
32	32	17	6D19	II a 層縫隙下位	4	深鉢	口縁	(5.6)	0.7~0.8	RL凹板	地文
			6D14 黒馬ブラン	II a 層縫隙下位突出	2						
33	32	17	6D13	II a 層縫隙土上面	2	深鉢	口縁	(4.3)	0.8~0.9	地状工具による斜位压板	地文
34	32	17	8F1	II a 層縫隙中位	1	深鉢	口縁	(6.2)	0.8~1.0	LR凹板	地文
35	32	17	9E23	II a 層縫隙	1	深鉢	口縁	(4.0)	0.5~0.7	RL凹板	地文
36	32	18	10D10	II a 層縫隙上位	1	深鉢	口縁	(4.3)	0.8~1.0	LR凹板	地文
			10D14	II a 層縫隙上位	1						
37	32	18	9E17	II a 層縫隙上位	1	深鉢	口縁	(3.3)	0.7~0.9	地状性状による成形	地文
38	32	18	6D25	II a 層縫隙下位	1	深鉢	口縁	(2.8)	0.9~1.0	切り出しがれ(内向外壁)	地文
39	32	18	8E8	II a 層縫隙上位	1	深鉢	口縁	(2.9)	0.9~1.1	切り出しがれ(内向外壁)	地文
40	32	18	9D6	II a 層縫隙中位	1	深鉢	口縁	(3.1)	0.8~0.9	切り出しがれ(内向外壁)	地文
41	32	18	7E5 (-1.基準)	II a 層縫隙中位	4	深鉢	口縁	(12.5)	0.7~1.0		地文
42	32	18	9D18	II a 層縫隙上～中位	1	深鉢		(4.6)	0.7~0.8		地文
43	32	18	10D18	II a 層縫隙中～下位	1	深鉢	口縁	(5.8)	0.6~0.8	施文後ナメ	地文
44	32	18	9D6	II a 層縫隙中位	1	深鉢	口縁	(4.2)	0.5~0.9		地文、表面に成形時の押抜痕痕跡
45	32	18	9E25	II a 層縫隙上位	1	深鉢	口縁	(3.8)	0.6		地文
46	32	18	9E6	II a 層縫隙上位	7	深鉢	口縁	(9.9)	0.8~1.0		地文
			9E1	II a 層縫隙上位	2						

内部調整・施文など	スコグ	縦文原体					断土	角洞内面	色膜外側	編号
		地文	条の様き	同軸方式	条幅	筋節				
ナデ	LR	右	横		右(木端に 縫の付いた 箇) 3段→ 文書名状	織維多	10YR7/41.5×1 黄緑	10YR6/6灰黄緑		
ナデ	RLR	直立	斜			織維多	10YR7/6明黄緑	10YR6/41.5×1 黄緑		
ナデ	羽状(結束繩1種・ LR・RL)	左・右	横			織維多	10YR5/4に赤い 黄緑	10YR5/34.5×1 黄緑		
剥落	LR	右	横			織維多	10YR6/2灰黄緑	10YR4/2A黄緑		
ナデ	LR	右	横			織維多	75YR3/41.5×1 黄緑	75YR5/3L.5×1 黄緑		
ナデ	LR	右	直			織維多	75YR5/4に赤い 黄緑	75YR5/3L.5×1 黄緑		
ナデ	外表面スス	RL	左	斜		織維多	10YR5/3に赤い 黄緑	10YR3/2墨緑	補修孔1箇所(内 から穿孔)	
ナデ	RL	左・直立	横・斜			3~5mmの織維 少・織津少	10YR4/2灰黄緑	10YR6/2K黄緑		
ナデ	外表面スス	RL	左	横		織維多	10YR4/1墨緑	10YR5/2K黄緑		
ナデ	太いLR+細いRL2 種族の草体	左・右	横		7mm大の織維少・ 織津多	10YR4/1墨緑	10YR5/3に赤い 黄緑			
ナデ	羽状(結束繩1種・ LR・RL)	左・右	横			織維多	10YR5/3に赤い 黄緑	10YR6/3に赤い 黄緑		
ナデ	RL	左・直立	横・斜			織維多	10YR6/3に赤い 黄緑	10YR6/3L.5×1 黄緑		
ナデ	RL	左	横			織維多	10YR4/1墨緑	10YR5/4に赤い 黄緑		
ナデ	LR	右	横			織維多	10YR5/2K黄緑	10YR5/2K黄緑		
ナデ	外表面スス	LR	右	横		織維少・白色粉 子少	10YR5/2灰黄緑	10YR5/2K黄緑		
ナデ	外表面スス	RL	右	横		織維少・白色粉 子少	10YR7/3L.5×1 黄緑	10YR7/3L.5×1 黄緑		
ナデ	外表面スス	RL	左	横		織維少	10YR7/3L.5×1 黄緑	10YR7/3L.5×1 黄緑		
ナデ	内外表面スス	RL	左	横		織維多	10YR6/4に赤い 黄緑	10YR6/4L.5×1 黄緑	口縫に後添	
ナデ	外表面スス	RL	左・直立	横・斜		織維多	10YR4/1墨緑	10YR2/2墨緑	年代測定試料No.3	
ナデ	外表面スス	RL	左・直立	横・斜	右(木端に 縫の付いた 箇)	織維多	10YR4/3L.5×1 黄緑	10YR6/4に赤い 黄緑	口縫に後添	
ナデ	LR	右	横			織維少	10YR5/1墨緑	10YR6/1墨緑		
ナデ	口縫細LR・以下は 太RL	横・左	斜・横			織維多	10YR6/2K黄緑	10YR6/2灰黄緑		
ナデ	RLR	左・右 直立	横・斜			織維少	10YR7/3L.5×1 黄緑	75YR6/4に赤い 黄緑	補修孔1箇所(外 から穿孔、直径約 mm)	

揭露No	同様No	考古No	出土地点	層位	複合鉢片数		断面	既存位置	法量(cm)			寸法部	外因調整 施文など
					内底数	縁数			口径	底径	器高	厚さ	
47	32	18	6D13	II a層暗褐色上位	1	深鉢	口縁		(3.5)	0.7~0.8			地文
48	32	18	6D20	II a層暗褐色下位	2	深鉢	口縁		(5.1)	0.7~0.9			地文
49	32	18	7F17	II a層暗褐色中位	1	深鉢	口縁		(3.8)	0.6~0.7			地文
50	32	18	6D24	II a層暗褐色上位	1	深鉢	口縁		(4.7)	0.5~0.7			地文
51	32	18	6D15(北東ペルト)	II a層暗褐色上~中位	1	深鉢	口縁		(4.4)	0.8			地文
52	32	18	4D25	II a層黒褐色下位	1								
52	32	18	6D22	掘立柱	1	深鉢	口縁		(2.7)	0.7~0.8	施文後ナダ		地文
53	32	18	6B16	II a層暗褐色下位	1	深鉢	口縁		(4.0)	0.8~1.0	施文後ナダ		地文
54	32	18	6B16	II a層暗褐色下位	1	深鉢	口縁		(2.8)	0.8~1.1	施文後ナダ		地文
55	32	18	6C19	II a層暗褐色下位	1								
		6C9	II a層暗褐色下位	3	4	深鉢	口縁		(6.7)	0.7~0.9	施文後ナダ		地文
56	32	18	6C1	II a層暗褐色上位(褐色土)	1	深鉢	口縁		(5.0)	0.6~0.8	施文後ナダ		地文
		9D18	II a層尚色土上面	1									
57	32	18	6D10(北東ペルト)	II a層暗褐色上~中位	3								
		6D15	II a層暗褐色下位	1	6	深鉢	口縁		(8.8)	0.8~0.9	施文後ナダ		地文
		6D15	II a層暗褐色下位	1									
58	32	18	6D15(北東ペルト)	II a層暗褐色上~中位	1	深鉢	口縁		(5.7)	0.5~0.8	施文後ナダ		地文
59	33	18	6E16	II a層暗褐色下位	7								
		6E16	II a層暗褐色下位	2	9	深鉢	口縁		(21.0)	0.7~1.0	施文後ナダ		地文
60	32	18	6E16	II a層暗褐色下位	4	深鉢	口縁		(11.0)	0.7~0.9	施文後ナダ		地文
		6E17	II a層暗褐色下位(有)	5	6	深鉢	口縁		(19.4)	0.7~0.9	施文後ナダ		地文
61	33	18	6E18	II a層暗褐色下位	1								
		6E11	II a層暗褐色下位	2									
62	33	19	7F12	II a層暗褐色下位	1	5	深鉢	口縁	(10.0)	0.6~0.8	施文後ナダ		地文
		7F13	II a層暗褐色中位	2									
63	33	19	6E25	II a層暗褐色下位	1	深鉢	口縁		(7.9)	0.7~0.9	施文後ナダ		地文
64	33	19	6F4	II a層暗褐色下位	1	深鉢	口縁		(4.1)	0.6~0.8	施文後ナダ		地文
65	33	19	7F22	II a層暗褐色中位	1	2	深鉢	口縁	(6.4)	0.9~1.0	施文後ナダ		地文
		7E22	II a層暗褐色上位	1									
66	33	19	7E3	II a層暗褐色中位	1	深鉢	口縁		(3.0)	0.7~0.9	施文後ナダ		地文
67	33	19	7E7	黑褐色土	1	深鉢	口縁		(5.1)	0.7~0.8	施文後ナダ		地文
		7F1	グリッド坑付 瓦土器集中	2	3	深鉢	口縁		(9.7)	0.9~1.1			地文
68	33	19	7E5	II a層暗褐色中位	1								
69	33	19	7F6	I b層暗褐色下位	1	深鉢	口縁		(3.7)	0.7~0.8	施文後ナダ		地文
70	33	19	7・8F区	にぶい黄褐色土(燒 出窓)上面	1	深鉢	口縁		(3.9)	0.8~1.0	施文後ナダ		地文
71	33	19	7・8F区	にぶい黄褐色土(燒 出窓)上面	1	深鉢	口縁		(7.4)	0.7~0.8			地文
72	33	19	8D21	II a層暗褐色上位	1	深鉢	口縁		(3.1)	0.7~1.1	施文後ナダ		地文
73	33	19	8D21	II a層暗褐色上位	1	深鉢	口縁		(4.2)	0.6~1.0	施文後ナダ		地文

内面調整、 施設など		調査区域				地質	表の書き	取扱方向	名稱	結晶	形状	色調内面	色調外面	備考
スコダ	スコダ	地文	右	横	左									
ナダ		RLR	右	横						礁織少	10YR6/3に多い 黄緑	10YR6/3に多い 黄緑	青霧孔1層所(内 外から穿孔・直径 3mm)	
ナダ	外面スス	RL	右	横						礁織多	10YR6/4に多い 黄緑	7.5YR6/4に多い 黄緑	青霧孔1層所(内 外から穿孔・直径 3mm)	
ナダ		RL	右	横						礁織多	10YR6/2灰青緑	10YR4/2K青緑	礁織孔1層所(内 外から穿孔・直径 3mm)	
ナダ		白緑層LR。以下は 左RL		横・左	斜・横					礁織少	10YR7/4L黄緑 黄緑	10YR4/1層所	青霧孔1層所(内 外から穿孔・直径 3mm)	
ナダ		LR	右	横						礁織多	10YR7/4Lに多い 黄緑	10YR6/3Lに多い 黄緑	青霧孔1層所(内 外から穿孔・直径 3mm)	
ナダ		LR	右	横						礁織多	10YR6/4に多い 黄緑	5YR5/6明赤鈍		
ナダ		RL	左	横						礁織少	10YR5/3Cに多い 黄緑	10YR6/3Lに多い 黄緑		
ナダ		RL	左	横						礁織少	10YR7/4Lに多い 黄緑	10YR6/9明赤鈍		
ナダ		LR	右・左	横						礁織少	10YR5/4Lに多い 黄緑	10YR6/2K灰青緑	内面洗けはじめ	
ナダ	外國スス	LR	右	斜						礁織多	10YR7/1黒	10YR7/6明赤鈍		
ナダ	外國スス	RL	右・直立	横・斜						3~7mm大の礁織 少・礁織多	10V27/4L黄緑	7.5YR6/6粉		
ナダ		LR	右	斜						右(表面に 礁の付いた 場)	礁織少	10YR6/1礁灰	10YR3/1礁緑	
ナダ		RL	上半は 右、下半は 左	斜						2~5mm大の礁織 多・礁織少	10YR3/4礁緑	10YR3/3礁緑		
ナダ		RL	右・左	横・斜						2~5mm大の礁織 多・礁織少	7.5YR4/4斜	10YR3/3礁緑		
ナダ	外國スス	RL	左	斜						礁織多	10YR6/2灰青緑	7.5YR7/6粉		
ナダ		LR	左・右	横・斜						礁織多	10YR8/4灰青緑	10YR8/4灰青緑		
ナダ		3列(扶桑第1種、 LR・RL)		左・右	横	右				礁織多	10YR7/4Lに多い 黄緑	10YR7/6明赤鈍		
ナダ		LR	右	横						礁織多	10YR7/4Lに多い 黄緑	10YR6/2K灰青緑		
ナダ		LR	右	横						2~5mm大の礁織 多・礁織少	7.5YR6/6粉	10YR6/4Lに多い 黄緑		
ナダ		LR	右	横						礁織多	10YR6/3Cに多い 黄緑	10YR7/4Lに多い 黄緑		
ナダ		LR	右	横						礁織多	10YR5/1礁灰	10YR3/1礁緑		
ナダ		RL	左	横						5mm大の礁織少・ 礁織多	10YR5/2K灰青緑	10YR2/2黒		
ナダ		RL	左	横						礁織多	10YR3/1礁灰	10YR7/4Lに多い 黄緑		
ナダ	外國スス	RL	左	横						礁織多	10YR5/4Cに多い 黄緑	10YR6/4Lに多い 黄緑	内面洗けはじめ	
ナダ		RL	左	横						礁織多	10YR3/2礁毛	10YR7/4Lに多い 黄緑		
ナダ	外國スス	RL	左	横						礁織多	7.5YR5/4に多い 黒	10YR6/3Lに多い 黄緑	内面洗けはじめ	
ナダ		RL	左	横						右(表面に 礁の付いた 場)	礁織少	10YR7/4Lに多い 黄緑	10YR4/2礁灰	

発見No.	開拓No.	年月日	出土地点	層位	検査後片数		器種	残存状態	重量(g)			口給部	外因調整 施文など
					内訳数	總数			口	底	側面		
74	33	19	SD	「ホカクリン」		1	深鉢	口縁		(3.9)	0.8~1.0	施文後ナゲ	地文
75	33	19	8E25	II a 壁面糊上位		1	深鉢	口縁		(3.5)	0.7~0.9	施文後ナゲ	地文
76	33	19	8E18	II a 壁面糊上位		1	深鉢	口縁		(2.9)	0.9~1.0	施文後ナゲ	地文
77	33	19	8E11	II a 壁面糊下位		2	深鉢	口縁		(4.8)	0.8~0.9	施文後ナゲ	地文
78	33	19	9C18	II a 壁面糊上～中位		4	深鉢	口縁		(9.1)	0.7~1.0	施文後ナゲ	地文
79	33	19	9C1	II a 壁面糊下位		1	深鉢	口縁		(2.6)	0.8~1.0		地文
80	33	19	10E12	II a 壁面糊上位		3	深鉢	口縁		(5.1)	0.7~1.0		地文
81	33	19	9E7	II a 壁面糊中位		2	深鉢	口縁		(5.3)	0.6~0.8	施文後ナゲ	地文
82	33	19	9E7	II a 壁面糊下位(黄褐色シミ)		1	深鉢	口縁		(3.6)	0.7~0.8	施文後ナゲ	地文
83	34	19	9D19	II a 壁面糊上位		1	深鉢	口縁		(8.8)	0.8~0.9	施文後ナゲ	地文
84	34	19	9E7 9E12	II a 壁面糊下位	2	3	深鉢	口縁		(6.9)	0.7~0.8	施文後ナゲ	地文
85	34	19	10E8	II a 壁面糊上位	9	11	深鉢	口縁		(10.3)	0.7~0.9	施文後ナゲ	地文
86	34	19	10E4	II a 壁面糊上～中位	2								
86	34	19	10D10	II a 壁面糊上位		1	深鉢	口縁		(3.2)	0.7~0.9	施文後ナゲ	地文
87	34	19	10E7	II a 壁面糊上位	3								
87	34	19	10E2	II a 壁面糊上位	1	5	深鉢	口縁		(2.5)	0.8~1.0	施文後ナゲ	地文
			9D	「ホカクリン」	1								
			4D2	「ホカクリン」	1								
88	34	19	5D1 6D11 6C12	II a 壁面糊上位	2	5	深鉢	口縁		(4.4)	0.6~0.9		地文
			10E6	II a 壁面糊上位	1								
89	34	19	10E6	II a 壁面糊中位	1	4	深鉢	口縁		(5.4)	0.7~0.9		地文
			10E2	II a 壁面糊中位	2								
90	34	19	10E6	II a 壁面糊上位		1	深鉢	口縁		(3.7)	0.7~0.9	施文後ナゲ	地文
91	34	19	9C22	II a 壁面糊下位		1	深鉢	口縁		(5.6)	0.8~1.0	施文後ナゲ	地文
92	34	20	9E8	II a 壁面糊上位		1	深鉢	口縁		(7.9)	0.7~1.1		地文
93	34	20	9E18	II a 壁面糊中位		1	深鉢	口縁		(6.9)	0.6~1.0		地文
94	34	20	6F22	II a 壁面糊下位		2	深鉢	口縁		(3.2)	0.8~0.9		地文
95	34	20	7F6	II a 壁面糊中位		1	深鉢	口縁		(3.0)	0.7~1.0		地文
96	34	20	9D11	II a 壁面糊上位		1	深鉢	口縁		(3.1)	0.8~1.0		地文
97	34	20	10D9	II a 壁面糊上位		1	深鉢	口縁		(3.1)	0.8~0.9		地文
98	34	20	10E1 9D 7C7	II a 壁面糊中位 「ホカクリン」	2	3	深鉢	口縁		(5.7)	0.7~0.9		地文
99	34	20	7C8	II a 壁面糊下位	1	3	深鉢	口縁		(7.2)	0.7~1.0		地文

内面調整・ 飾文など	スコグ	視文把作				粘土	色觸判定	色觸外見	目次
		造文	条の握さ	留め方向	赤基				
ナデ	LR	右	横			織維多	10YR5/2灰黄褐	10YR7/3に赤い 黄褐	
ナデ	LR	左	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維多	10YR7/4に赤い 黄褐	
ナデ	LR	右	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維多	10YR5/3に赤い 黄褐	
ナデ	RL	左	横			沿多・織維多	10YR6/4に赤い 黄褐	10YR2/1墨	
ナデ	RL	左	縦			Sei人の織維少・ 織維多	10YR5/4に赤い 黄褐	10YR3/2灰褐	
ナデ	RL	左	横			若(赤端に 縫の付いた 縫)	織維多	10YR8/3灰黄褐	10YR8/3灰黄褐
ナデ	LR	左・右	横・斜			織維多	10YR7/3赤黄褐	10YR6/3に赤い 黄褐	
ナデ・振調 仕事	外向スス	左・右	横・斜			織維多	10YR6/3赤黄褐	10YR6/3に赤い 黄褐	
ナデ	LR	左・右	横・斜			織維少	10YR7/4に赤い 黄褐	10YR7/4に赤い 黄褐	
ナデ	RL	左	横			織維少	7.5YR6/4赤黄褐	7.5YR6/4に赤い 黄褐	
ナデ・粗筋 直裏	LR	右	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維多	10YR6/4に赤い 黄褐	10YR4/1暗灰
ナデ	RL	左・右	横・斜			織維多	7.5YR6/4赤黄褐	7.5YR5/4に赤い 明	
ナデ	LR	左・右	縦			織維多	10YR5/2灰黄褐	10YR4/1灰褐	
ナデ	外向スス	左・右	横・斜			織維多	7.5YR5/4赤黄褐	7.5YR5/4に赤い 明	
ナデ	LR	右	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	10YR7/4に赤い 黄褐	
ナデ	RL	左・右	横・斜			織維少	10YR6/4に赤い 黄褐	10YR7/4に赤い 黄褐	
ナデ	LR	左・右	横・斜			織維多	7.5YR5/4赤黄褐	7.5YR5/4に赤い 明	
ナデ	LR	右	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	10YR7/4に赤い 黄褐	
ナデ	RL	左	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	10YR6/4に赤い 黄褐	10YR6/6明黄褐
ナデ	LR	左・右	斜			織維少	10YR6/4に赤い 黄褐	10YR6/3に赤い 黄褐	
ナデ	RL	左	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	10YR7/4に赤い 黄褐	10YR7/6明黄褐
ナデ	RL	左	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維多	10YR5/4に赤い 黄褐	
ナデ	RL	左	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	10YR6/3赤黄褐	10YR2/4に赤い 黄褐
トデ	LR	右	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	5YR6/8赤	5YR6/8赤
ナデ	RL	右	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	5YR6/8赤	10YR7/6明黄褐
ナデ	LR	右	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	10YR7/6灰黄褐	10YR7/4に赤い 黄褐
ナデ	LR	左	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	5YR7/6赤	7.5YR7/6赤
ナデ	LR	左	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	7.5YR6/6赤	10YR6/4に赤い 黄褐
ナデ	LR	口押は 右、縫は 左	横			有(赤端に 縫の付いた 縫)	織維少	10YR7/4に赤い 黄褐	7.5YR7/6赤

発掘No	測量No	基準No	出土地点	層位	接合破片数 内蔵数	器種 枚数	焼存位置	法量(cm)			口沿 底	底裏 内面	外側観察 族文など
								底	底裏	厚さ			
100	34	20	9E13	II a 層焼褐上位	2	3	透体	11縫		(5.1)	0.8~1.0	施文後ナガ	地文
				II a 層褐色土	1								
102	34	20	10E:	II a 層焼褐下位	2	深鉢	11縫		(6.2)	0.8~1.0			地文
				II a 層焼褐中位	1	深鉢	口縫		(2.0)	0.8~1.0			
103	34	20	10E2	II a 層焼褐下位	1	深鉢	口縫		(3.3)	0.6~0.9			地文
				II a 層焼褐中位	1	深鉢	口縫						
104	34	20	9E22	II a 層焼褐上位	3	深体	口縫		(9.7)	0.8~1.0			地文
				II a 層焼褐上位(母 器+底生ブロック)	2	深鉢	口縫		(1.6)	0.7~0.8	施文後ナガ	地文	
106	34	20	5E17	II a 層焼褐中~下位	1	深鉢	11縫		(1.7)	0.7~0.8			地文
				II a 層焼褐上位	1	深鉢	口縫		(3.6)	0.6~0.7			
107	34	20	5D25	II a 層焼褐上位	1	深鉢	口縫						地文
108	34	20	8D24	II a 層焼褐中位	1	深鉢	口縫		(5.1)	0.6~0.7	施文後ナガ	地文	
				II a 層焼色土上位	2	深鉢	口縫						
109	35	20	10D10	II a 層焼褐上位	1	深鉢	11縫		(3.3)	0.9			地文
				II a 層焼褐下位	1	深鉢	口縫						
110	35	20	9D9	II a 層焼褐上位	1	深鉢	口縫		(8.1)	0.9~1.0			地文
111	35	20	9D8	II a 層焼褐上位	1	深鉢	口縫		(4.4)	0.5~0.6			地文
112	35	20	7E9	II a 層焼褐上位	1	深体	口縫		(2.8)	(0.7)			地文
				II a 層焼褐中位	1	深鉢	口縫		(4.1)	0.5~0.8	ナゲ 指観	仕紙	
113	35	20	7F7	II a 層焼褐中位	1	深鉢	口縫						
				II b 層黒褐下位	1	深鉢	11縫		(7.1)	0.8~1.0			地文
114	35	20	6E23	II b 層黒褐下位	4	深鉢	11縫		(9.6)	0.8~1.0			地文
115	35	20	6C25	II a 層焼褐下位	1	深鉢	口縫		(4.8)	0.6~0.9	施文後ナガ	地文	
116	35	20	6B9	II a 層焼褐下位	1	深体	口縫		(4.6)	0.6~0.9	施文後ナガ	地文	
117	35	20	中央トレンチ 3D16	II b 層黒褐色上	1	深体	口縫						
118	35	20	6C18	II a 層焼褐下位	1	深鉢	11縫		(5.5)	0.9~1.2			地文
				II a 層焼褐土混合	3	深鉢	11縫		(7.8)	0.4~0.7			
119	35	20	15TG5	粘物 褐色土混合	1	深鉢	口縫						
				II a 層焼褐中位	1	深鉢	口縫		(4.5)	0.6~0.8	施文後ナガ	地文	
120	35	20	6G5	II a 層焼褐下位	4	深体	口縫		(8.3)	0.7~0.8			地文
121	35	20	6C24	II a 層焼褐下位	1	深鉢	口縫						
122	35	20	7F1	II a 層焼褐中位	1	深鉢	口縫		(3.8)	0.9~1.0			地文
123	35	20	6C4~9	II a 層焼褐中位	1	深鉢	口縫						
				II a 層焼褐下位	2	深鉢			(6.5)	0.2~0.8			地文
124	35	20	9D24	II a 層焼褐上位	1	深鉢	測						地文
				II a 層焼褐土上位	1	深鉢	口縫		(4.9)	0.7~0.8			
125	35	20	6D13	II a 層焼褐土上位	1	深鉢	口縫		(2.8)	0.8~1.0			地文
126	35	20	5C4トレンチ	II a 層焼褐下位	1	深鉢	底付近		(3.6)	0.7~1.0			地文
127	35	21	6D6	II a 層焼褐下位	1	深鉢	底付近		(3.4)	0.7~0.9			地文
128	35	21	6C10	II a 層焼褐下位	1	深鉢	底		(3.5)	0.5~0.7			地文
				II b 層黒褐下位	1	深鉢	底						
129	35	21	5D7	II b 層黒褐下位	1	深鉢	底		(2.8)	0.8~1.5			地文
130	35	21	6D9	II a 層焼褐下位	1	深鉢	底		(2.3)	0.7~1.2			地文、我が 状況
131	35	21	6E17	II a 層焼褐下位	1	深鉢	底		(3.7)	0.7~0.9			地文
132	35	21	6C9	II a 層焼褐下位	1	深鉢	底		(2.2)	0.8~1.0			地文
133	35	21	6C14	II a 層焼褐下位	1	深鉢	底		(1.9)	0.6~0.8			地文
134	35	21	6D6	II a 層焼褐下位	1	深鉢	底		(2.7)	0.8~1.0			地文

内部測定・ 施設など	ススコグ	純文房体				計数	色調内面	色調外面	備考
		款式	条の様式	記帳方向	各端				
ナデ	LR	右	横			有(末満に 理の付いた 端)	黒墨少 無墨多	10YR7/4C/5W 黄緑	10YR7/4C/5W 黄緑
ナデ	RL	左	横			有(末満に 理の付いた 端)	2mm大の墨跡少 無墨少	10YR7/4C/5W 黄緑	10YR7/4C/5W 黄緑
ナデ	RL	左	横			有(末満に 理の付いた 端)	無墨少	10YR6/4C/5W 黄緑	10YR7/4C/5W 黄緑
ナデ	RL	左	横			有(末満に 理の付いた 端)	無墨少	7.5YR7/6W	10YR6/6明黄緑
ナデ	RL	左・右	横・斜			5mm大の墨跡少 無墨多	7.5YR7/6W	10YR6/4C/5W 黄緑	
ナデ	LR	右	斜			無墨多	10YR7/2C/5W 黄緑	10YR5/2C灰青緑	
ナデ	LR	左・右	横・斜			無墨多	10YR7/4C/5W 黄緑	10YR6/2灰青緑	
ナデ	RL	左	横			無墨多	10YR7/4C/5W 黄緑	10YR7/3C/5W 黄緑	
ナデ	RL	左	横			無墨多	10YR4/1黒灰	10YR6/2灰青緑	
ナデ	RLR	左	横			無墨多	10YR5/2灰青緑	10YR7/2C/5W 黄緑	
ナデ	RLR	左	横			無墨多	10YR7/3/5W 黄緑	10YR2/1黒	
ナデ	RL	左・右	横・斜			無墨多	7.5YR7/6W	10YR3/1黒糊	
乳落	LR	右	横			無墨多	10YR7/3C/5W 黄緑	10YR5/3C/5W 黄緑	
ナデ・指揮 注釈						無墨多	10YR6/2灰青緑	10YR7/4C/5W 黄緑	横けはけけ
ナデ	LR	左・右	横・斜			無墨少 無墨多	10YR3/1黒糊	10YR7/4C/5W 黄緑	
ナデ	LR	左	横			無墨少	10YR4/2C/5W 黄緑	10YR7/6明黄緑	
ナデ	LR	左・右	横			無墨少	10YR2/1黒	10YR6/2灰青緑	
ナデ	RL	左・右	横・斜			無墨少	10YR4/1黒糊	10YR7/2C/5W 黄緑	
ナデ	LR	右	横			無墨少	10YR3/1黒糊	10YR4/1黒	
ナデ	R	左・直立	横・斜			5mm大の墨跡少 無墨多	10YR5/4C/5W 黄緑	10YR4/2C/5W 黄緑	
ナデ	RL	左・右	横			無墨少	10YR6/4C/5W 黄緑	10YR7/3C/5W 黄緑	
ナデ	LR	左・右	横			無墨多	10YR2/1黒	10YR6/2灰青緑	
ナデ	RL	左	横			無墨多	10YR4/1黒糊	10YR7/2C/5W 黄緑	
ナデ	RL	左	横			無墨少	10YR5/4C/5W 黄緑	10YR4/2C/5W 黄緑	
ナデ	RL	左	横			無墨少	10YR3/1黒糊	10YR4/1黒	
ナデ	RL	右	斜			無墨多	10YR5/2灰青緑	10YR4/2C/5W 黄緑	
ナデ	RL	右	斜			無墨少	10YR6/4C/5W 黄緑	10YR7/3C/5W 黄緑	
ナデ	RL	右	斜			無墨多	10YR3/1黒糊	10YR4/2C/5W 黄緑	
ナデ	RLR	右	斜			無墨多	10YR5/2灰青緑	7.5YR7/6W	剥がれた箇所に6 道文有り
ナデ	LR	直立	斜			無墨多	10YR3/1黒糊	7.5YR7/4C/5W 黄緑	剥がした箇所に6 道文有り
ナデ	LR	右	横			無墨多	10YR3/1黒糊	10YR6/3C/5W 黄緑	
ナデ・指揮 注釈	LR	左	横			無墨多	10YR3/1黒糊	5YR5/8赤緑	
ナデ	LR	左・右	横・斜			無墨多	10YR2/1黒	10YR7/6明赤緑	
ナデ	LR	左	横			無墨多	10YR3/1黒糊	10YR7/3C/5W 黄緑	
ナデ	RL	左・右	横・斜			無墨多	10YR7/6明赤緑	5YR5/6赤緑	
ナデ	LR	左・右	横・斜			無墨多	10YR2/4C/5W 黄緑	10YR7/3C/5W 黄緑	
ナデ	LR	左	横			無墨多	10YR3/1黒	10YR6/4C/5W 黄緑	
ナデ	RL	左	横			無墨多	10YR4/1黒糊	10YR6/4C/5W 黄緑	
ナデ	RL	左	横			無墨多	10YR2/1黒	10YR6/4C/5W 黄緑	

地點番号	回数(4)	等級番号	出土地点	層位	接合破片数 内の数	記載	残存位置	法量(cm)			寸牌部	外観調整 施設など
								口井	基面	厚さ		
135	35	21	6D19	II a 層階層子位	1	深井	底	(26)	08~14		地文	
136	35	21	6F24	II a 層階層子位	1	深井	底	(11)	05~08		地文	
137	35	21	7F08	II a 層階層中～下位	2	深井	底	(25)	05~08		ナメ(無文)	
138	35	21	7F15	II a 層階層中位	1	深井	底	(12)	07~08		地文	
139	35	21	7F18	II a 層階層子位	2	深井	底	(41)	05~07		地文	
140	35	21	7F19	II a 層階層中位	1	深井	底	(26)	04~05		地文	
141	36	21	7F7	II a 層階層中位	1	深井	底	(22)	07~10		地文	
142	36	21	8D13	II a 層階層中～下位	1	深井	底	(38)	08~14		地文	
143	36	21	8C16 (西平塀加トレ ンチ)	II a 層階層色(中擦) 直上	1	深井	底	(51)	10~13		地文	
144	36	21	9C5	II a 層階層10～7位	2	深井	底	(20)	08~13		地文	
145	36	21	9C12	II a 層階層中～下位	2	深井	底	(27)	09~16		地文	
146	36	21	9D20	II a 層階層上位	2	深井	底	(17)	08~09		剥落	
147	36	21	9D8	II a 層階層上位	1	深井	底	(27)	09~13		地文	
148	36	21	9D2	II a 層階層中位	1	深井	底	(14)	07~10		地文	
149	36	21	9E24	II a 層階層上位	1	深井	底	(27)	07~13		地文	
			9E22	II a 層階層上位	7							
			10L3	II a 層階層上位	1							
150	36	21	9F2	II a 層階層中～下位	1	11 深井	底	(60)	09~16		地文	
			10L9	II a 層階層上位	1							
			9E21	II a 層階層上位	1							
			10N5	II a 層階層中位	5							
151	36	21	10D10	II a 層階層中位	1	7 深井	底	(61)	06~08		地文	
			10L4	II a 層階層上位	1							
152	36	21	10L3	II a 層階層上位	1	深井	底	(39)	07~13		地文	
153	36	21	10E18	II a 層階層上位	1	深井	底	(18)	08~10		地文	
154	36	21	10E3	II a 層階層上位	1	深井	底	(38)	08~09		地文	

内面調整・ 施設など	ススコイダ	縄文原体				貼上	色調内面	色調外面	備考
		地文	条の様式	回転方向	各種				
ナゲ	RLR	左・右	横・斜			織維多	10YR6/4にぶい 黄緑	3YR6/8黄	
ナゲ	LR	左・右	横・斜			織維少	10YR3/2黒灰	10YR7/6明黄緑	
ナゲ						織維少	10YR6/1黒灰	10YR7/2にぶい 黄緑	
ナゲ	LR	左・右	横・斜			織維多	10YR6/2R黄緑	10YR5/2黄	
ナゲ	RL	左・右	横・斜			織維多	10YR4/1黒灰	10YR4/1黒灰	
ナゲ	LR	左・右	横・斜			織維多	10YR3/2黒灰	10YR6/4Rにぶい 黄緑	
ナゲ	RLR	左・右	横・斜			織維多	10YR2/1黒	10YR5/3にぶい 黄緑	
ナゲ	LR	左・右	横・斜			織維多	10YR3/2黒緑	10YR7/8黄緑	
ナゲ	LR	左・直立	横・斜			3mm以上の織維・ 織尾少	10YR7/4にぶい 黄緑	75YR7/6緑	
ナゲ	RL	左・直立	横・斜			2mm人の織維・ 織尾少	75YR7/6緑	3YR6/9緑	内面抜けはじけ
ナゲ	RL	左・直立	横・斜			2mm人の織維・ 織尾少	10YR4/1黒灰	10YR7/6明黄緑	外側抜けはじけ
ナゲ	LR	左・右	横・斜			織維少	10YR2/1黒	25YR6/4にぶい 黄	
ナゲ	RL	左・右	横			織維少	10YR2/2黒	10YR6/6明黄緑	
ナゲ	RL	左・右	横			織維少	10YR2/1黒	10YR7/4Cにぶい 黄緑	
ナゲ	RL	左・右	横			織維少	10YR5/1黒灰	10YR5/4にぶい 黄緑	内面抜けはじけ
ナゲ	LR	左・右	横・斜			織維多	10YR3/1黒緑	10YR6/4Cにぶい 黄緑	
ナゲ	RLR	左	横			織維多	10YR6/4Cにぶい 黄緑	10YR5/6黄緑	
ナゲ	LR	左・右	横			織維多	10YR2/1黒	10YR6/4Cにぶい 黄緑	
ナゲ	LR	左・右	横			織維多	10YR5/3にぶい 黄緑	10YR7/4Cにぶい 黄緑	尖底部着子重み
ナゲ	RL	左・右	横			3mm以上の織維多・ 織尾少	10YR5/2R黄緑	10YR7/6明黄緑	

第24表 尖頭器觀察表

標本名	頭頂部	出尖端	側面	背面	石け	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	先端角(度)	先端角(度)	自然角	鋸歯・折断	備考
135	37	22	1010	正三角形小尖	尖頭器	5.08	2.03	1.18	2.50	0.58	11.21	先	640
136	37	22	6512	正三角形小尖	尖頭器	4.40	2.40	0.73	1.83	0.30	6.63	先	605
137	37	22	1098	正三角形小尖	尖頭器	4.90	2.58	0.72	1.90	0.28	10.38	先	610

第25表 石鑿觀察表

標本名	頭頂部	側面	背面	石け	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	先端角(度)	先端角(度)	自然角	鋸歯・折断	備考	
138	37	22	6019	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.43	2.23	6.44	0.65	先
139	37	22	968	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	2.09	6.23	0.71	先
140	37	22	1061	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.41	2.40	6.41	0.67	先
141	37	22	7429	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.40	2.24	1.08	先	510
142	37	22	6123	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.41	1.81	1.10	先	515
143	37	22	9512	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.28	2.84	6.22	1.47	先
144	37	22	9075	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	2.00	6.23	1.17	先
145	37	22	6517	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.91	0.23	0.71	先
146	37	22	100	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
147	38	22	906	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
148	38	22	9075	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
149	38	22	506 (アレル)	圓錐形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
150	38	22	9012	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
151	37	22	6618	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
152	37	22	6822	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
153	38	22	5017	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
154	38	22	6011	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
155	38	22	9002	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
156	38	22	501	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
157	38	22	6517	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先
158	38	22	8016	正三角形(頭尾アシテ)	石け	1.4	0.85	0.26	0.31	1.90	1.57	0.34	先

第26表 石鑿觀察表

標本名	頭頂部	出土地点	頭頂部	側面	背面	分析	石け	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	先端角(度)	先端角(度)	自然角	鋸歯・折断	備考
179	38	22	6136 (アレル)	正三角形	石け	1	0.85	2.41	0.73	0.65	0.30	0.89	先	610	
180	38	22	6625	正三角形	石け	1	0.85	3.28	1.48	0.97	0.22	0.59	3.72	先	550
181	38	22	708	正三角形	石け	1	0.85	2.88	2.15	0.61	1.34	0.28	2.82	先	550

表27 石點觀察表

卷之二十一

序号	采样点	采样时间	风向	风速	温度		湿度		气压		风速		风向		风速		风向	
					气温(℃)	露点(℃)	相对湿度(%)	绝对湿度(g/m³)	气压(hPa)	高度(m)	风速(m/s)	风向(°)	风速(m/s)	风向(°)	风速(m/s)	风向(°)	风速(m/s)	风向(°)
191	191 测点	2015-05-23 10:15	西南	0.5	20.8	18.8	90	0.0018	1012.5	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0
192	192 测点	2015-05-23 09:15	西南	0.5	20.8	18.8	90	0.0018	1012.5	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0

表29 橢形石器觀察表

序号	地质特征	地层厚度(m)		岩性	分带	石英	长英石	钾长石	斜长石/绿泥石	重砂/g/t	自然伽	风化	
		上界	下界										
183	砂岩	23	75.6	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ	砾石带下位	砾石带	1	百叶	395	0.65	1.25	0.25	有
184	砂岩	23	95.6	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ	砾石带中位	砾石带	1	百叶	262	0.70	1.04	0.28	有
185	砂岩	23	87.6	Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ	砾石带上位	砾石带	1	百叶	367	283	1.16	1.30	无

表30スクレイバーデザイン

卷之三十一

第32表 微細剥離痕ある剝片観察表

地名	经度(°)	纬度(°)	海拔(m)	植被		石砾	冲积物	冲积物	冲积物	冲积物	冲积物	冲积物
				灌木	草本							
301 40° 24° 56' E	301	40	24° 56'	黑土地带	山地灌丛带	石砾	冲积物	冲积物	冲积物	冲积物	冲积物	冲积物
301 40° 24° 56' E	301	40	24° 56'	山地灌丛带	山地灌丛带	冲积物						

新民志  
快入石器（編形）

地名	海拔(m)	植被		灌木		草本		水生植物		其他	
		灌木%	草本%	灌木%	草本%	灌木%	草本%	灌木%	草本%	灌木%	草本%
红柳灌丛带	2020	40	24	62(20)	75(20)	5(2)	1(2)	0(2)	0(2)	0(2)	0(2)
白桦灌丛带	2020	40	24	62(20)	75(20)	5(2)	1(2)	0(2)	0(2)	0(2)	0(2)

第34表 窜片觀察表

第35章 石核觀察

角系数%	圆柱形 直角弯头	圆柱形 直角弯头中性点	弯度	弯曲半径	分段	尺寸			弯曲半径 (mm)	弯曲角度 (°)	弯曲率	自然曲率
						内径(d) mm	外径(D) mm	壁厚(t) mm				
205	41	24	777	直角弯头	Ⅰ	41	52	2.27	672	128	0.80	1170
206	41	24	967	直角弯头中性点	Ⅱ	41	52	2.27	672	128	0.80	1170
207	41	24	964	直角弯头中性点	Ⅲ	41	52	2.26	675	128	0.80	1170
				直角弯头	Ⅳ	41	52	2.26	675	128	0.80	1170
				直角弯头中性点	Ⅴ	41	52	2.26	675	128	0.80	1170
				直角弯头	Ⅵ	41	52	2.26	675	128	0.80	1170
				直角弯头中性点	Ⅶ	41	52	2.26	675	128	0.80	1170

第36章 石頭的秘密

第37表 振动器类型观察表

所称%	振动器%	出土地层	部位	厚度	分层	石料	块石(cm)	砾石(cm)	砂土(细)/砾石(粗)(g)	含水量	编号
221	63	25	8G	出土地层	Ⅰ A	砾石	13.71	10.32	267	1.35	0.26
222	63	25	6G18	出土地层中位	Ⅱ b	砾石	15.10	10.49	630	1.44	0.60
223	43	25	9G17	出土地层中位	Ⅲ C	砾石	11.51	9.03	431	1.27	0.49
224	43	25	6G19	出土地层下位	Ⅳ B	砾石	14.00	7.83	425	1.79	0.54

第38表 钻孔器类型观察表

所称%	振动器%	出土地层	部位	钻孔	分层	石料	块石(cm)	砾石(cm)	砂土(细)/砾石(粗)(g)	含水量	编号
225	41	26	7G22	出土地层中位	A	砾石	7.01	7.09	4.69	0.99	0.05
226	41	26	7-G23	出土地层中位	A	砾石	13.61	8.65	3.91	1.69	0.69
227	44	26	5G7	出土地层中位	C	砾石	12.66	7.09	5.86	1.77	0.83
228	44	35	4G21	出土地层中位	C	砾石	8.38	8.21	4.58	1.05	0.56
229	41	26	10G5	出土地层中位	E	砾石	17.99	9.62	6.33	2.87	0.66
230	45	26	7G10	出土地层中位	F1	砾石	15.01	7.20	3.51	2.09	0.77
231	45	36	6G23	出土地层下位	F2	砾石	13.61	6.20	3.29	2.20	0.85

第39表 块石观察表

所称%	振动器%	出土地层	部位	石料	分层	长条(cm)	砾石(cm)	砂土(细)/砾石(粗)(g)	含水量	编号
232	45	26	7G2	出土地层下位	砾石	5.12	4.96	1.97	1.05	0.41

第40表 线刻观察表

所称%	振动器%	出土地层	部位	石料	分层	长条(cm)	砾石(cm)	砂土(细)/砾石(粗)(g)	含水量	编号
233	45	36	6G8	出土地层上位	砾石	9.43	7.50	3.78	2.65	0.29

第41表 石台石料观察表

所称%	振动器%	出土地层	部位	石料	分层	长条(cm)	砾石(cm)	砂土(细)/砾石(粗)(g)	含水量	编号
234	45	36	6G22	出土地层上位	砾石	12.94	10.80	4.27	2.02	0.20

第42表 石块观察表

所称%	振动器%	出土地层	部位	石块	分层	长条(cm)	砾石(cm)	砂土(细)/砾石(粗)(g)	含水量	编号
235	45	25	6G11	出土地层下位	砾石	9.09	7.19	3.27	0.37	0.12
236	45	26	7G7	黑色土	砾石	13.50	12.33	2.05	0.92	1.22

## VI 調査のまとめ

### 1 遺構

今回の調査で検出された遺構数は、縄文時代前期前葉の遺物包含層（計2,141m<sup>2</sup>）、土坑26基、焼上遺構1基、集石遺構2基、ピット4個である。

この中で、遺物包含層は今回の調査の主体となった遺構である。詳細はIV-1で述べたが、遺物の出土状況から「北捨て場」と「南捨て場」の2ヶ所の集中域が認められた（第13図参照）。

北捨て場は、4～7・B～F区に位置し、東西方向48m、南北方向40m、集中域は東西方向31m、南北方向10mの範囲で、面積は1,060m<sup>2</sup>（集中域285m<sup>2</sup>）である。また、南捨て場は、8～10・C～E区に位置し、東西方向48m、南北方向27.5m、集中域は東西方向32m、南北方向22mの範囲で、面積は1,122m<sup>2</sup>（集中域329m<sup>2</sup>）である。

遺物が出土する層位は、基本層序IIa層（10YR3/3暗褐色主体のシルト層）に限られ、この層を搅乱した上位のI層からも若干量の遺物が出土した。層厚は平均して10～30cm、深い地点では50cmほど確認された。IIb層に至ると、十和田中振テフラが3～7%の密度で混入し、土質の締まりが密になる。尾根上区をはじめ、北斜面区、南斜面区でも層序の確認を行ったが（II-4参照）、いずれでも十和田中振テフラの混入するIIb層以下では遺物は確認されなかった。

今回の調査での特記事項として、①遺物出土層が単一層に限定されること、②出土遺物の時期がほぼ縄文時代前期前葉に限定されることが挙げられる。これは言い換えれば、人間活動が主体的に行われた時期が縄文時代前期前葉のみであったとすることができる。

遺物包含層以外の時期不明とした遺構についても、一括堆積が認められた北斜面下位の12基の土坑以外はこの時期に属する可能性がある。

遺跡の推定範囲については、本調査区を含み東西に長い痩せ尾根状の段丘面約200m四方と見られている。

今回の調査の遺構分布状況から、北捨て場は6～7・C～F区、南捨て場は8～10・C～E区に集中域を持つことから考えても、遺跡の中心は本調査区の東側に拡がると思われる。

### 2 遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器大コンテナ8.5箱分（10,510片・94,214.5g）、石器1,726点（うち製品468点）、石製品2点である。

前述したように、出土遺物の主体的な時期は縄文時代前期前葉に属すると見られる。遺物の大半は遺物包含層から出土したものであり、第13図遺物包含層範囲をはじめ、第19図土器重量分布図、第26図剥片出土分布図、第15表剥片出土点数・重量集計表に示した通り、土器・石器ともほぼ同一の分布範囲、分布密度が認められる。

出土土器の大半は胎土に植物性纖維を含んでおり、特徴的な文様帶を持つものではなく、外面に縄文のみを施文する尖底や丸底を呈する土器群である。全体に焼成は良好で、内面調整は一部に指頭圧痕が認められるものの、ナデ・ミガキが施される。

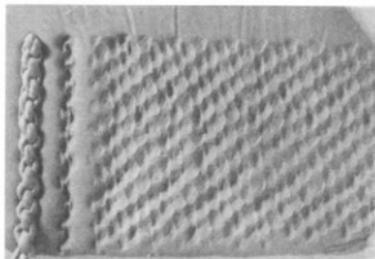
このような特徴を持つ土器群は、これまで岩手県内で二戸市沢内B遺跡第I群1類B種（岩理文

1978)、同市上里遺跡第Ⅱ群1類(岩埋文 1983)、同市中曾根Ⅱ遺跡第Ⅱ群(二戸市教委 1981)、滝沢村耳取遺跡縄文時代前期初頭の土器a~h(滝沢村教委 1986)、同村仏佐Ⅲ遺跡第Ⅱ群2類A種(滝沢村教委 1987)、宮古市千鶴遺跡Ⅲ群(宮古市教委 1989)などで類例が出土しており、いずれも早稻田6類に位置付けられている。

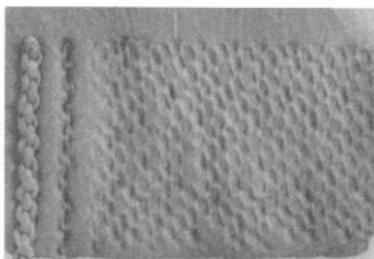
高橋亜貴子や武藤康弘による近年の資料整理によれば(高橋 1992・武藤 2008)、早稻田6類は1956・58年に佐藤達大らによって実施された青森県三沢市早稻田貝塚の調査で、縄文時代前期前葉の第6類土器として報告されたものである。この土器は函館市春日町遺跡第二群土器(春日町式)とはほぼ同様の土器で、佐藤は早稻田6類をA~C類の3つに分類している。

A類は刺突具を押し引きした連続刺突文(類竹管文)が用いられ、口縁部に数条平行して竹管文が施されたもの、胴部と底部近くに波状ないし鋸歯状に幾何学構成に施文されているものである。B類は、器形が波状口縁の尖底深鉢形で、器表面に全面的に縄文を地文として施文し、胎土に纖維が多く含まれる。口縁部は連続刺突文(類竹管文)及び沈線が施され、縄文原体末端の半環状の圧痕と沈線が組み合って、胴部まで文様が拡がるものである。C類は、平縁の深鉢形で底部は丸底か尖底に近く、器面全面に縄文ないしは捺糸文が施文される。また、連続刺突文(類竹管文)が完全になくなり、器面全面に斜縄文や羽状縄文が施される。地文の上に数段の縄文原体末端の半環状の圧痕が高い確率で出現する。

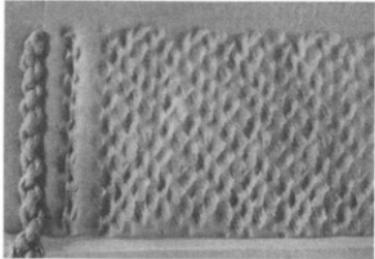
今回の調査で第Ⅱ群とした土器群には、完形に接合・復元できた土器はほとんどなく、大半が破片資料である。しかし、上述の早稻田6A・6B類に見られるような文様はなく、使用原体は単節、複



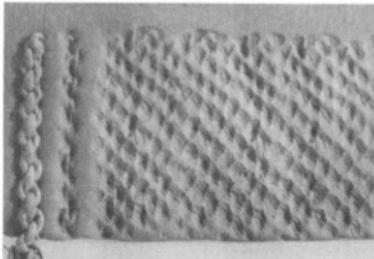
組織A(1を4本L回りに組む)ライト左



組織A(1を4本L回りに組む)ライト右



組織A(rを4本L回りに組む)ライト左



組織A(rを4本L回りに組む)ライト右

高橋 1992 p628-632を参考に作成

節のみがほとんどで、羽状縄文（結束第1種）が25・33・63・120に観察される。また、88・89・91～103のように末端に環の付いた縄（ループ文）が施文されることなどからも、早稻田6C類・春日町式C類に位置付けられよう。

口端（口唇）部に棒状工具による刻み目がある（25～29）、縄文回転圧痕がある（30～36）、指頭圧痕がある（37）、内高外低の切り出し形を呈する（38～40）、断面角形に成形する（52～87）ものがあることは、仏沢III遺跡（滝沢村教委 1987）・千鶴遺跡（宮古市教委 1989）で指摘がある時期差と捉えられる可能性もあるが、今回の調査での層位的な追認は出来なかつた。

また、高橋亜貴子によれば、早稻田6類c（本報告では6C類）には時期的・地域的に限定される「組縄縄文」と呼ばれる原体が多用されるらしい（高橋 1992）。

組縄縄文は、組み方によってX状に交叉させて組む組縄Aと平行に組む組縄Bに分類される。高橋は組縄縄文を「第一に組縄Aを用いても組縄Bを用いても接し合う節が非常に密着しているもの、第二に見方によってはあるいは光のかげんでは条が左下がりにも右下がりにも見えるもの（実像の条がとらえ難く、虚像の条がつくられるもの）、また組縄Aを用いると縱方向に連なる列が認められ、組縄Bを用いるとそれが若干乱れるものとがある」と定義している。

そして、特に組縄Aについて東北地方北部（青森県上北地方～岩手県北上市・遠野市・秋田県大森町）を分布域に持ち、縄文時代前期前半期に限定されるとしている。

これに基づいて出土土器を観察すると、27や41・46などに組縄Aに近似する特徴が認められる。ただし、回転圧痕と思われる土器も多く、一様ではないようである。また、報告者の観察不足から確認できていない場合もあるかもしれない。

岩手県域における該期土器群の位置付けは出土資料が少ないこともあり、依然として不明瞭な部分が多い。今後さらなる検討を要すると思われる。  
(北田)

#### 参考・引用文献

- |         |                                                                      |
|---------|----------------------------------------------------------------------|
| 岩縄文     | 1978 『二戸市沢内II遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第7集                                 |
| 岩縄文     | 1983 『上里遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第55集                              |
| 熊谷常正    | 1989 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」岩手県立博物館研究報告1号 45～65頁                       |
| 熊谷常正    | 2008 「縄文糸痕文系土器（東北地方）」『絶賛縄文土器』104～111頁                                |
| 縄文文化検討会 | 1989 「東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について」<br>第4回縄文文化検討会シンポジウム発表資料 |
| 高橋亜貴子   | 1992 「東北地方縄文時代前期前葉組縄縄文について」『東北文化論のための先史学研究論集』                        |
| 滝沢村教委   | 1986 『耳取遺跡』滝沢村文化財調査報告書第3集                                            |
| 滝沢村教委   | 1987 『仏沢III遺跡』岩手県滝沢村文化財調査報告書第5集                                      |
| 江戸市教委   | 1981 『中曾根II遺跡発掘調査報告書』（本文編）・（図版編）                                     |
| 宮古市教委   | 1989 『千鶴遺跡 晴和62年度発掘調査報告書』宮古市文化財調査報告書16                               |
| 武藤康弘    | 2008 「表縁式・早稲田6類土器」『絶賛縄文土器』210～217頁                                   |

## 附編 自然科学分析

### 1 火山灰同定分析

(株) 火山灰考古学研究所

#### 1 はじめに

東北地方岩手県北部には、十和田火山のほか、洞爺、阿蘇、姶良など北海道や九州など遠方の火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層やテフラが認められた久慈市本波瀬遺跡においても、発掘調査担当者により採取された試料を対象に、テフラ検出分析と火山ガラス比分析さらに火山ガラスの屈折率測定を行って、テフラの検出と指標テフラとの同定を実施し、遺跡の土層の層位や年代に関する資料を収集することになった。分析の対象となった地点は、尾根上西トレンチである。

### 2 テフラ検出分析

#### （1）分析試料と分析方法

尾根上西トレンチにおいて、発掘調査担当者により採取された試料のうち、VIc層より上位の11試料（表1：下位より試料40、試料35、試料32、試料28、試料26、試料22、試料18、試料12、試料8、試料6、試料3）についてテフラ検出分析を行い、試料に含まれる軽石、スコリア（色調が暗い軽石）、火山ガラスなどテフラ粒子の特徴を定性的に求めた。テフラ検出分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料12gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

#### （2）分析結果

テフラ検出分析の結果を表2に示す。尾根上西トレンチの試料のうち、比較的粗粒の軽石が含まれているものは試料6で、最大径4.1mmの黄白色軽石が少量含まれている。

火山ガラスは、試料35、試料32、試料28、試料18、試料12、試料8、試料6、試料3に比較的多く含まれている。試料32に含まれる火山ガラスは、軽石型ガラスや平板状のいわゆるバブル型ガラスで、色調は透明、淡褐色、白色である。試料28に含まれる火山ガラスは、軽石型ガラスやバブル型ガラスで、色調は透明や淡褐色である。試料18に含まれる火山ガラスは、軽石型ガラスやバブル型ガラスで、色調は透明や白色である。試料12に含まれる火山ガラスも軽石型ガラスやバブル型ガラスで、色調は白色、淡褐色、透明である。

試料8の火山ガラスも軽石型ガラスやバブル型ガラスで、色調は黄白色、白色、透明である。こ

表1 テフラ分析試料表

分析試料	尾根上西トレンチの上層
試料3	IIa層
試料6	IIb層
試料8	IIc層
試料12	IVa層
試料18	IVb層
試料22	IVb層
試料26	IVc層
試料28	VIa-V層
試料32	VIa層
試料35	VIb層
試料40	VIc層

の試料には、特徴的に火山ガラスが付着した角閃石が比較的多く含まれている。軽石が認められる試料6に含まれる火山ガラスも、形態は軽石型やバブル型で、色調は白色や透明である。試料6に含まれる火山ガラスも、形態は軽石型やバブル型で、色調は白色や透明である。また、試料3に含まれる火山ガラスは軽石型で、白色や透明を呈する。

### 3 火山ガラス比分析

#### (1) 分析試料と分析方法

テフラ粒子のうち、火山ガラスは大規模な噴火の際に、鉱物などとともにマグマの破片として大量に生産噴出される。しかもその比重や形態などの関係で、とくに遠方に到達する。さらに、マグマの多様性を反映して、形態や色調さらに屈折率、主成分化學組成などに特徴があり、さまざまな分析により特徴を把握しやすい。このことから、テフラを過去の時空指標として利用する火山灰編年学の分野では、とくに火山ガラスの特徴把握が重視される。

そこで、尾根上西トレントのテフラ検出分析の対象となった11試料について、さらに火山ガラス比分析を行って、ガラス質テフラの降灰層準および含まれる火山ガラスの特徴を定量的に記載することになった。火山ガラス比分析の手順は次のとおりである。

- 1) テフラ検出分析処理後の試料について、分析篩により1/4~1/8mmの粒子を篩別。
- 2) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別比率を求める。

#### (2) 分析結果

尾根上西トレントにおける火山ガラス比分析の結果を、ダイヤグラムにして図1に、その内訳を表3に示す。火山ガラス比分析でも、いずれの試料からも火山ガラスを検出できた。ただし、テフラ検出分析で比較的多くの火山ガラスが認められた、試料35、試料18、試料12、試料6に含まれる1/4~1/8mmサイズの粒子におけるその比率はさほど高くなかった。

分析対象試料の中では、試料32により多くの火山ガラスが含まれている(15.6%)。この試料に含まれる火山ガラスは、比率が高い順に透明のバブル型および繊維束状に発泡した軽石型(各6.0%)、

表2 テフラ検出分析結果

直 落 地 点	試 料	軽石・スコリア			量	形 態	色 調	火山ガラス
		量	色 調	最大径				
本流堆溢部	3	-	-	-	++	pm	白、透明	
	6	+	黄白	4.1	++	pm>bw	白、透明	
	8	-	-	-	++	pm>bw	黄白、白、透明	
	12	-	-	-	++	pm>bw	白、淡褐色、透明	
	18	-	-	-	++	pm>bw	透明、白	
	22	-	-	-	-	-	-	
	26	-	-	-	+	pm>bw	透明、淡褐色	
	28	-	-	-	++	pm>bw	透明、淡褐色	
	32	-	-	-	++	pm>bw	透明、淡褐色	
	35	-	-	-	+	pm>bw	透明、淡褐色、白	
	40	-	-	-	+	bw	透明	

++++:とくに多い、+++:多い、++:中程度、+:少ないと、-:認められない。

最大径の単位は、mm. bw:バブル型、pm:軽石型。



図1 尾根上西トレントの火山ガラス比ダイヤグラム

分厚い中間型 (2.0%)、

スポンジ状に発泡した  
軽石型 (1.6%) である。

試料28にも比較的多  
くの火山ガラスが含ま  
れている (8%)。こ  
の試料に含まれる火山  
ガラスは、透明のバブ  
ル型 (5.2%)、繊維束

状に発泡した軽石型および中間型 (各1.4%)、淡褐色のバブル型 (0.4%) である。試料8に含まれる火山ガラスは、繊維束状に発泡した軽石型 (2.0%)、スポンジ状に発泡した軽石型 (1.6%)、透明のバブル型 (1.2%) である。さらに、試料3に含まれる火山ガラスは、スポンジ状に発泡した軽石型 (5.6%)、繊維束状に発泡した軽石型 (2.4%)、透明のバブル型 (0.4%) である。

なお、火山ガラス比分析では透過光を利用してするために、やや淡い色調のバブル型ガラスの色調認定には難しいこともあり、透明のバブル型ガラスは必ずしも無色とは限らない。色調に関しては、テフラ検出分析による記載も考慮する必要がある。

## 4 屈折率測定

### (1) 測定試料と測定方法

尾根上西トレンチの試料のうち、試料32、試料28、試料8、試料3の4試料に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（京都フィッシュン・トラック社製RIMS2000）を利用して、屈折率の測定を実施した。

### (2) 測定結果

測定結果を表4に示す。  
試料32に含まれる火山ガラ  
ス (35粒子) の屈折率 (n)

表4 火山ガラスの屈折率測定結果

連 路	地 点	試 料	火山ガラスの屈折率 (n)			
			尾根上西トレンチ			
本流堆積	尾根上西トレンチ	3	1.498-1.500(4), 1.502-1.510(27), 1.512-1.513(2)			
		8	1.504-1.510(31), 1.512-1.513(2)			
		28	1.496-1.497(2), 1.502-1.512(28)			
		32	1.504-1.510(35)			

温度変化型屈折率測定装置(RIMS2000)による、( )は測定粒子数。

は、1.504-1.510である。試料28に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は bimodal で、1.496-1.497 (2粒子) と 1.502-1.512 (28粒子) の値が得られた。試料8に含まれるほとんど火山ガラス (31粒子) の屈折率 (n) は 1.501-1.510であるが、わずかに 1.512-1.513の値をもつ火山ガラスも少量 (2粒子) 含まれている。試料3に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は trimodal で、1.498-1.500 (4粒子)、1.502-1.510 (27粒子)、1.512-1.513 (2粒子) の値が得られた。

## 5 考 察

テフラ検出分析および火山ガラス比分析により火山ガラスの濃集が認められた層準のうち、II c 層 (試料8) については、屈折率を含む火山ガラスの特徴や本質的な角閃石が目立つことから、約1.2~1.3万年前<sup>\*1</sup>に十和田火山から噴出した十和田八戸テフラ (To-H. 早川, 1983a, Hayakawa, 1985, 町田・新井, 1992) に由来するテフラ粒子が多く含まれていると考えられる。

また、IIa層（試料3）中に比較的多く含まれるテフラ粒子については、層位とガラス質である点で約5,500年前<sup>\*1</sup>に十和田火山から噴出した十和田中摺テフラ（To-Cu、大池ほか、1966、早川、1983b、福田、1986、町田・新井、1992）、または915年に十和田火山から噴出した十和田aテフラ（To-a、大池、1972、町田ほか、1981）に由来する可能性が考えられる。ただし、スponジ状に発泡した軽石型ガラスに富むことや、中間型ガラスがほとんど認められること、さらに比較的高い屈折率の火山ガラスを含むことなどから、前者の可能性がより高いようと思われる。また、屈折率が低い火山ガラスが含まれていることは、To-aが若干混在していることを示唆しているのかも知れない。

なお、本遺跡は、約8,600年前<sup>\*1</sup>に十和田火山から噴出した十和田南部テフラ（To-Nb、大池ほか、1966、中川ほか、1972、町田・新井、1986）の分布軸にはほぼ相当しているが、風化のためか特徴的な軽石粒子はあまり検出されなかった。

断面においてテフラ層として認められたらしいV層（試料28に含まれる）については、層位、噴火の規模の大きさ、テフラの分布、さらに多くの火山ガラスの屈折率などから、約3.2万年前以前に十和田火山から噴出した十和田大不動テフラ（町田・新井、1992、2003）の可能性が考えられよう。この十和田大不動テフラは、下部の十和田ビスケット1降下軽石（To-BP1）と、上位の大不動火碎流堆積物およびそれに関連する降下火山灰（合わせてTo-Of）から構成されている。To-Ofに関しては、岩手県南部での検出例もあるらしいことから（火山灰考古学研究所、未公表資料）、本遺跡周辺に堆積したことはほぼ確実と考えられる。本遺跡の発掘調査でも、このテフラ層に関連して炭化物が検出されていることは、テフラの堆積様式を考える上でも興味深い。ただ、テフラ・カタログでは、To-Ofの上位にある十和田ビスケット2（To-BP2、大池・中川、1979）に含まれる火山ガラスの屈折率の記載がないことや、本遺跡周辺でのテフラの報告例が多くないことにも注意しておく必要があろう。

今回の分析では、それより下位の試料35でも多くの火山ガラスが検出された。火山ガラスの屈折率（n：1.504-1.510）は、To-BP1やTo-Ofのそれ（n：1.505-1.511）に良く似ており、これらのテフラに同定される可能性も考えられる。ただし、試料のなかに纖維束状の構造が直線的に発達することで特徴的な透明な軽石型ガラスが含まれており、従来の報告では知られていない。このような軽石型ガラスについては、屈折率は異なるものの、約4~4.5万年前に支笏カルデラから噴出した支笏第1テフラ（Spfa-1、n：1.500-1.503、町田・新井、2003など）にも含まれている。東北地方沖の太平洋海底から採取された試料の分析で、To-Ofの下位にSpfa-1の層位のあることが確かめられている（青木・新井、2000、町田・新井、2003）。また、約11.2~11.5万年前の洞爺テフラ（Toya、町田・新井、2003など）より下位にあると考えられている久慈市内の風成堆積物中にも、このタイプの火山ガラスで特徴づけられるテフラがあるらしい（早田、未公表資料）。

今後さらに火山ガラスや鉱物の屈折率測定、さらに信頼度の高いEPMAを利用した火山ガラスの主成分化学組成分析などにより、指標テフラとの向上精度の向上が図られることが期待される。

また、本地域周辺には、十和田火山起源のテフラのはか、約2.4~25万年前<sup>\*1</sup>に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976、1992、松本ほか、1987、村山ほか、1993、池田ほか、1995）も降灰しているようである（早田、未公表資料）。ただし、本地域周辺では、最終氷期を中心インボリューションなどによるテフラなどの擾乱が発生しており、とくに十和田大不動テフラやその下位で顕著との報告もあって（町田、1996、町田・新井、2003）、テフラの調査には慎重を期す必要がある。また、火山灰縦年輪では、テフラの一次堆積層を利用するのが基本で、その認定には、分析を担当するテフラ研究者による上層断面の観察が不可欠である。次回には、現地における調査およびサンプリングを期待したい。

## 6 まとめ

久慈市本波遺跡中央トレンチにおいて採取された試料を対象に、テフラ検出分析と火山ガラス比分析を行った。その結果、下位より十和田大不動テフラ (To-BP1およびTo-Of, 約3.2万年前以前) の可能性のあるテフラ層、十和田八戸テフラ (To-H, 約1.2~1.3万年前<sup>\*</sup>)、十和田中振テフラ (To-Cu, 約5,500年前<sup>\*</sup>)などの指標テフラおよびその降灰層準を検出することができた。

\* 1 放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代、AT, To-H, To-Cu の燃年校正年代については、類に約2.6~2.9万年前、約1.5万年前、約6,000年前と考えられている (町田・新井, 2003)。

## 文献

- 青木かおり・新井房夫 (2000) 三陸沖海底コア KH94-3, LM-8 の後期更新世テフラ層序、第四紀研究, 39, p.107-120.
- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部の第四紀年輪、群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 福田友之 (1986) 考古学からみた「中根軽石」の降下年代、弘前大学考古学研究, 3, p.4-15.
- 早川山紀夫 (1983a) 火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰、火山, 28, p.25-40.
- 早川山紀夫 (1983b) 十和田火山中振テフラ層の分布、粒度組成、年代、火山, 第2集, 28, p.263-273.
- Hayakawa, Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo, 60, p.507-592.
- 池田亮子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火碎流中の炭化木樹の加速器質量分析法による  $^{14}\text{C}$  年代、第四紀研究, 34, p.377-379.
- 町田 洋 (1996) 八戸付近の「十和田テフラ層と段丘地形」、日本第四紀学会編「第四紀鳥頭集-日本のテフラ」, p.141.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰-始良Tn火山灰の発見とその意義-、科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス、東京大学出版会, 336p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史郎 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の  $^{14}\text{C}$  年代、第四紀研究, 26, p.79-83.
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 嶋彦 (1993) 四国冲ピストンコア試料を用いた AT火山灰噴出年代の再検討-タンデットロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の  $^{14}\text{C}$  年代、地質雑誌, 99, p.787-798.
- 中川久夫・中馬教光・石塚琢二・松山 力・七崎 修・生出慶司・大池昭二・高橋 一 (1972) 十和田火山発達史概要、岩井淳一教授記念論文集, p.7-17.
- 大池昭二 (1972) 十和田火山東麓における完新世テフラの編年、第四紀研究, 11, p.232-233.
- 大池昭二・中川久夫・七崎 修・松山 力・米倉伸之 (1966) 馬瀬川中・下流沿岸の段丘と火山灰、第四紀研究, 5, p.29-35.

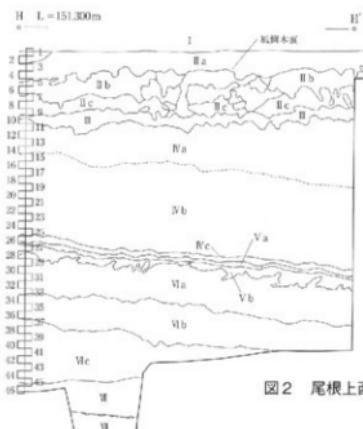


図2 尾根上西トレンチ分析試料採取位置

## 2 放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

### 1 遺跡の位置

本波遺跡は、岩手県久慈市侍浜町本波11-51-32ほか（北緯40°14'20''、東經141°48'36''）に所在する。九戸段丘面である尾根状の微高地に立地する。

### 2 測定対象試料

測定対象試料は、尾根上西トレ深堀のⅤa層から出土した泥炭中の木炭（試料1：IAAA-71749）、7F11グリッドのⅡa層暗褐色土中位から出土した12土器外面付着炭化物（試料2：IAAA-71750）、9D18グリッドのⅡa層暗褐色土上～中位から出土した42土器外面付着炭化物（試料3：IAAA-71751）、7F1グリッドのⅡa層暗褐色土中位から出土した122土器外面付着炭化物（試料4：IAAA-71752）、6C4・9、6E23グリッドのⅡa層暗褐色土中～下位から出土した123土器外面付着炭化物（試料5：IAAA-71753）、尾根上西トレ深堀のⅣc層から出土した泥炭中の木炭（試料6：IAAA-72871）、合計6点である。

### 3 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001Nの水酸化ナトリウム水溶液(80°C)を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸(80°C)を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用して、真空ラインで二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

### 4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も同時にを行う。

### 5 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、

- 1950年を基準年（0yrBP）として選る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。
- 3)付記した誤差は、複数回の測定値について $\chi^2$ 検定が行われ、測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値、みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。
- 4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定されるが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰：パーミル）で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_S$ ：試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_S$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{R}}$

${}^{14}\text{A}_R$ ：標準現代炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度： $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_R$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{R}}$

- $\delta^{13}\text{C}$ は、加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C}$ 濃度 $({}^{13}\text{A}_S = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})$ を測定し、標準試料PDB（白堊紀のペレムナイト類の化石）の測定値との比較から算出した。表中に（加速器）と注記する。
- 5)  $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの ${}^{14}\text{C}$ 濃度 $({}^{14}\text{A}_R)$ に換算した上で計算した値である。(1)式の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$\Delta^{14}\text{C} = {}^{14}\text{A}_R \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$\Delta^{14}\text{C} = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_R - {}^{14}\text{A}_S) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

- 6) pMC (percent Modern Carbon) は、現代炭素に対する試料炭素の ${}^{14}\text{C}$ 濃度の割合を示す表記であり、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、 ${}^{14}\text{C}$ 年代が次のように計算される。

$$\text{T} = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C} / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC} / 100)$$

- 7)  ${}^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

- 8) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ${}^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ${}^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ${}^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma = 68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma = 95.4\%$ )で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一位を四捨五入しない ${}^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv3.10較正プログラム(Bronk Ransey1995 Bronk Ransey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001)を使用した。

## 6 測 定 結 果

<sup>14</sup>C年代は、尾根上西トレ深堀のV a層から出土した泥炭中の木炭（試料1）が $15300 \pm 70$ yrBPである。暦年較正年代（ $1\sigma$ ）は、16810~16670BC (68.2%) である。その直上のIV c層から出土した泥炭中の木炭（試料6:IAAA-72871）は $15370 \pm 70$ yrBPである。暦年較正年代は、16850~16720BC (68.2%) である。2点は<sup>14</sup>C年代の誤差範囲内で一致することから、V a層とIV c層の堆積時期は非常に近い年代であった可能性が高い。

7F11グリッドから出土した12土器付着炭化物（試料2）は $5780 \pm 40$ yrBP、9D18グリッドから出土した42土器付着炭化物（試料3）が $5890 \pm 40$ yrBP、7F1グリッドから出土した122土器付着炭化物（試料4）が $5830 \pm 40$ yrBP、6C4・9、6E23グリッドから出土した123土器付着炭化物（試料5）が $5880 \pm 40$ yrBPである。暦年較正年代（ $1\sigma$ ）は、試料2が4690~4580BC（66.5%）、4570~4560BC（1.7%）、試料3が4795~4715BC（68.2%）、試料4が4770~4650BC（57.8%）、4640~4610BC（10.4%）、試料5が4790~4710BC（68.2%）である。これらの年代は繩文時代前期前葉に相当する。

炭素含有率は1分であり、化学処理および測定内容にも問題がないことから、妥当な年代と考えられる。

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data. Radiocarbon 19, 355-363  
 Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program. Radiocarbon 37(2), 425-430  
 Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon 43(2A), 355-363  
 Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dating. Radiocarbon 43(2A), 381-389  
 Reimer P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. Radiocarbon 46, 1029-1058

第1表 本波VI遺跡放射性炭素年代測定結果

IAA Code No.	品名	純度	IPB年代および元素の組成分析
IAAA-71749	試料採取場所: 岩手県久慈市伊作浜町本道11-51-3213号 本液浦通跡		Libby Age (yrBP) : ± 70 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = -851.1 ± 12 pMC(‰) : = 1489.0 ± 0.2
	試料形態: 木炭、灰炭 試料名(番号): 試料1		δ <sup>14</sup> C(‰) : = -850.5 ± 12 pMC(‰) : = 1491.4 ± 0.1 Age (yrBP) : ± 70 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = -513.5 ± 24 pMC(‰) : = 487.5 ± 24
#1902-1	(参考) δ <sup>13</sup> C の検正なし		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 515.8 ± 23 pMC(‰) : = 484.6 ± 23 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.7 ± 23 pMC(‰) : = 480.2 ± 23
IAAA-71750	試料採取場所: 岩手県久慈市伊作浜町本道11-51-3213号 本液浦通跡		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 521.6 ± 22 pMC(‰) : = 478.4 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.7 ± 23 pMC(‰) : = 480.2 ± 23
	試料形態: 灰化物 試料名(番号): 試料2		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 521.6 ± 22 pMC(‰) : = 478.4 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.7 ± 23 pMC(‰) : = 480.2 ± 23
#1902-2	(参考) δ <sup>13</sup> C の検正なし		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 521.6 ± 22 pMC(‰) : = 478.4 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.7 ± 23 pMC(‰) : = 480.2 ± 23
IAAA-71751	試料採取場所: 岩手県久慈市伊作浜町本道11-51-3213号 本液浦通跡		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 521.6 ± 22 pMC(‰) : = 478.4 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.7 ± 23 pMC(‰) : = 480.2 ± 23
	試料形態: 灰化物 試料名(番号): 試料3		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 521.6 ± 22 pMC(‰) : = 478.4 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.7 ± 23 pMC(‰) : = 480.2 ± 23
#1902-3	(参考) δ <sup>13</sup> C の検正なし		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 521.6 ± 22 pMC(‰) : = 478.4 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.7 ± 23 pMC(‰) : = 480.2 ± 23
IAAA-71752	試料採取場所: 岩手県久慈市伊作浜町本道11-51-3213号 本液浦通跡		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.6 ± 23 pMC(‰) : = 480.6 ± 23 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.6 ± 23 pMC(‰) : = 480.6 ± 23
	試料形態: 灰化物 試料名(番号): 試料4		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.6 ± 23 pMC(‰) : = 480.6 ± 23 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.6 ± 23 pMC(‰) : = 480.6 ± 23
#1902-4	(参考) δ <sup>13</sup> C の検正なし		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.6 ± 23 pMC(‰) : = 480.6 ± 23 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.6 ± 23 pMC(‰) : = 480.6 ± 23
IAAA-71753	試料採取場所: 岩手県久慈市伊作浜町本道11-51-3213号 本液浦通跡		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.6 ± 23 pMC(‰) : = 480.6 ± 23 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 519.6 ± 23 pMC(‰) : = 480.6 ± 23
	試料形態: 灰化物 試料名(番号): 試料5		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 520.0 ± 22 pMC(‰) : = 481.0 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 520.0 ± 22 pMC(‰) : = 481.0 ± 22
#1902-5	(参考) δ <sup>13</sup> C の検正なし		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 520.0 ± 22 pMC(‰) : = 481.0 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 520.0 ± 22 pMC(‰) : = 481.0 ± 22
IAAA-71754	試料採取場所: 岩手県久慈市伊作浜町本道11-51-3213号 小波瀬通跡		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 520.0 ± 22 pMC(‰) : = 481.0 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 520.0 ± 22 pMC(‰) : = 481.0 ± 22
	試料形態: 木炭、灰化物 試料名(番号): 試料6		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 520.0 ± 22 pMC(‰) : = 481.0 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 520.0 ± 22 pMC(‰) : = 481.0 ± 22
#1902-6	(参考) δ <sup>13</sup> C の検正なし		δ <sup>14</sup> C(‰) : = 520.0 ± 22 pMC(‰) : = 481.0 ± 22 Age (yrBP) : ± 40 Libby Age (yrBP) : ± 40 δ <sup>13</sup> C(‰) : (無測定) δ <sup>14</sup> C(‰) : = 520.0 ± 22 pMC(‰) : = 481.0 ± 22

参考 IAAA-71749 に開しましては、本規を処理し測定した結果になります。  
IAAA-72871 に開しましては、AAA 気球を実施し測定した結果になります。

### 3 黒曜石产地同定分析

(株) 第四紀地質研究所

#### 1 分析試料の調整と実験条件

##### (1) 分析試料の調整

原産地黒曜石の分析試料は黒曜石の岩体では岩体のなかで5個所程度選択し、1個所で5~10試料を採取した。分析結果は岩体の中で選択した各個所について1分析値で代表させた。例えば、西餅屋の岩体では孔道内の4個所を4分析値で表示した。岩体が貧弱である場合には1岩体の中で10個以上を採取し、試料数分の分析結果を表示した。岩体が消滅しているものや、明確な岩体としての露頭が認められないものや河床の中の転石あるいは斜面に露出する堆積した黒曜石は10個以上採取し、試料数分の分析結果を表示した。

分析にあたっては、露頭より採取した黒曜石を打ちかき、比較的平滑な面を分析面とする未整形試料を作成した。

##### (2) 実験条件

分析はエネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子製JSX-3200）で行なった。

この分析装置は標準試料を必要としないファンデメンタルパラメータ法(FP法)による自動定量計算システムが採用されており、6°C~92Uまでの元素分析ができ、ハイパワーX線源（最大30kV、4mA）の採用で微量試料～最大290mmφ×80mmHまでの大型試料の測定が可能である。小形試料では16試料自動交換機構により連続して分析できる。分析はパルクFP法でおこなった。FP法とは試料を構成する全元素の種類と濃度、X線源のスペクトル分布、装置の光学系、各元素の質量吸収係数など装置定数や物性値を用いて、試料から発生する各元素の理論強度を計算する方法である。

分析にあたっては、露頭より採取した黒曜石を打ちかき、比較的平滑な面を分析面とする未整形試料をX線照射範囲が約15mmφの試料台に直接のせ分析した。実験条件はパルクFP法（スタンダードレス方式）、分析雰囲気＝真空、X線管ターゲット素材＝Rh、加速電圧＝30kV、管電流＝自動制御、分析時間＝200秒(有効分析時間)である。また、分析にあたっては標準サンプルを分析し、キャリブレーションを行い、装置の正常さを保って行った。

分析対象元素はSi, Ti, Al, Fe, Mn, Mg, Ca, Na, K, P, Rb, Sr, Y, Zrの14元素、分析値は黒曜石の含水量=0と仮定し、酸化物の重量%を100%にノーマライズし、表示した。

地質学的には分析値の重量%は小数点以下2桁で表示することになっているが、微量元素のRb, Sr, Y, Zrは重量%では小数点以下3~4桁の微量となり、小数点以下2桁では0と表示される。ここでは分析装置のソフトにより計算された小数点以下4桁を用いて化学分析結果を表示した。

岩石の化学組成を構成する主要元素と微量元素の中から、岩石の骨格となるSiとAl、有色鉱物の主要元素であるFe, Ca、無色鉱物の主要元素であるNaとKの関連からK、副成分鉱物のイルメナイトからFeとTi、微量元素ではRbとSrの各元素組み合わせにより黒曜石を分類する図を作製した（周藤他、2002）。基本的には主要元素の各元素が重複しない組み合わせとしたが、Fe, Mn, Tiは鉄質関連として相関性の高い元素であり、TiはFeとMnの2元素との対比となっている。主要元素と微量元素の酸化物濃度（重量%）でSiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-TiO<sub>2</sub>-K<sub>2</sub>O-CaOの3組、積分強度でRb-SrOの組み合わせで図を作成した。

## 2 分 析 結 果

第1表化学分析表には平成19年度の本波<sup>Ⅶ</sup>遺跡より出土した黒曜石石器と剥片の分析結果と原産地対比を記載した。

1) 本波<sup>Ⅷ</sup>遺跡より出土した黒曜石製石器と剥片は第2表原産地対比表に示すように、石鎚は深浦産で剥片は被熱不明である。

2) 本版VII-2と3の剥片は肉眼的には表面に薄い膜が張ったようで透明感が乏しい。この2個は共に  $K_2O$  の値が 7~8% と高く、どの原産地黒曜石の領域にも属さない。被熱を受ける際(焼き火のおき)の灰の成分が黒曜石(ガラス)の表面が融ける際に取り込まれ表面の化学組成が変化する。灰に含まれる K(カリウム) がガラス表面で融けて融合し、化学組成を変化させるもので、そのため  $K_2O$  の値が高くなる。

引用文献

原藤賢治・小山内康人 2002 基立出版、記載岩石学上、5-20.

地質調査所 石岩標準試料の測定結果						
JX-3200型 ニュートンアライザ (EDXRF 法)						
当社名: 横河電機製作所 製造年: (%)						
Element	JG-1a	(EDXRF)	JG-2	(EDXRF)	JG-3	(EDXRF)
SiO <sub>2</sub>	74.3	72.10	76.80	76.15	77.29	67.63
TiO <sub>2</sub>	0.26	0.28	0.044	0.05	0.48	0.40
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	14.3	14.27	12.47	12.90	15.48	15.33
T Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	2	2.14	0.97	1.06	3.69	3.69
MnO	0.057	0.06	0.06	0.02	0.071	0.07
MgO	0.69	0.94	0.037	0.08	1.79	2.05
CaO	2.13	2.13	0.77	0.73	3.67	3.67
Na <sub>2</sub> O	3.37	3.88	3.51	3.40	3.96	4.21
K <sub>2</sub> O	3.96	4.15	4.71	4.96	2.64	2.68
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.088		0.002		0.122	
Element	JF-1	(EDXRF)	JF-2	(EDXRF)		
SiO <sub>2</sub>	66.69	67.27	65.3	65.60		
TiO <sub>2</sub>	0.005			0.005		
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	13.98	17.27	15.8	17.79		
T Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.6	0.69	0.66	0.65		
MnO	0.001		0.001			
MgO	0.006		0.001*			
CaO	0.93	1.01	0.09			
Na <sub>2</sub> O	3.37	3.29	2.39	2.71		
K <sub>2</sub> O	9.99	10.87	12.94	13.79		
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.61		0.003*			
Element	JF-1	(EDXRF)	JF-2	(EDXRF)		
SiO <sub>2</sub>	75.45	76.74	75.69	75.89		
TiO <sub>2</sub>	0.11	0.11	0.07	0.06		
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	12.83	12.22	12.72	12.92		
T Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.89	0.90	0.77	1.03		
MnO	0.099	0.11	0.112	0.02		
MgO	0.52	0.52	0.52	0.17		
CaO	0.46	0.70	0.5	0.72		
Na <sub>2</sub> O	4.02	4.49	3.98	4.26		
K <sub>2</sub> O	4.41	4.56	4.45	4.94		
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.021		0.012			

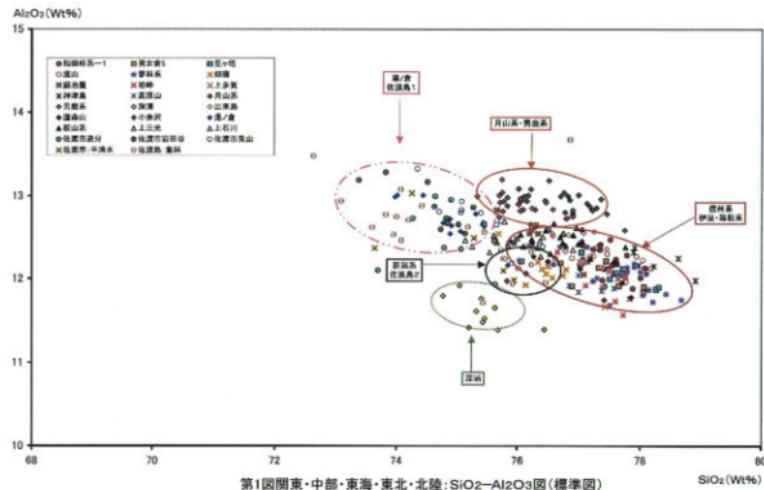
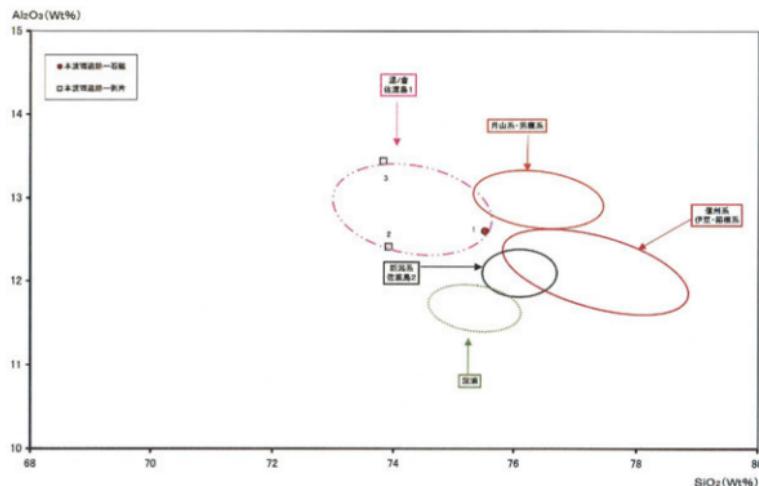
第2表 標準試料分析値対比表

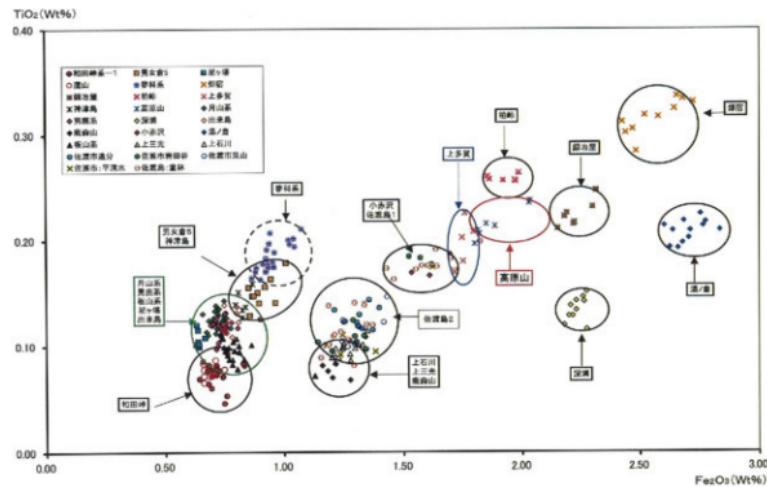
第1表 化学分析表

試料名	Na2O	MgO	Al2O3	SrO	P2O5	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3	Rb2O	SrO	Y2O3	ZrO2	Total	Rb/Sr	Sr/Bd	原产地	岩種	種別
H-1	46.677	0.0000	12.6067	75.5835	0.0000	43.5555	0.0660	0.1620	0.0145	2.3171	0.0100	0.0032	0.0011	0.0775	100.0000	741	235	深海	黑雲母	石榴石
H-2	3.1485	0.0000	12.4145	73.9177	0.2865	7.7240	0.0696	0.1663	0.0169	1.2999	0.0266	0.1613	0.0011	0.0717	100.0000	1506	772	熱液不純	黑雲母	斜長石
H-3	1.7955	0.0000	3.4413	73.2862	0.4890	7.9545	0.0542	0.1765	0.0141	1.2256	0.0245	0.1639	0.0011	0.0814	99.9999	1514	839	熱液不純	黑雲母	斜長石

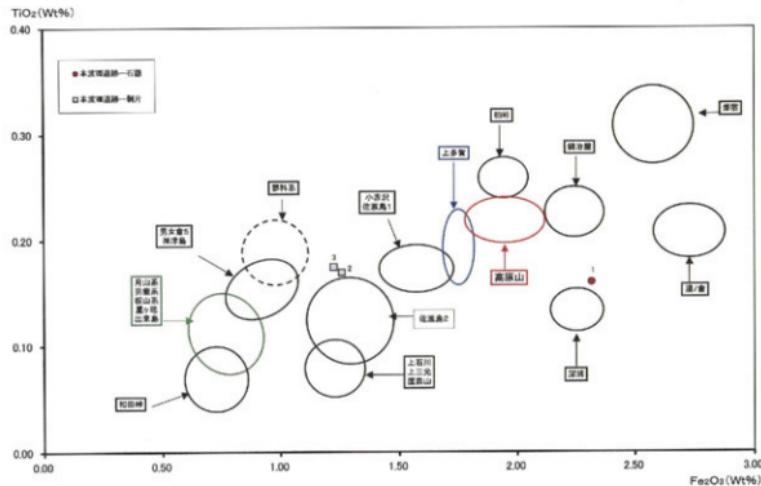


### 第1図 原産地位置図

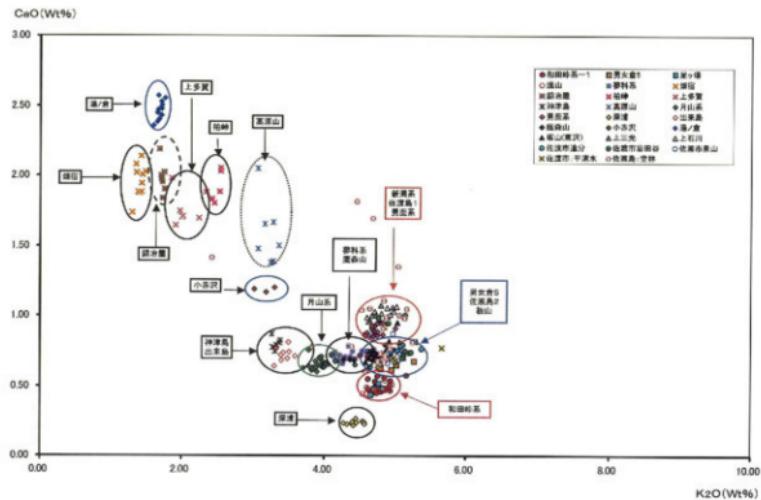
第2-1図 関東・中部・東海・東北・北陸 : SiO<sub>2</sub>—Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図 (標準図)第2-2図 関東・中部・東海・東北・北陸 : SiO<sub>2</sub>—Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>図 (標準図)



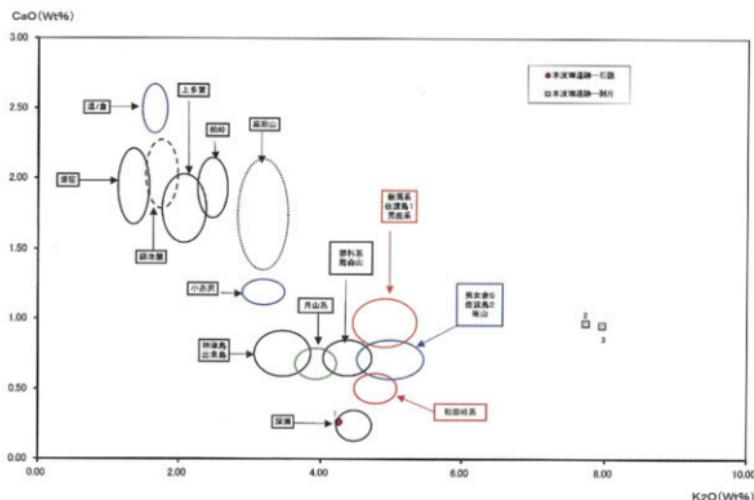
第3-1図 関東・中部・東海・東北・北陸： $\text{Fe}_2\text{O}_3-\text{TiO}_2$ 図（標準図）



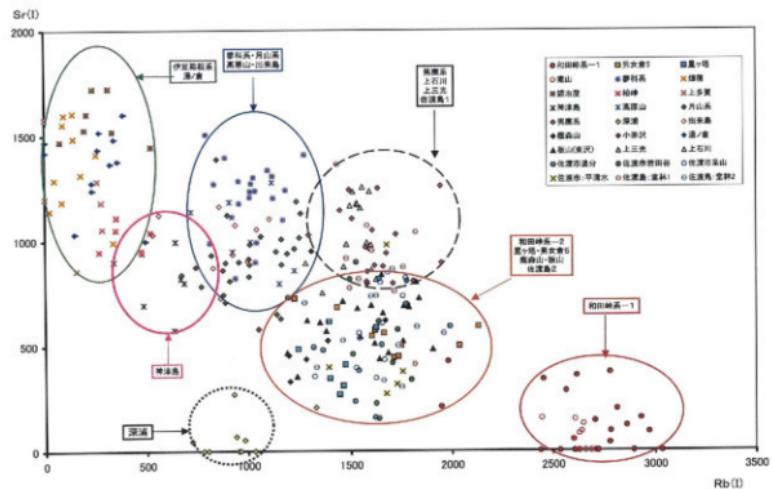
第3-2図 関東・中部・東海・東北・北陸： $\text{Fe}_2\text{O}_3$ - $\text{TiO}_2$ 図（標準図）



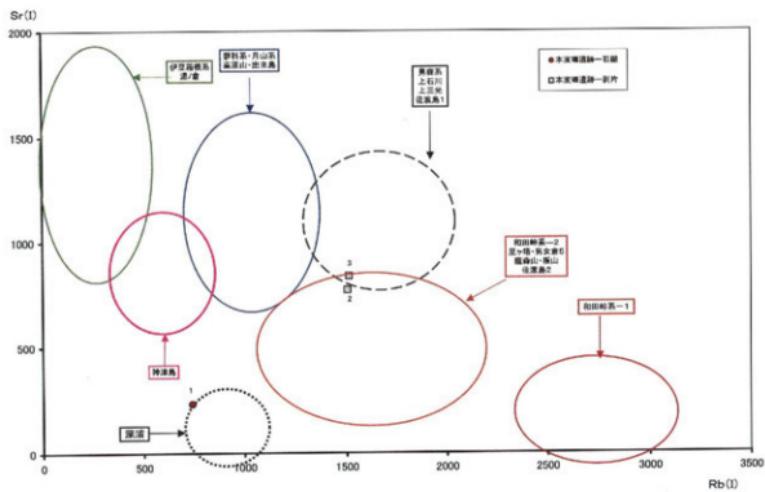
第4-1図 関東・中部・東海・東北・北陸： $K_2O-CaO$ 図（標準図）



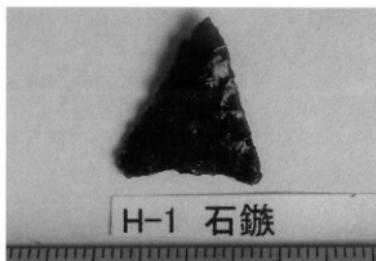
第4-2図 関東・中部・東海・東北・北陸：K-O-CaO図（標準図）



第5-1図 関東・中部・東海・東北・北陸：Rb-Sr図（標準図）

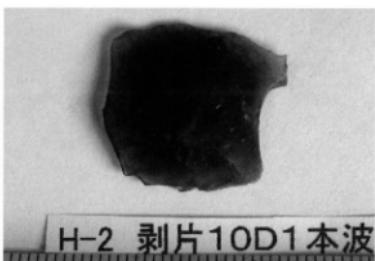


第5-2図 関東・中部・東海・東北・北陸：Rb-Sr図（標準図）



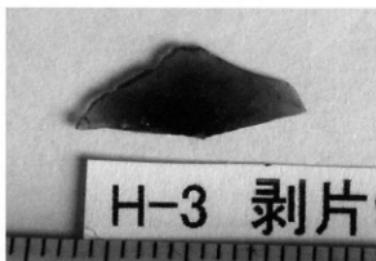
H-1 石鎌

試料1 (173)



H-2 剥片 10D1 本波

試料2 (203)



H-3 剥片

試料3 (204)

### 3 報告者所見

今回の調査で出土した黒曜石製石器は分析試料として提示した3点のみである。173石鎌(試料1)、203・204(試料2・3)はいずれも尾根上区南側9D・10Dグリッドから出土した。

被熱した剥片が出土していることから、搬入原石を用いた石器製作が行われていた可能性があるが、出土数が少量であるため、一概に言い切れない。今回の調査からは製品としての搬入も考える必要がある。(北田)

第3表 産地同定黒曜石観察表

試料No	指観No	記載No	写真No	出土地点	層位	器種	石材	石材产地	法量			備考	
									長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
本波Ⅰ-1	173	38	22	9D17	II a層暗褐色上位	石鎌	黒曜石	青森県深浦	1.80	1.55	0.28	0.6	
本波Ⅱ-2	203	40	24	9D21	II a層暗褐色上～中位	剥片	黒曜石	不明	(0.59)	(1.46)	(0.15)	0.1	被熱
本波Ⅲ-3	204	40	24	10D1	II a層暗褐色上位	剥片	黒曜石	不明	1.88	(2.00)	0.32	1.2	被熱



遺跡遠景（西から）



遺跡遠景（直上、上が北）

写真図版1　遺跡遠景

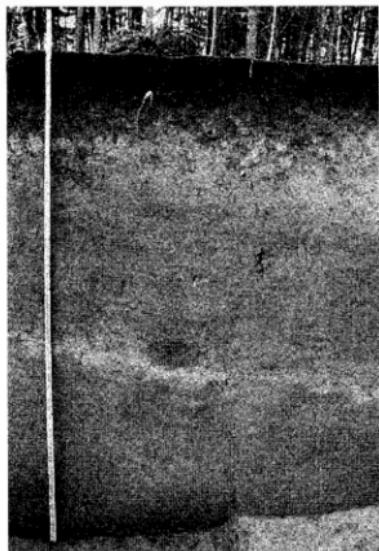


遺跡近景（直上、左が北）

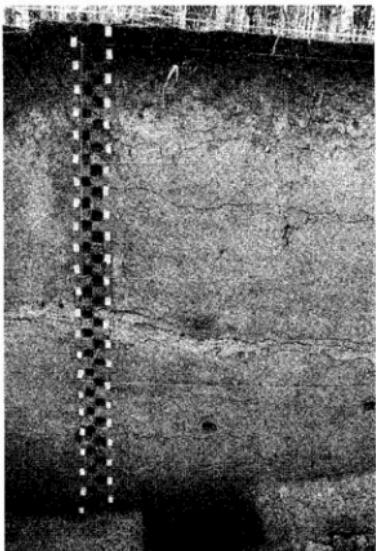


尾根上西トレント延長分深掘 断面（東から）

写真図版2 遺跡近景、尾根上西側トレント深掘



尾根上西トレンチ延長分深掘 断面（東から）



尾根上西トレンチ延長分深掘サンプル採取 断面（東から）



北斜面北端基本土層 断面（東から）



尾根上西側北基本土層 断面（東から）



尾根上西側中央基本土層 断面（東から）



尾根上西側南基本土層 断面（東から）

### 写真図版3 基本土層（1）



北斜面東トレンチ 平面（南から）



北斜面東トレンチ 断面（西から）



北斜面中央トレンチ 平面（南から）



北斜面中央トレンチ 断面（西から）



北斜面西トレンチ 平面（南から）



北斜面西トレンチ 断面（西から）



尾根上東トレンチ 平面（西から）



尾根上東トレンチ 断面（南から）

#### 写真図版4 基本土層（2）

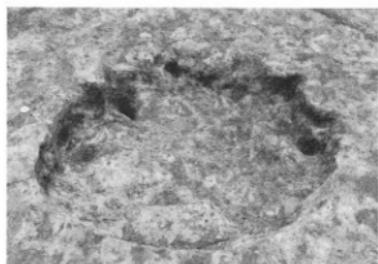


尾根上東側遺物包含層調査終了 平面（西から）

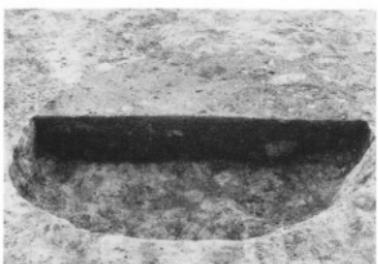


尾根上西側遺物包含層調査終了 平面（東から）

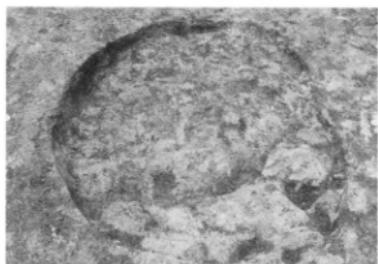
写真図版5 尾根上遺物包含層



1号土坑 平面（東から）



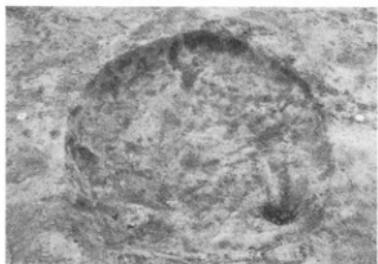
1号土坑 断面（東から）



2号土坑 平面（東から）



2号土坑 断面（東から）



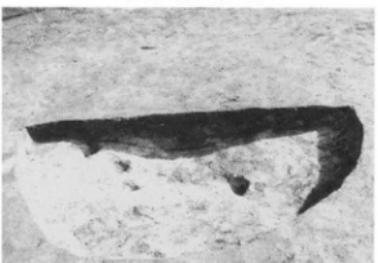
3号土坑 平面（東から）



3号土坑 断面（東から）

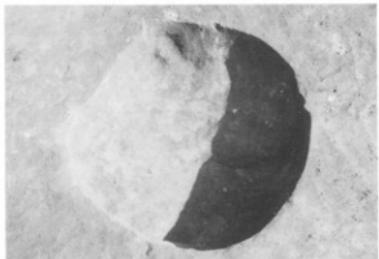


4号土坑 平面（西から）



4号土坑 断面（西から）

写真図版6 1～4号土坑



5号土坑 平面（西から）



5号土坑 断面（西から）



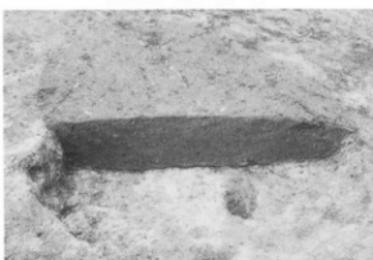
6号土坑 平面（西から）



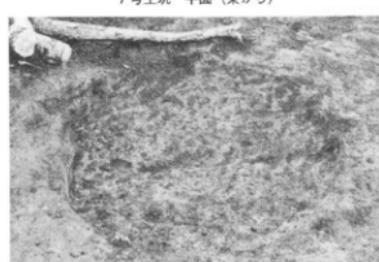
6号土坑 断面（西から）



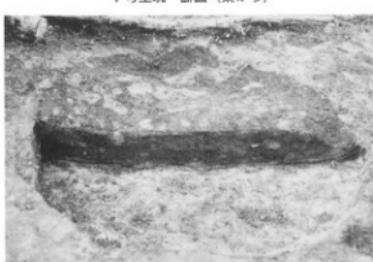
7号土坑 平面（東から）



7号土坑 断面（東から）



8号土坑 平面（東から）



8号土坑 断面（東から）

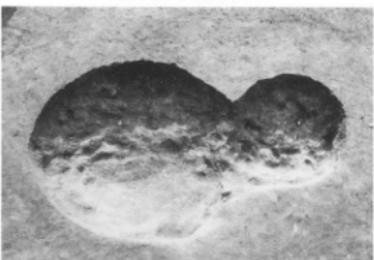
写真図版 7 5～8号土坑



9号土坑 平面（東から）



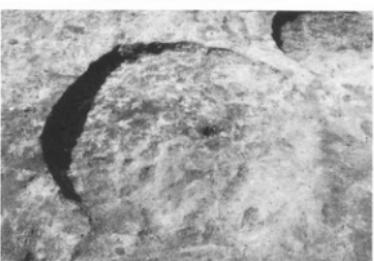
9号土坑 断面（東から）



10・11号土坑 平面（東から）



10・11号土坑 断面（東から）



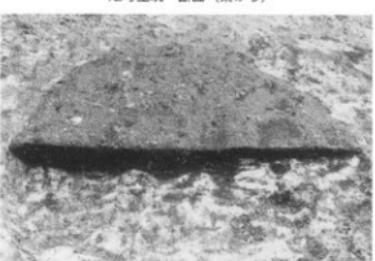
12号土坑 平面（東から）



12号土坑 断面（東から）



13号土坑 平面（東から）

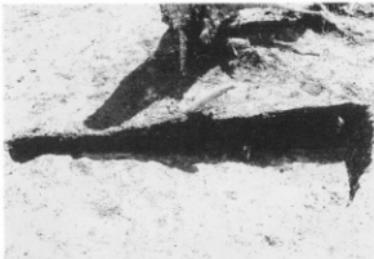


13号土坑 断面（東から）

写真図版8 9～13号土坑



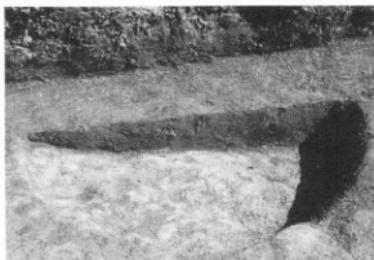
14号土坑 平面（南西から）



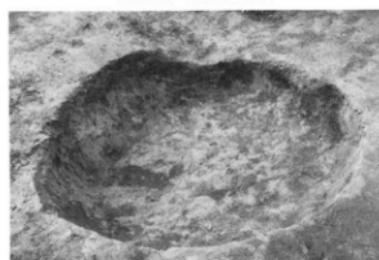
14号土坑 断面（北西から）



15号土坑 平面（西から）



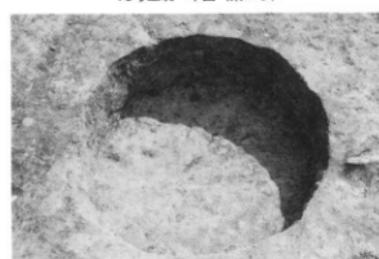
15号土坑 断面（西から）



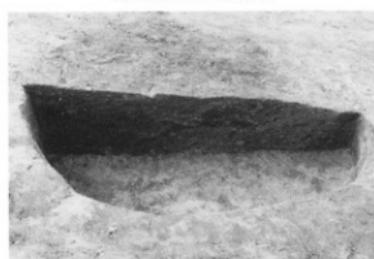
16号土坑 平面（東から）



16号土坑 断面（東から）

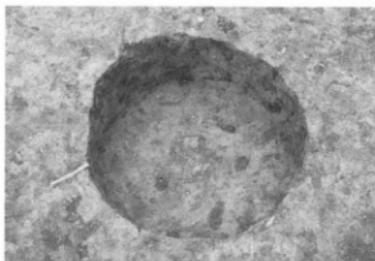


17号土坑 平面（南から）



17号土坑 断面（東から）

写真図版9 14~17号土坑



18号土坑 平面（南から）



18号土坑 断面（東から）



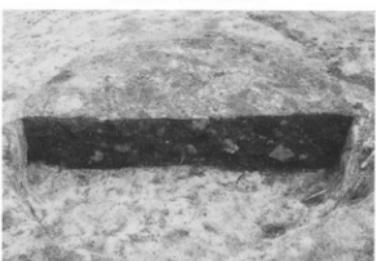
19号土坑 平面（北から）



19号土坑 断面（東から）



20号土坑 平面（西から）



20号土坑 断面（西から）



21号土坑 平面（東から）



21号土坑 断面（東から）

写真図版10 18~21号土坑



22号土坑 平面（東から）



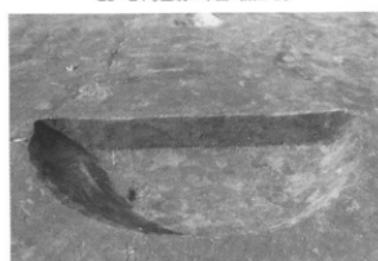
22号土坑 断面（東から）



23・24号土坑 平面（東から）



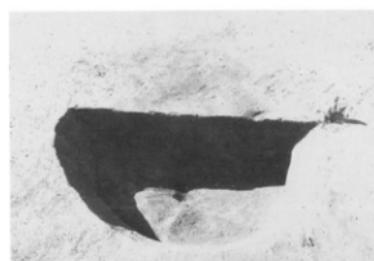
23号土坑 断面（東から）



24号土坑 断面（東から）



25号土坑 平面（東から）

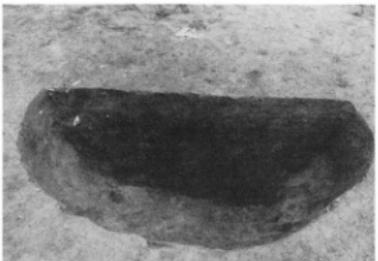


25号土坑 断面（東から）

写真図版11 22~25号土坑



26号土坑 平面（西から）



26号土坑 断面（西から）



1号集石 平面（南から）



1号集石 断面（南から）



2号集石 平面（東から）



2号集石 平面（南から）

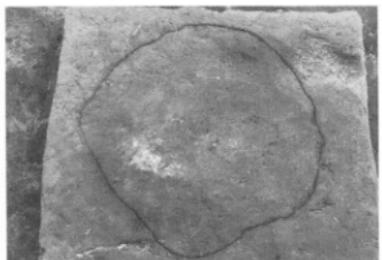


2号集石 断面（東から）

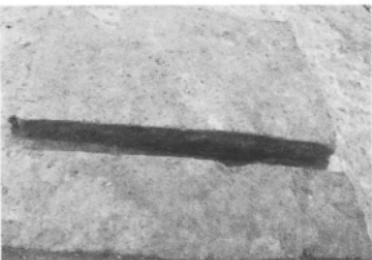


2号集石 断面（南から）

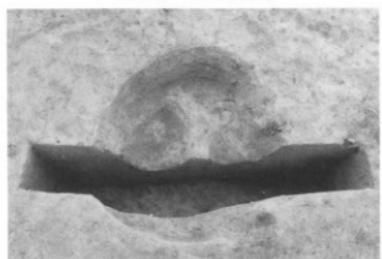
写真図版12 26号土坑、1・2号集石



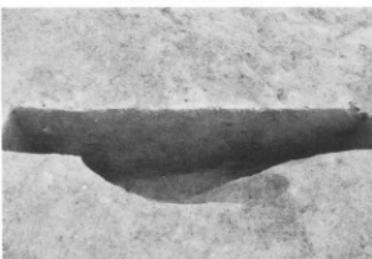
1号焼土 平面（北から）



1号焼土 断面（東から）



1号ピット 平面（南から）



1号ピット 断面（南から）



2号ピット 平面（東から）



2号ピット 断面（東から）

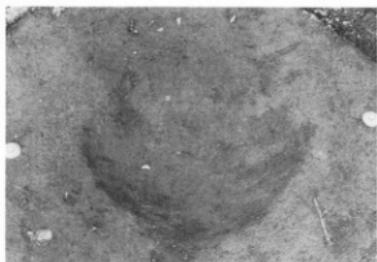


3号ピット 平面（南西から）



3号ピット 断面（南西から）

写真図版13 1号焼土、1～3号ピット



4号ピット 平面（南から）



4号ピット 断面（南から）



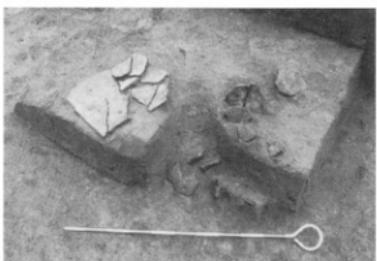
6E17 II a層暗褐下位遺物集中 平面（北から）



7E5土器集中 平面（東から）



7E10土器集中 平面（西から）



9D16 II a層暗褐中位遺物集中 平面（西から）

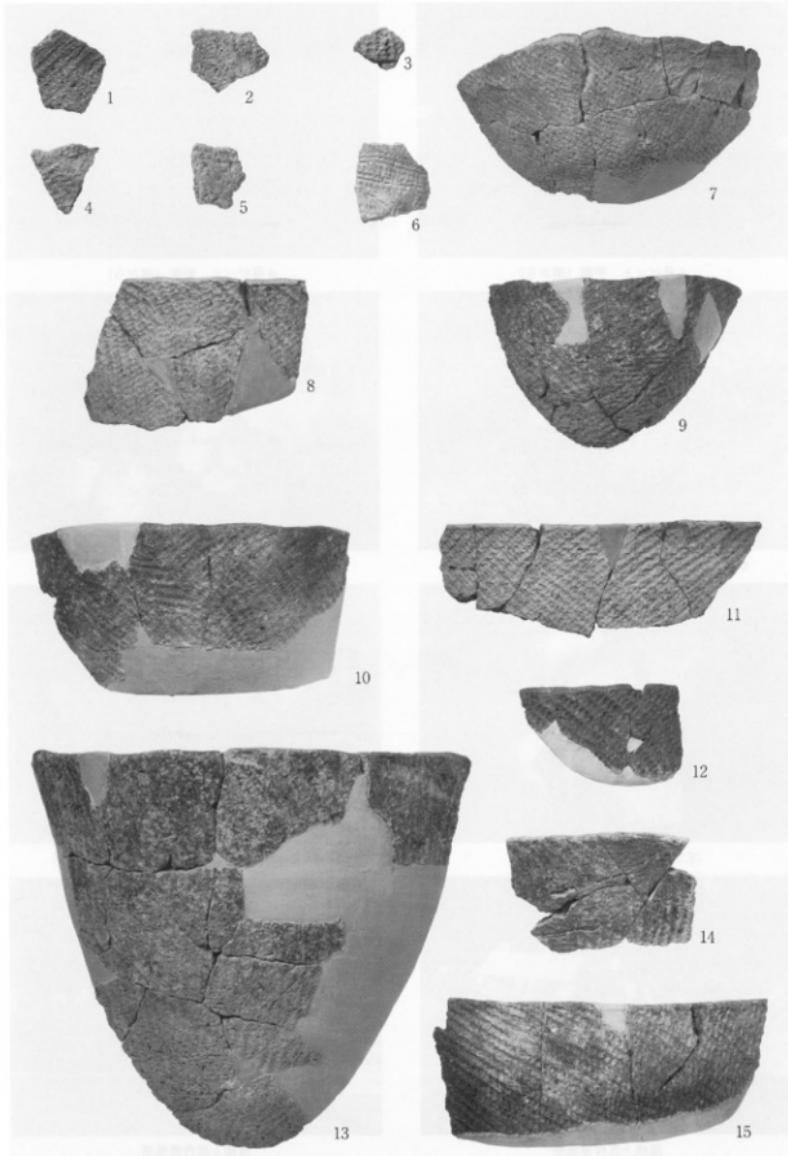


尾根上区作業風景



尾根上区作業風景

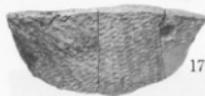
写真図版14 4号ピット、遺物出土状況、作業風景



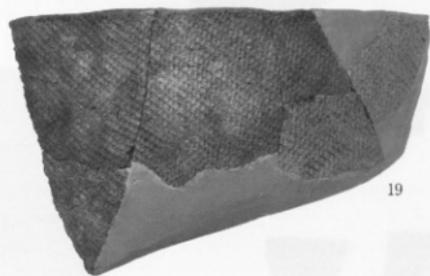
写真図版15 出土土器（1）



16



17



19



18

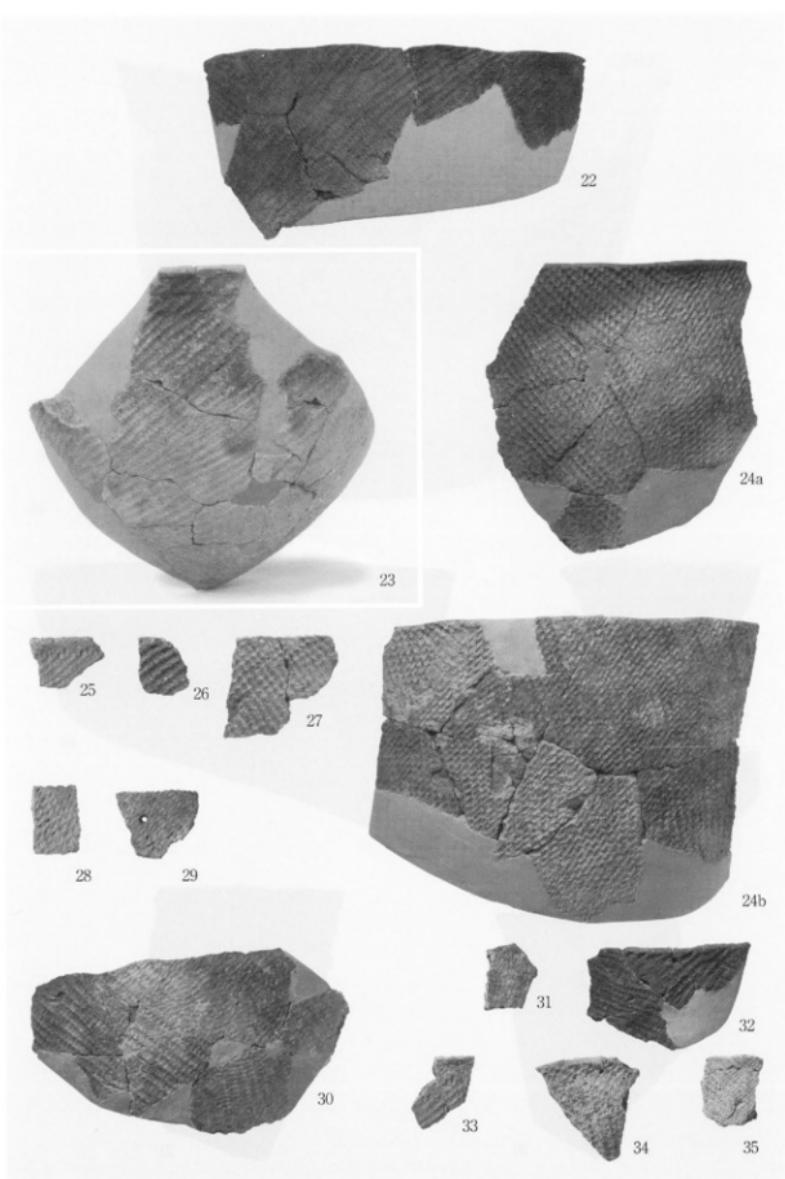


20

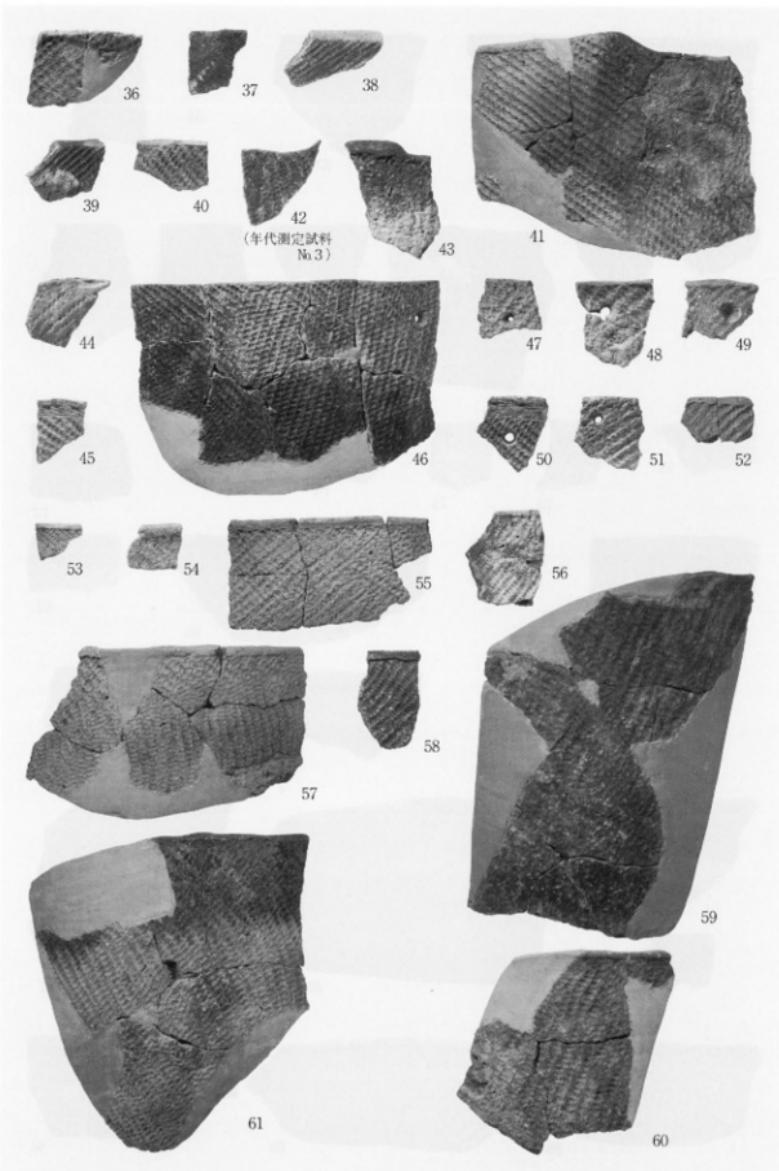


21

写真図版16 出土土器（2）



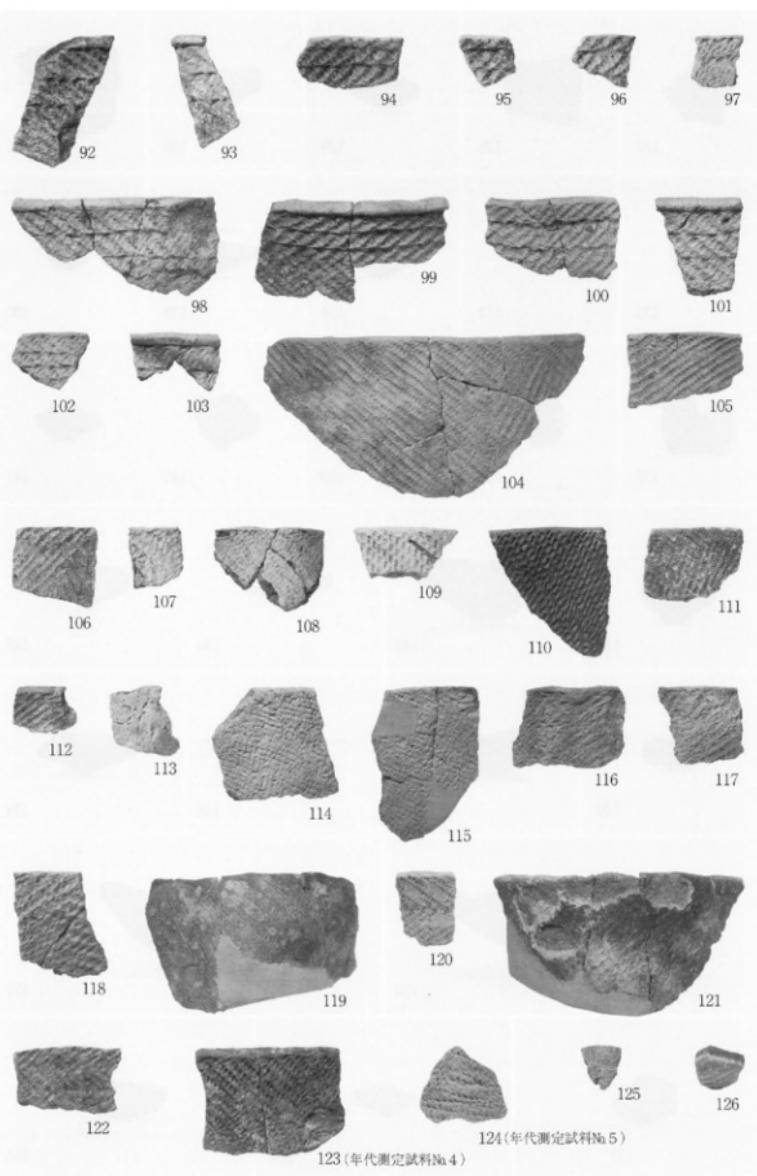
写真図版17 出土土器 (3)



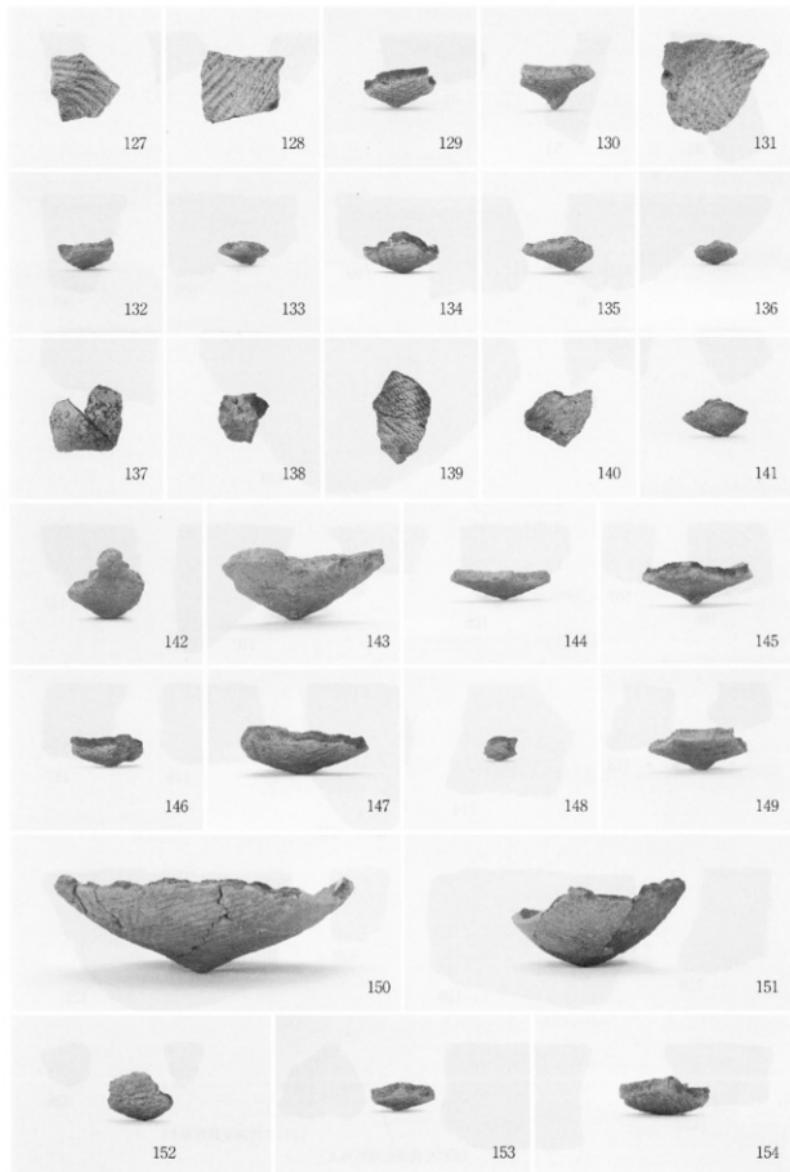
写真図版18 出土土器 (4)



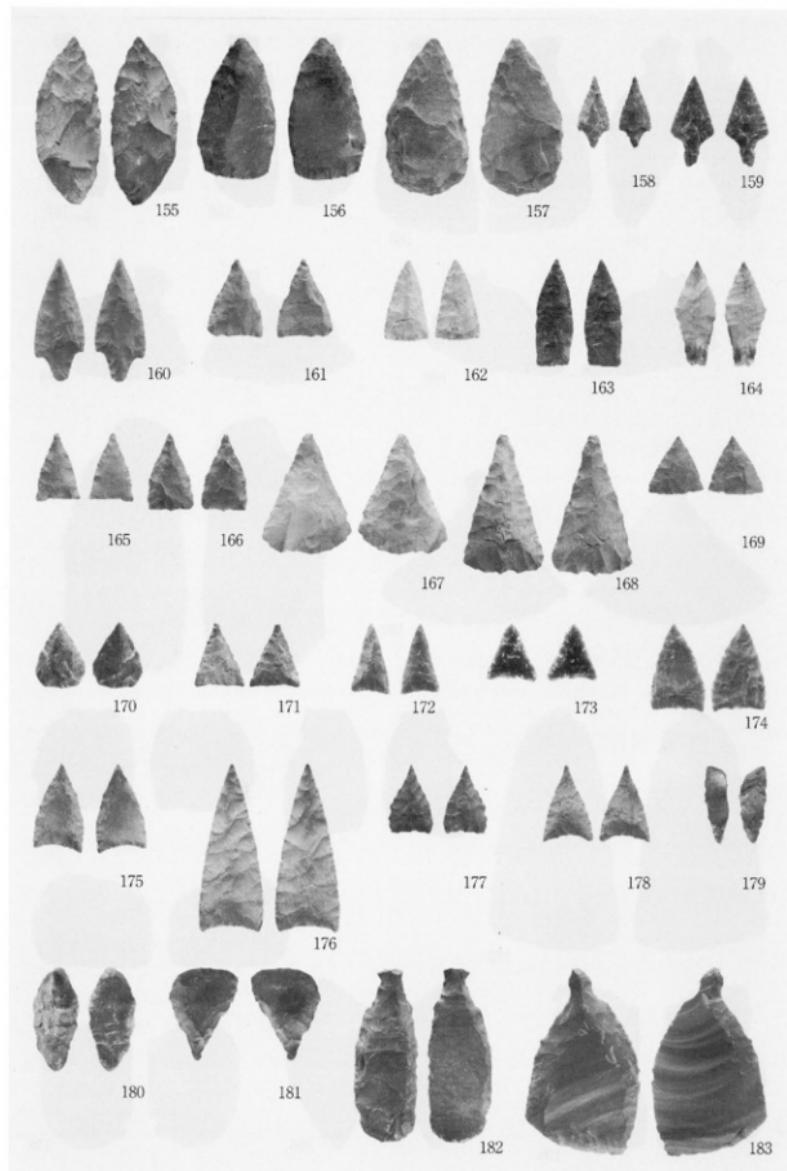
写真図版19 出土土器（5）



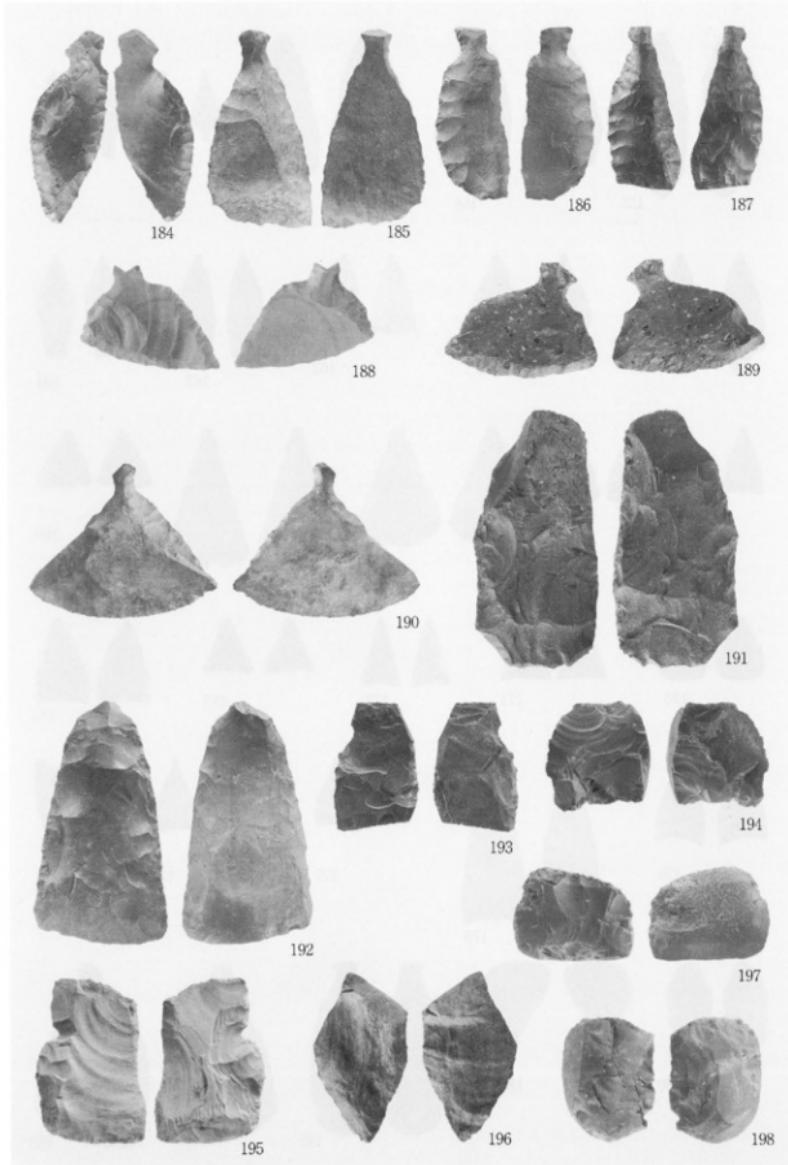
写真図版20 出土土器（6）



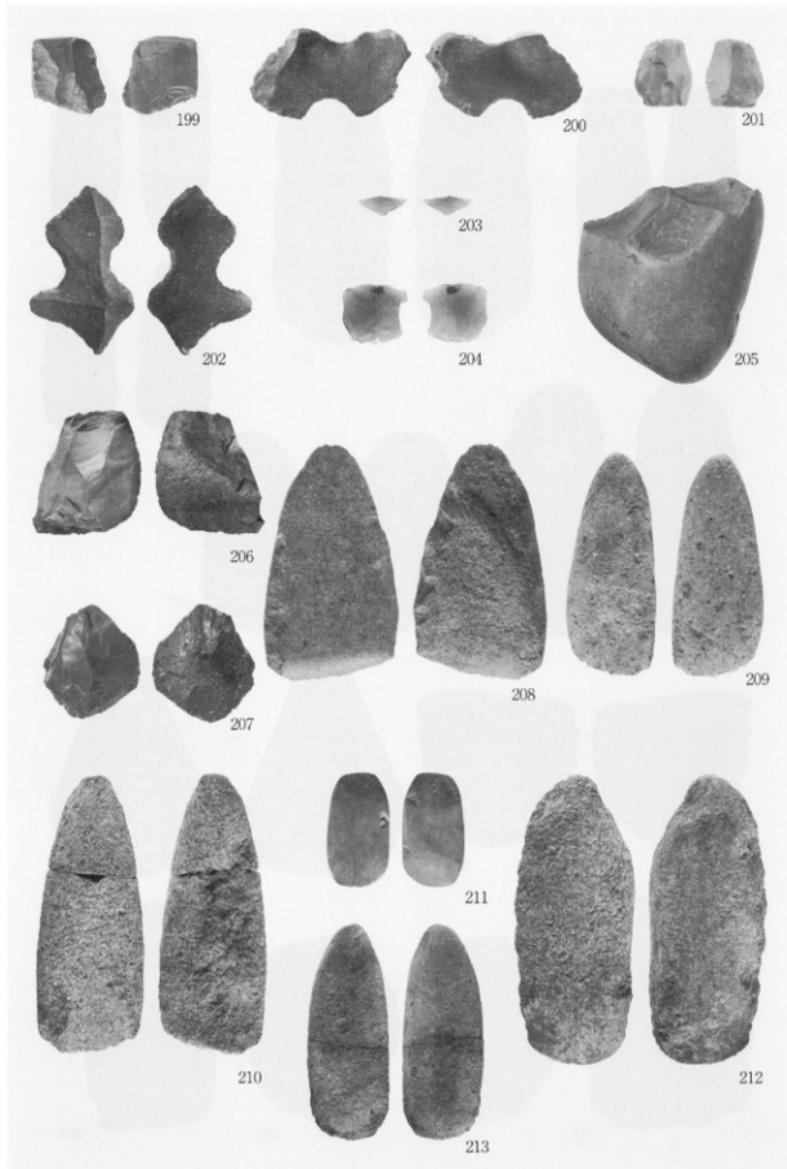
写真図版21 出土土器 (7)



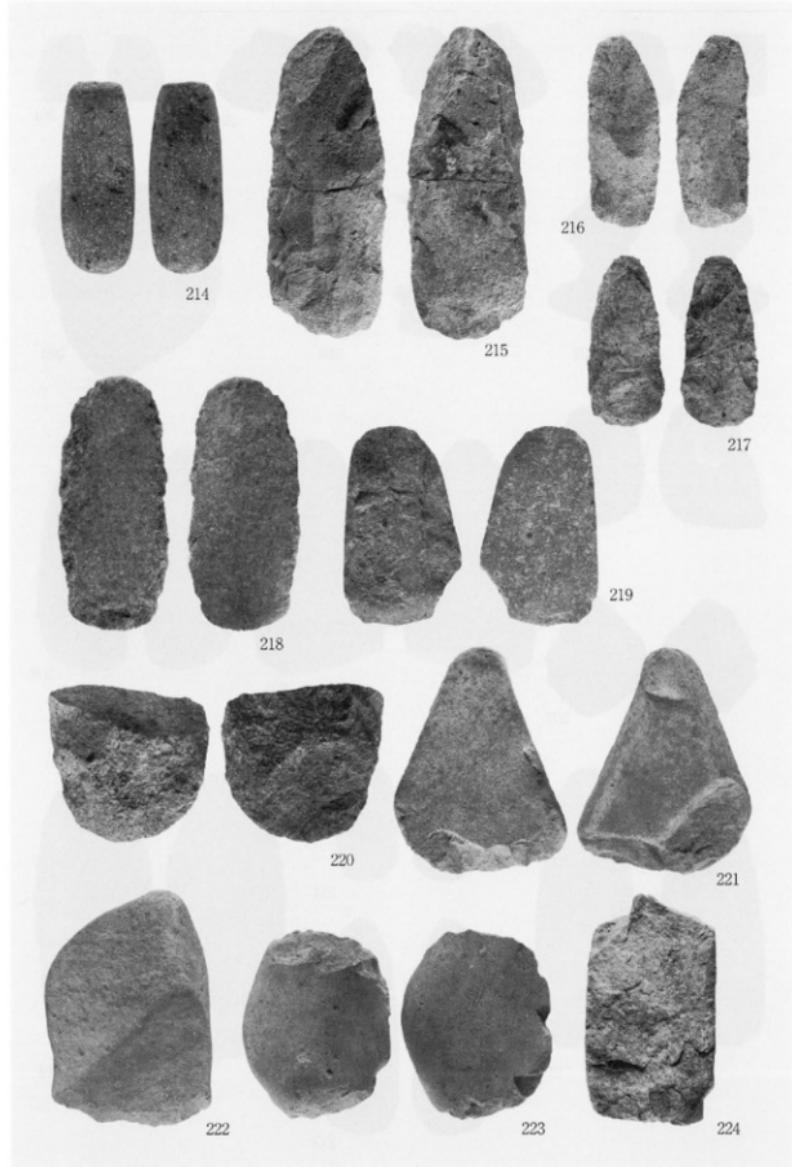
写真図版22 出土石器（1）



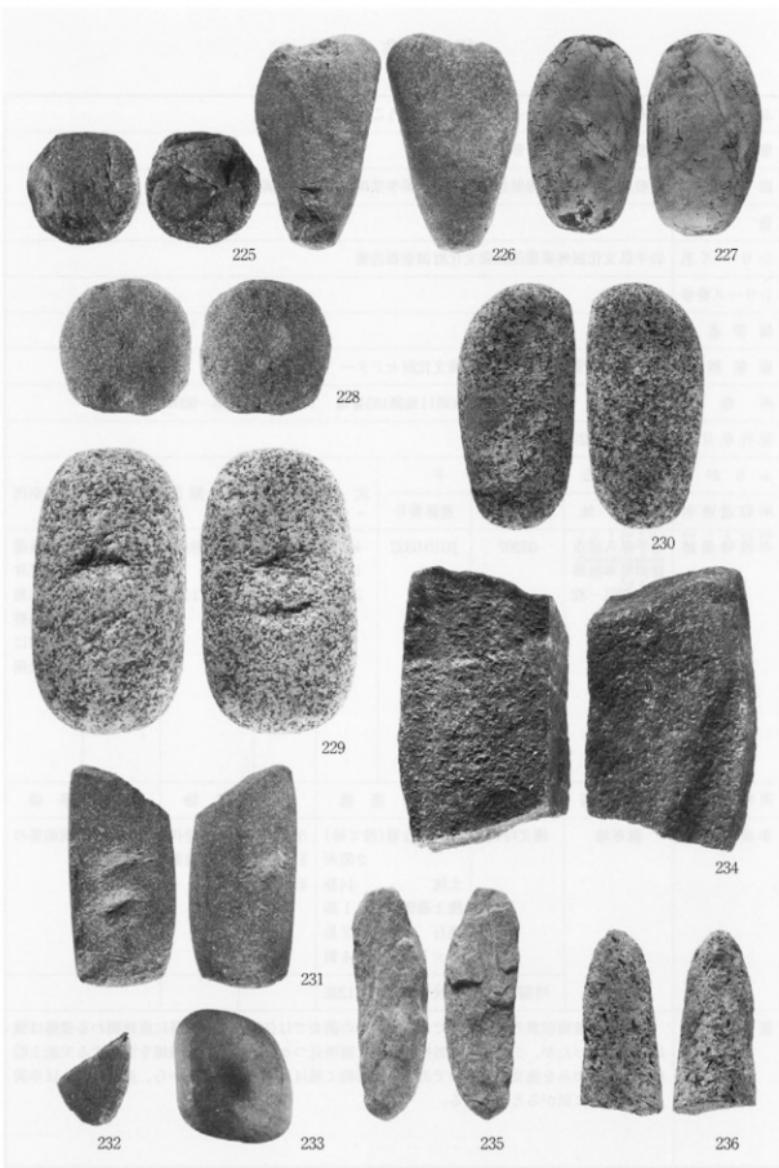
写真図版23 出土石器（2）



写真図版24 出土石器（3）



写真図版25 出土石器（4）



写真図版26 出土石器（5）

## 報告書抄録

ふりがな	ほんなみ8いせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	本波遺跡発掘調査報告書							
副書名	一般県道侍浜夏井線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第536集							
編著者名	北田 熊							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2009年2月27日							
ふりがな	ふりがな コード							
所収遺跡名	所 在 地	市 長 村	遺 跡 番 号	北 緯	東 經	調 査 期 間	調 査 面 積	調査原因
本波Ⅳ遺跡	岩手県久慈市侍浜町本波第11地割51-32ほか	03207	JG10-0332	40度14分20秒	141度48分36秒	2007.08.01 ~ 2007.11.29	5,700m <sup>2</sup>	一般県道侍浜夏井線緊急地方道路整備事業に係る発掘調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項			
本波Ⅳ遺跡	散布地	縄文時代	遺物包含層(捨て場) 2箇所 土坑 14基 焼土遺構 1基 集石 2基 ビット 4個	土器 石器 石製品	縄文時代 前期前葉	縄文時代前期前葉の土器捨て場		
		時期不明	土坑 12基					
要 約	縄文時代前期前葉の單一遺跡である。今回の調査では住居跡など集落に直接関わる遺構は検出されなかったが、小規模な土器捨て場が2箇所見つかった。遺物は纖維を混入する尖底土器群で、縄文のみを施すものである。土器捨て場は東側に偏ることから、遺跡の中心は本調査区の東側に折がると思われる。							

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書536集

**本波VIII遺跡発掘調査報告書**

一般県道侍浜夏井線緊急地方道路整備事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成21年2月23日

発 行 平成21年2月27日

- 編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地  
電話 (019) 638-9001
- 発 行 岩手県久慈地方振興局土木部  
〒028-8042 岩手県久慈市八日町1-1  
電話 (0194) 53-4990
- (財)岩手県文化振興事業団  
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号  
電話 (019) 654-2235
- 印 刷 株式会社 五六堂印刷  
〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目16番15号  
電話 (019) 654-5610

